㈶広島市未来都市創造財団発掘調査報告書　第2集

上ヶ原遺跡・上ヶ原第34号古墳

－広島市安佐北区可部町大字中野所在－

2011

財団法人広島市未来都市創造財団

はしがき

広島市安佐北区の可部地区は，四方を山に囲まれた景観の元，太田川や根谷川，大毛寺川などが流れ，中心街や住宅地が形成されています。この可部地区は，古墳群や中世の山城などの遺跡が多いことでも知られています。また，近世には雲石街道が通る交通の要衝で，町屋が今も残ることも加え，歴史的な町としても認知されています。

このような可部地区で今回，砂防堰堤の工事に伴って行われたのが，上ヶ原遺跡・上ヶ原第 34 号古墳の発掘調査です。可部の沖積平野を臨む遺跡としては，初めての弥生時代終末期から古墳時代前期の集落跡の本格的な発掘調査となりました。また，上ヶ原第 34 号古墳の調査は，上ヶ原古墳群としては，昭和 44 年以来の発掘調査となりました。いずれの調査でも，この地域の歴史を考える上で，貴重な成果を得ることができました。この報告書が一人でも多くの方に活用され，広島市域の歴史を理解する一助となれば幸いです。

最後になりましたが，この調査にあたり，ご協力いただきました関係諸機関と関係者の皆様，ならびに調査に従事していただいた皆様に，厚くお礼申し上げます。

平成 23(2011) 年 6 月

財団法人広島市未来都市創造財団　文化科学部　文化財課

例　　言

1．本書は，広島市安佐北区可部町大字中野における広島西部山系中野地区砂防事業に伴い，平成19～22年度に実施した上ヶ原遺跡及び上ヶ原第34号古墳の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，国土交通省中国地方整備局太田川河川事務所から委託を受け，財団法人広島市文化財団(平成23年度から財団法人広島市未来都市創造財団に移行)が実施した。

3．本書の執筆・編集は，田村規充が行った。

4．遺構の実測及び写真撮影は平成19年度は高下洋一・塲正勝が，20年度は高下・桾木敬太が，21年度は田村・松田雅之が実施した。遺物の実測及び図面の製図は田村が，写真撮影は桾木・田村が実施した。

5．発掘調査に係る基準点の設置は，写測エンジニアリング株式会社に委託した。

6．本書に掲載した航空写真撮影は，平成19・20年度は写測エンジニアリング株式会社に，21年度は株式会社イビソク広島営業所に委託した。

7．平成19・20年度の遺構の写真測量及び図化は，写測エンジニアリング株式会社に委託した。

8．平成21年度の遺構の3Dレーザー測量，そのデータを使用した報告書システムの開発・作成及び墳丘内と石室の石材図化業務は，株式会社計測リサーチコンサルタントに委託した。

9．遺物の科学分析は，株式会社パレオ・ラボに委託した。

10．第1・3図は，国土地理院による平成13年発行の25,000分の1の地形図(可部・飯室)を複製して使用した。第2図は，大日本帝国陸地測量部による昭和10年発行の25,000分の1の地形図(可部)と昭和11年発行の25,000分の1の地形図(毛木)を複製して使用した。

11．図版1a・bは，国土地理院撮影の空中写真(1962撮影)を一部加工して使用した。

12．第5図における基準点のデータは下記のとおりである。

基準杭1：X＝－162852.750Y＝30997.883

基準杭2：X＝－162873.212Y＝31021.992

基準杭3：X＝－162875.036Y＝30999.707

13．本書に掲載した挿図の方位は，第1～3図以外は方眼北である。

14．本書に使用した遺構の略記号は下記のとおりである。

SH：竪穴住居跡 SX：テラス状遺構 SK：土坑 P：ピット

15．土層断面図及び土器の色調は『新版標準土色帖』(2003年版日本色研事業株式会社発行)に拠った。

16．本発掘調査で得られた資料は，広島市教育委員会から委託を受けて，財団法人広島市未来都市創造財団　文化財課において保管している。

目　　次

Ⅰ　はじめに……7
Ⅱ　位置と歴史的環境……１０
Ⅲ　遺構と遺物……２１
　１　上ヶ原遺跡……２１
　２　上ヶ原第 34 号古墳……６６
Ⅳ　まとめ……９８
　１　上ヶ原遺跡……９８
　２　上ヶ原第 34 号古墳……９９
附編　上ヶ原遺跡出土土器および上ヶ原第 34 号古墳出土須恵器の胎土材料……１０５

挿　図　目　次

第 1 図　上ヶ原遺跡周辺主要遺跡分布図……9
第 2 図　上ヶ原遺跡周辺地形図 (昭和 10 年)……１１
第 3 図　可部古墳群分布図……１４
第 4 図　上ヶ原遺跡周辺地形図……２０
第 5 図　上ヶ原遺跡遺構配置図・基本層序……２２
第 6 図　SH1・4 実測図……２５
第 7 図　SH2 実測図……２６
第 8 図　SH3 実測図……２７
第 9 図　SH5・6 実測図……２８
第 10 図　SX1・2・3・中央平坦面実測図……３０
第 11 図　SX4 実測図……３３
第 12 図　SX5 実測図……３４
第 13 図　東側平坦面実測図……３５
第 14 図　SK1 実測図……３６
第 15 図　SK2 実測図……３７
第 16 図　SK3 実測図……３８
第 17 図　配石遺構実測図……３９
第 18 図　出土遺物実測図 (1)……５７
第 19 図　出土遺物実測図 (2)……５８
第 20 図　出土遺物実測図 (3)……５９
第 21 図　出土遺物実測図 (4)……６０
第 22 図　出土遺物実測図 (5)……６１

第 23 図　出土遺物実測図 (6)……６２
第 24 図　出土遺物実測図 (7)……６３
第 25 図　出土遺物実測図 (8)……６４
第 26 図　出土遺物実測図 (9)……６５
第 27 図　上ケ原第 34 号古墳実測図 (調査前)……６６
第 28 図　上ケ原第 34 号古墳実測図 (調査後)……６８
第 29 図　墳丘土層断面図……６９
第 30 図　墳丘基準面・石室掘り方実測図……７０
第 31 図　墳丘内石積遺構実測図……７２
第 32 図　石室実測図……７５
第 33 図　石室内遺物出土状況実測図 (床面下面)……７８
第 34 図　石室内敷石及び遺物出土状況実測図 (床面上面)……７９
第 35 図　開口部前面遺物出土状況実測図……８０
第 36 図　出土遺物実測図 (10)……９５
第 37 図　出土遺物実測図 (11)……９６
第 38 図　出土遺物実測図 (12)……９７

付　表　目　次

第１表　可部古墳群の古墳……１５
第２表　上ケ原遺跡出土土器観察表……４５
第３表　上ケ原遺跡出土須恵器観察表……５４
第４表　上ケ原遺跡出土金属器・石器・土製品観察表……５６
第５表　上ケ原第 34 号古墳出土須恵器・土師器観察表……８８
第６表　上ケ原第 34 号古墳出土金属器観察表……９４

図　版　目　次

図版　扉　上ケ原遺跡遠景 (航空写真・調査前)
図版 １ａ　昭和 37 年 (1962) 撮影　上ケ原遺跡周辺空中写真
　　ｂ　昭和 37 年 (1962) 撮影　上ケ原遺跡周辺空中写真
図版 ２ａ　上ケ原遺跡遠景 (航空写真・調査前)　ｂ　上ケ原遺跡 (航空写真・調査前)
図版 ３ａ　上ケ原遺跡 (航空写真・19 年度調査後)　ｂ　上ケ原遺跡 (航空写真・20 年度調査後)
図版 ４ａ　SH1(19 年度)　ｂ　SH1(20 年度)
図版 ５ａ　SH1 遺物出土状況 (19 年度)　ｂ　SH1 遺物出土状況 (20 年度)
図版 ６ａ　SH2　ｂ　SH2 遺物出土状況

図版 7 a　SH3
b　SH3 遺物出土状況
図版 8 a　SH4
b　SH5
図版 9 a　SH6
b　SX1・2・3
図版 10a　SX1
b　SX1 遺物出土状況
図版 11a　SX2
b　SX2 遺物出土状況
図版 12a　SX3
b　SX4
図版 13a　SX4 遺物出土状況
b　SX5
図版 14a　SX5 遺物出土状況
b　中央・東側平坦面
図版 15a　中央平坦面下段遺物出土状況
b　東側平坦面
図版 16a　東側平坦面遺物出土状況
b　SK1
図版 17a　SK1 遺物出土状況
b　SK2
図版 18a　SK2 遺物出土状況
b　SK3
図版 19a　配石遺構
b　配石遺構
図版 20　出土遺物 (1)
図版 21　出土遺物 (2)
図版 22　出土遺物 (3)
図版 23　出土遺物 (4)
図版 24　出土遺物 (5)
図版 25　出土遺物 (6)
図版 26　出土遺物 (7)
図版 27　出土遺物 (8)
図版 28　出土遺物 (9)
図版 29　出土遺物 (10)
図版 30　出土遺物 (11)
図版 31　出土遺物 (12)
図版 32　出土遺物 (13)
図版 33　出土遺物 (14)
図版 34a　上ヶ原第 34 号古墳 (航空写真・調査前)
b　上ヶ原第 34 号古墳 (航空写真・墳丘及び石室検出時)
図版 35a　上ヶ原第 34 号古墳 (航空写真・墳丘及び石室検出時)
b　墳丘調査前
図版 36a　墳丘検出状況
b　墳丘南東面検出状況
図版 37a　墳丘北東面検出状況
b　墳丘北面検出状況
図版 38a　墳丘及び周溝北西側土層
b　墳丘南東側及び開口部前面土層
図版 39a　墳丘及び周溝南西側土層
b　墳丘南西側土層
図版 40a　墳丘北東側土層
b　周溝南西側

図版 41a　周溝北側
図版 42a　石室検出状況
図版 43a　石積遺構上層南東面検出状況
図版 44a　石積遺構上層北東面検出状況
図版 45a　石積遺構下層検出状況
図版 46a　石室奥壁
図版 47a　石室南側壁
図版 48a　石室南側壁羨道側
図版 49a　石室北側壁玄室側
図版 50a　石室床面上面敷石・遺物出土状況
図版 51a　石室床面上面敷石
図版 52a　石室床面下面及び遺物出土状況
図版 53a　開口部前面北東側遺物出土状況
図版 54a　墳丘基準面及び石室掘り方検出状況
図版 55　出土遺物 (15)
図版 56　出土遺物 (16)
図版 57　出土遺物 (17)
図版 58　出土遺物 (18)
図版 59　出土遺物 (19)
図版 60　出土遺物 (20)
図版 61　出土遺物 (21)
b　石室検出状況
b　石積遺構上層検出状況
b　石積遺構上層東面検出状況
b　石積遺構東側土層
b　石積遺構下層南東面検出状況
b　玄室より開口部をのぞむ
b　石室南側壁玄室側
b　石室北側壁
b　石室北側壁羨道側
b　石室床面上面敷石・遺物出土状況
b　石室床面上面及び下面半面検出状況
b　石室基底石
b　墳丘基準面及び石室掘り方検出状況
b　上ヶ原第 27 号古墳墳裾確認状況

Ⅰ　はじめに

広島市市民局文化スポーツ部文化財課 (当時文化財担当，以下「市民局文化財課」) は平成 18 年 12 月 14 日に，国土交通省中国地方整備局太田川河川事務所 (以下「太田川河川事務所」) の依頼を受け，広島西部山系中野地区砂防工事事業地内において試掘調査を実施し，平成 19 年 1 月 25 日付で，広島市安佐北区可部町大字中野地内において遺跡の存在を確認したとの回答を行った。この遺跡の取り扱いについて両者で協議が行われたが，計画の変更は困難であり，記録保存の措置を講ずることとなった。

そこで, 太田川河川事務所は平成 19 年 6 月 18 日に, 財団法人広島市文化財団 (以下「文化財団」とする) に発掘調査の実施を依頼した。これを受け，文化財団文化科学部文化財課 (以下「文化財団文化財課」とする) では，現地調査を平成 19 年 7 月 23 日から同年 10 月 5 日と平成 21 年 2 月 9 日から同年 3 月 6 日の 2 回にわけて実施した。

また，平成 20 年度の調査中に調査区に隣接する工事事業地内から周知の遺跡ではない古墳が確認されたため，この取り扱いについて，市民局文化財課と太田川河川事務所で協議が行われたが，計画の変更は困難であり，記録保存の措置を講ずることとなった。

そこで，太田川河川事務所は平成 21 年 3 月 13 日に，文化財団に発掘調査の実施を依頼した。これを受け，文化財団文化財課では，現地調査を平成 21 年 4 月 20 日から同年 8 月 20 日にかけて実施した。

報告書作成は平成 22 年 7 月から平成 23 年 6 月にかけて実施した。

発掘調査の関係者は以下のとおりである。

調査委託者　国土交通省中国地方整備局太田川河川事務所

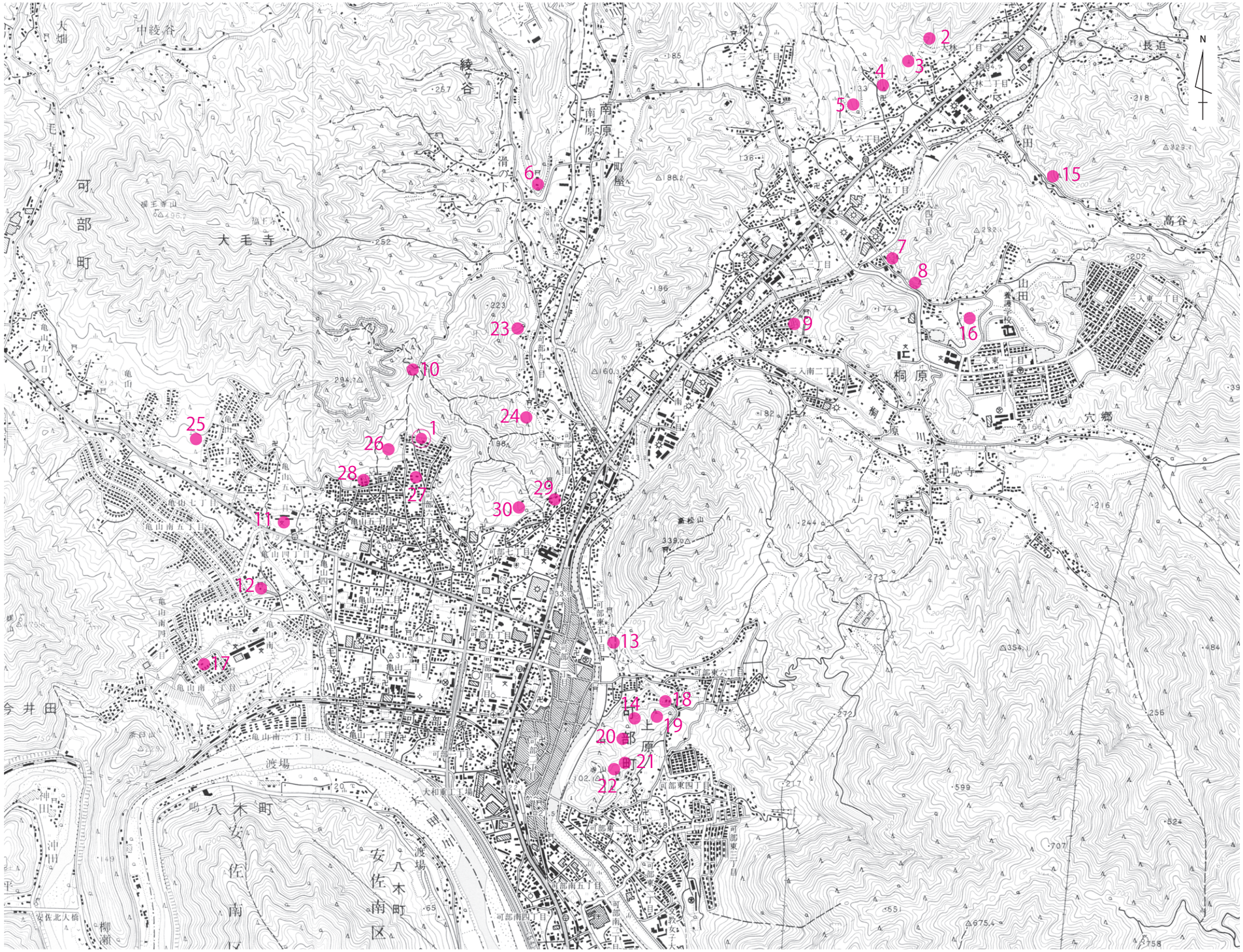
調 査 主 体　財団法人広島市文化財団　文化科学部　文化財課 (平成 23 年度から財団法人広島市未来都市創造財団に移行)

調査関係者　生田文雄　理事長
原田康夫　常任顧問
山田　稔　常務理事
石田正博　文化科学部長
幸田　淳　文化財課長
若島一則　文化財課主任指導主事 (平成 19 ～ 21 年度)
小林奈緒美　文化財課主任 (平成 22 年度)

調査担当者　高下洋一　学芸員 (平成 19・20 年度)
塲正勝 (平成 19 年度　財団法人安芸高田市地域振興事業団より派遣)
桾木敬太　学芸員 (平成 20 年度)
田村規充　学芸員 (平成 21 年度以降)
松田雅之　学芸員 (平成 21 年度以降)

調査補助員　岩村京子　植木真澄　岡本真澄　梶谷ミエコ　加藤恒子　上土井博司
河野幸子　国本義春　久保田弘子　後藤研一　澤岡忠重　田上健吾　宅見陽子
田中実　長力初江　坪木征子　堂山君枝　庭尾勝美　野田希和子　広田武子
三田春雄　森田美恵子　山本隆教
整理作業員　佐伯ひとみ　酒本由理郁　菅原彰子　住川香代子　橋本礼子

なお，太田川河川事務所，市民局文化財課，可部町大字中野の住民の方々には調査を円滑に進めるに当たって多大な御配慮と御協力をいただいた。また，調査にあたり，広島大学教授古瀬清秀先生から貴重なご指導，ご助言をいただいた。さらに，奈良県立橿原考古学研究所総括研究員橋本裕行氏から，出土した線刻土器について貴重なご教示をいただき，広島県立可部高等学校嶋田滋先生には，可部高等学校所蔵の貴重な資料を拝見させていただいた。ここに記して謝意を表したい。



1．上ヶ原遺跡・上ヶ原第34号古墳
2．琴平遺跡
3．柳遺跡
4．坊主山遺跡
5．トンガ坊城遺跡
6．南原遺跡
7．王地遺跡
8．山田遺跡
9．丸子山遺跡
10. 番谷遺跡
11. 亀山小学校遺跡
12. 両延八幡遺跡
13. 可部寺山3号遺跡
14. 可部寺山2号遺跡
15. 高谷古墳
16. 山田古墳群
17. 虹山古墳
18. 台古墳
19. 可部寺山第6号古墳
20. 可部寺山第5号古墳
21. 可部寺山第2号古墳
22. 可部寺山第3・4号古墳
23. 九品寺北古墳群
24. 九品寺南古墳群
25. 給人原古墳群
26. 原迫古墳群
27. 上ヶ原古墳群
28. 青古墳群
29. 水落古墳
30. 城ヶ平古墳群

第１図　上ヶ原遺跡周辺主要遺跡分布図（S=1/25000）

Ⅱ　位置と環境

1　位置と自然的・地理的環境

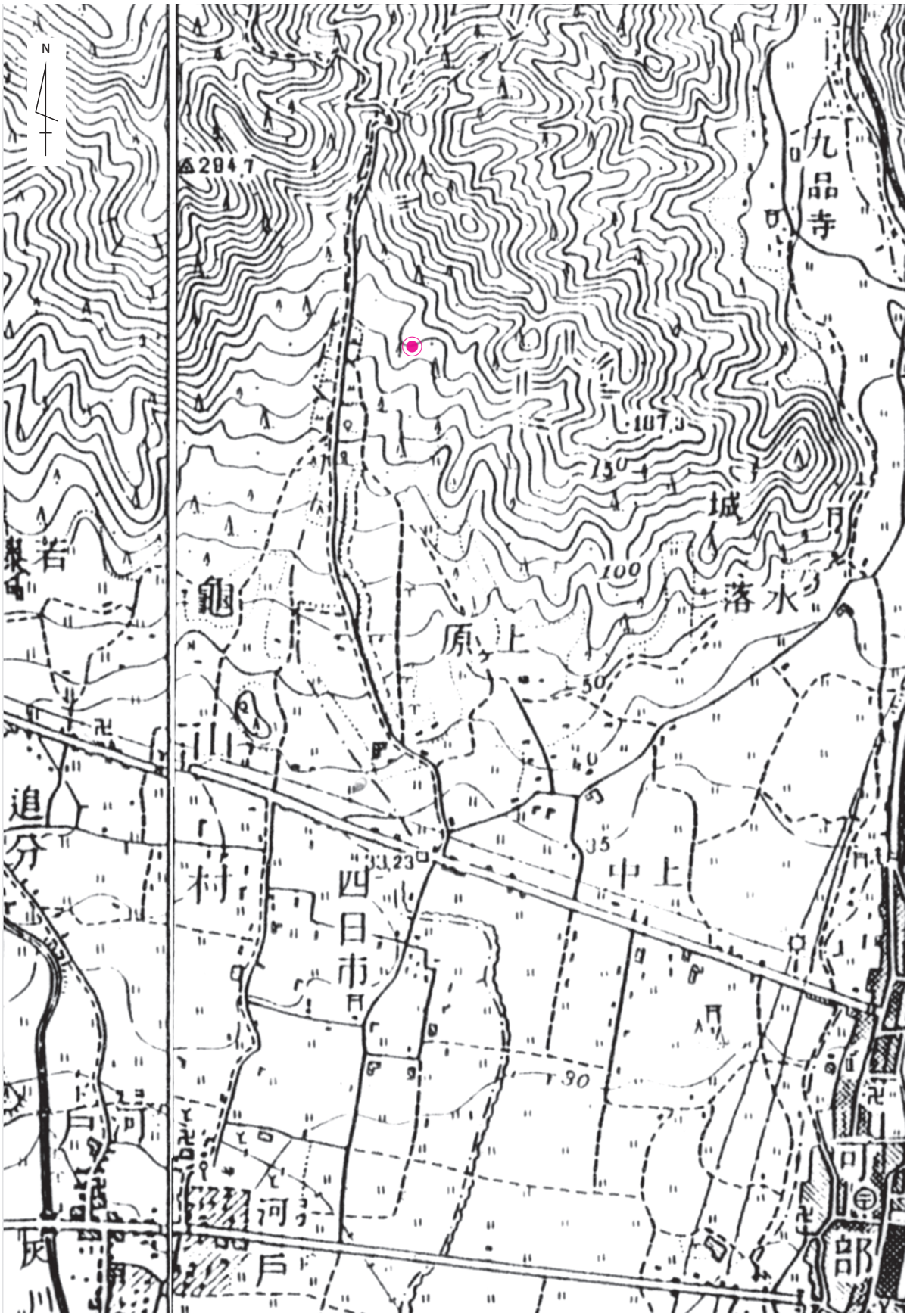
上ヶ原遺跡及び上ヶ原第 34 号古墳は広島市安佐北区可部町大字中野に所在する。可部町は，広島県の南西部を占める広島市域の北部に位置し，北側で北広島町と接している。

可部町の中心街が形成される可部地区には約 1.5km 四方の比較的広い沖積平野が存在する。この沖積平野は，広島県の北西部に端を発する太田川が蛇行しながら東行し，大きく南に流路を変える位置の北側にあり，北西から大毛寺川，北から根谷川が太田川へと合流しており，それらの河川により形成されたものである。この沖積平野は，北を福王寺山 (標高 496.2 m)，西を螺山 (標高 475 m)，東を高松山 (標高 339 m)，南は太田川を挟んで阿武山 (標高 586.4 m) の副峰に代表される山々に囲まれており，比較的大きく開く南東へは，太田川が広島市中心部の平野へと流れていく [1)]。

本遺跡は，福王寺山頂から南東に派生する山塊が，帆待川の形成する谷で一旦途切れた後，さらに南東へ派生する尾根筋から南にのびる尾根上，標高 130 ～ 140 m付近に位置する。遺跡は，南面する緩やかな尾根や斜面上にあり，先述の沖積平野を臨むことができる。直近の沖積平野との比高は約 90 ～ 100 mである。西側に約 100 m離れた地点には帆待川が北から南に流れており，扇状地から沖積平野を経て，太田川へと注いでいる。第 2 図の昭和 10 年発行の地形図で本遺跡の周辺を見ると，帆待川東岸には，大きく 3 つの尾根が北から南へ向かって緩く延び，帆待川の形成する扇状地に至っている。本遺跡は 3 つのうち最も西側の尾根に位置している。本遺跡から東側へ約 30m の地点と約 140m の地点は谷地形となっており，そこを挟んで，残り 2 つの尾根が延びるという位置関係である。3 つの尾根の中では，中央のものが最も幅が広い。現在では，本遺跡のある尾根は，遺跡から南側に約 30 m離れた地点から団地が造成されている。東側に約 30 m離れた谷地形は，水は流れていないが，団地に至る場所で側溝となり，やがて帆待川へと合流する。また，帆待川東岸の残り 2 つの尾根も大半は，団地となっている。

2　歴史的環境

可部地区は，現在，島根県松江市へ抜ける国道 54 号や島根県益田市へ抜ける国道 191 号が通り，山陰と山陽を結ぶ交通の要衝である。その歴史は古く，現在も残る四日市の地名は中世の市に由来するとされ , また，熊谷氏が本拠とし，高松城跡などの関連遺跡が残っている。近世には，雲石街道の出雲路と石見路の分岐点となり，山陰や安芸内陸部の産物を集荷し，さらにその産物を太田川の舟運により，広島城下へ中継する拠点として栄えている [2)]。このような山陰や安芸内陸部と安芸沿岸部との結節点としての条件もふまえ，開発も古くから行われていたと考えられ，古代に遡ると，「倭名類聚抄」における「安藝郡」中の「漢辨」が可部地区に，「彌理」が可部町でも可部地区の北東側に位置する三入地区に比定されている [3)]。



第２図　上ケ原遺跡周辺地形図（昭和 10 年・S=1/10000）

ここで可部地区を中心に古代以前の遺跡を概観してみたい。

縄文時代

縄文時代の明確な遺構は，現在のところ確認されておらず，番谷遺跡[4]や給人原第1号古墳の石室流入土から確認された土器片など数点の遺物が確認されているのみである[5]。

弥生時代

弥生時代の遺跡の多くは団地などの造成中に土器片や石器が見つかったものである。可部寺山3号遺跡(可部高校グラウンド遺跡)，南原遺跡，上ヶ原遺跡，土坑も確認された王地遺跡などがあげられるが，土器の形態の特徴から，ほとんどが後期のものである[6]。なお，両延八幡遺跡からは，現存しないが，江戸時代に刊行された『好古日録』に「鉾鋒」数枚が出土したという記述があり，7本については，図面が残されている[7]。その特徴から平形銅剣に分類される。

発掘調査が実施された中期の遺跡としては，丸子山遺跡があげられる。丸子山遺跡では，15基の箱形石棺及び8体分の人骨が確認され，イモ貝製の腕輪が出土している[8]。

後期の集落遺跡では，近年の可部バイパス建設に伴って，根谷川西岸の丘陵上に位置するトンガ坊城遺跡[9]，柳遺跡[10]で集落跡の発掘調査が行われた。トンガ坊城遺跡では竪穴住居跡約20軒が，柳遺跡では竪穴住居跡15軒などが見つかり，弥生時代後期から古墳時代初頭に営まれた集落であることが確認された。従来確認されている広島湾岸の弥生集落と比べ，出土土器にしめる山陰系土器の割合が高いことが特徴として挙げられる。

後期の墳墓群の調査としては，可部バイパス建設に伴い，根谷川西岸丘陵で，坊主山遺跡(箱形石棺1基・土壙墓38基)[11]，琴平遺跡(石棺墓と木棺墓あわせて21基)[12]が確認された。また，可部地区の沖積平野を臨む遺跡としては，福王寺山麓に位置する番谷遺跡(箱形石棺8基，土壙墓1基，後期のものと想定される)[13]，高松山山塊の南西の独立丘陵に位置する可部寺山2号遺跡(土壙墓9基，後期から古墳時代前期)[14]が確認された。

現在，広島湾岸において確認されている弥生時代の集落遺跡は，いずれも丘陵上に立地しているが，これは比較的大きな河川沿いの平地の大半は氾濫原で農業用地に適さないため，その支流などが形成する小扇状地や谷間の狭い平地を農業用地とし，集落はそれに隣接する低丘陵上に営まれたためと考えられている[15]。さらに，これらの集落は，規模と存続時期から，10軒以上の住居跡で構成され，弥生時代後期前葉から終末・古墳時代初頭まで存続する大規模なものと，数軒程度の住居跡で構成され，比較的短い期間で営まれた小規模なものに大別できる。この2種類の集落跡は，主要な河川の支流ごとに，拠点となる大規模集落と，そこから派生・分村した小規模集落という関係にあると捉える考え方[16]もある。

古墳時代

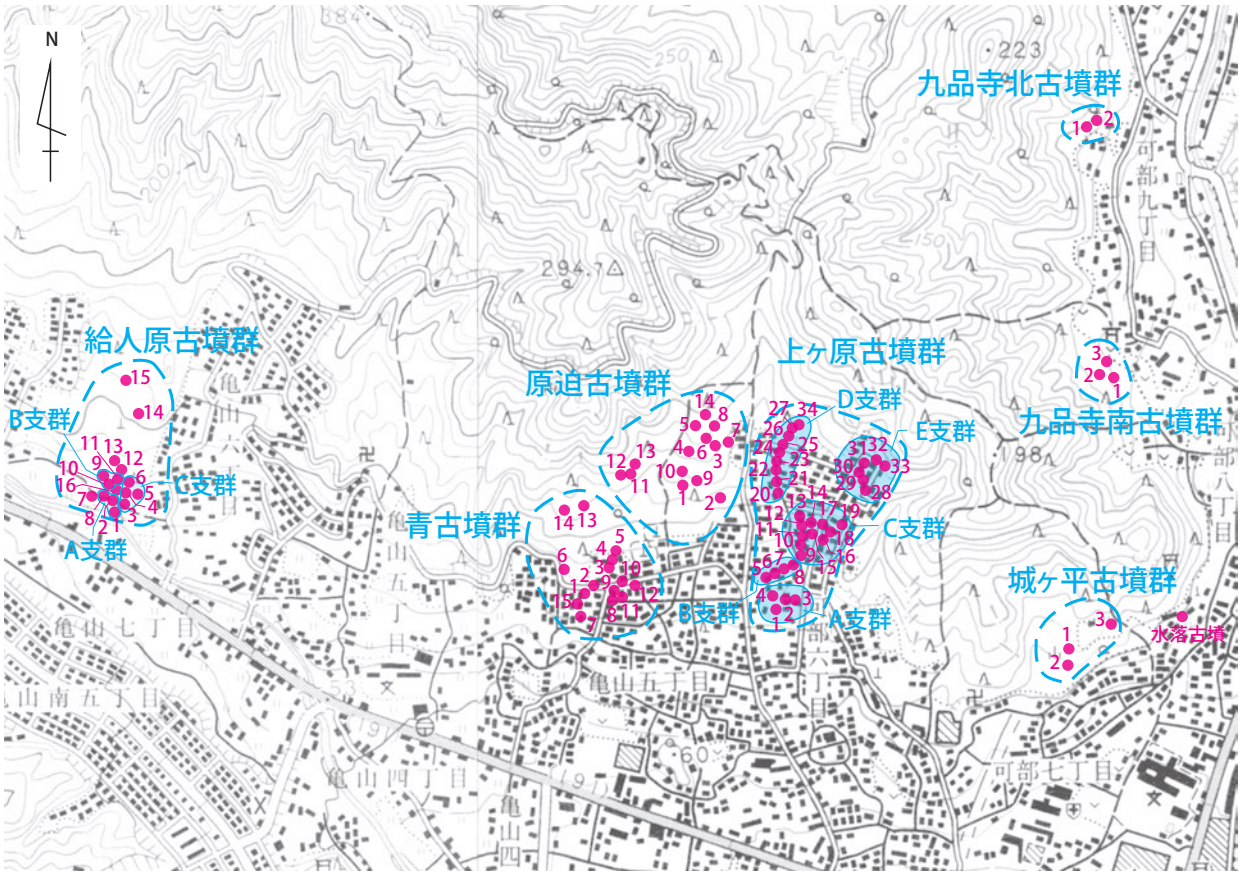
古墳時代の前期･中期に属する遺跡としては，上ヶ原古墳群の第28～33号古墳(箱形石棺5基･竪穴式石室と想定される1基)，山田古墳群，台古墳などが挙げられ，ほとんどが箱形石棺を埋葬

施設としている[17]。

発掘調査が実施された古墳としては，虹山古墳，可部寺山第２～６号古墳がある。虹山古墳は，可部地区の沖積平野を西から臨む丘陵上に位置している。墳丘の規模は全長 24.6 m，墳形は帆立貝式古墳か，もしくは造り出しを持つ円墳で，埋葬施設は割竹形木棺を据えたと想定される土壙と二重土壙の２基を持つ。5 世紀前半から中葉にかけての築造で，可部の平野全体を支配するような首長が被葬者として想定されている[18]。可部寺山古墳群は高松山山塊の南西の独立丘陵に位置する。第２号古墳は，直径約８ｍの楕円形状の古墳で埋葬施設は舟底状の木棺を据えたと想定される二重土壙である。5 世紀前半の築造と考えられている。第３号古墳は，直径約９ｍの円墳で，舟底形状の木棺を据えたと想定される二重土壙である。5 世紀中葉から後半の築造と考えられている。第４号古墳は地形改変により墳丘の形態や規模は不明で，埋葬施設も小児用と想定される土壙のみが確認されている。時期は不明だが第３号古墳よりも先行していると想定されている[19]。第５号古墳は南北 12.5 m，東西 10.5 ｍの楕円形状の古墳で，埋葬施設は，木棺を直葬した土壙である。5 世紀前半頃の築造と考えられている[20]。第６号古墳は，墳丘の地形改変が著しく，墳形や規模は不明で，埋葬施設は割竹形木棺を据えたと想定される土壙である。5 世紀中頃から後半頃の築造と考えられている[21]。いずれの古墳も，墳丘規模や副葬品が大きく突出していないことから，それぞれの集団にそれほど優劣のつかない有力者たちのものと考えられている。このことは，太田川下流域の 5 世紀代以降突出した古墳が無くなり，小規模な古墳が小単位で群集して築造されるようになる状況と似た傾向を示しているとされている[22]。

後期に入ると，福王寺山麓東側から南側にかけて，可部古墳群と総称される群集墳が形成されるようになる。古墳群は，東側から時計回りに，九品寺北古墳群，九品寺南古墳群，城ヶ平古墳群，上ヶ原古墳群，原迫古墳群，青古墳群，給人原古墳群と呼称されており，総数は少なくとも 80 基以上，ほとんどが横穴式石室を埋葬施設とし，副葬品などから，おおむね 6 世紀後半から 7 世紀前半のものと考えられている。また，石室の床面に敷石がなされる古墳が，17 基確認されている[23]。これらの古墳群では昭和 30 年代後半から 40 年代にかけて，宅地などの造成工事に伴い，広島大学や広島県立可部高等学校史学研究部により，調査が行われている。その中でも給人原古墳群については，16 基中 10 基の調査が行われ，詳細な分析がなされているので詳述したい。第 1・2・8 号古墳については A 支群とされ，石室に大型の花崗岩を使い，構築法も丁寧なものとされている。第 9・10・11 号古墳は B 支群とされ，傾斜面に対し横方向に石室を構築し，傾斜の低い方の側壁側に幅広に，傾斜の高い方の側壁側に幅狭に裏込状に角礫の石積がなされていた。第 3・4・5・6 号古墳は C 支群とされ，石室の平面型式が胴張りや細長い退化型式のものである。出土土器や石室の型式から，A 支群が最も古く，6 世紀後半，B 支群が 6 世紀末～ 7 世紀，C 支群が 7 世紀前半以降に築造されたものと考えられている[24]。

ここで，他の広島市域の後期古墳の様相を見ると，太田川下流域や瀬野川流域など広島湾沿岸部における後期古墳は群集墳の形をとらず，２～３基のまとまりで分布しているものが多く，前期や中期の古墳と比較して，規模的に大きなものも見られるが，数的には増加する傾向を示さない。可部古墳群以外に群集墳といえる古墳群が確認されるのは，安佐北区白木町の三篠川流域を臨む丘陵



赤数字ー古墳名(第○号古墳)を省略したもの

第３図　可部古墳群分布図（S=1/15000）

上である。白木町では，塔の岡第１・６号古墳の発掘調査が行われており，墳丘内に石積遺構が確認されている[25]。また可部地区や白木町ほどではないが，可部地区の南方に位置する安佐南区八木・緑井地区などの太田川を東に臨む阿武山麓にも比較的後期古墳が集中する。八木地区では，別所古墳の発掘調査が行われ，外護列石を持つ横穴式石室墳が確認されている[26]。

注

1) 赤木祥彦「可部町の自然」『可部町史』広島市役所 1976 年
2) 土井作治「可部町の発展と交通・運輸」『可部町史』広島市役所 1976 年
3)「安藝國　第百十六」『倭名類聚抄』承平年間（931 ～ 38）
4) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『番谷遺跡発掘調査報告』1997 年
5) 福谷昭二「歴史のあけぼの」『可部町史』広島市役所 1976 年
6) ５及び広島県立可部高等学校『はにわ第 14 号』1975 年
7) 藤貞幹「七十一　鋳劔　鉾鋒」『好古日録』1797 年
8) 石田彰紀「中山の歴史のあけぼの」『中山村史』広島市 1991 年
9) 財団法人広島市未来都市創造財団『トンガ坊城遺跡・坊主山遺跡・柳遺跡・琴平遺跡ーー般国道 54 号 (可部バイパス) 建設工事に伴う発掘調査ー』2011 年
10) ９に同じ

11) 9に同じ
12) 9に同じ
13) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『番谷遺跡発掘調査報告』1997年
14) 広島県教育委員会・株式会社アコード『可部寺山第5号古墳・可部寺山2号遺跡発掘調査報告書』2004年
15) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『上深川北遺跡発掘調査報告』1991年
16) 15に同じ
17) 5に同じ
18) 中田昭『虹山古墳発掘調査報告』虹山古墳発掘調査団　1989年
19) 財団法人広島市文化財団『可部寺山1号遺跡』2004年
20) 14に同じ
21) 財団法人広島県教育事業団『寺山城跡』2004年
22) 19に同じ
23) 広島県立可部高等学校『はにわ　第13号』1974年
24) 23に同じ
25) 財団法人広島市文化財団『塔の岡古墳群』1999年
26) 財団法人広島市文化財団『別所古墳発掘調査報告』2010年

第1表　可部古墳群の古墳

（[　]：残存値・確認値）

※ 残存値・確認値と報告されているものについては [　] で表記しているが，[　] をしていない数値についても残存値・確認値が含まれている可能性がある。

古墳群名		墳丘 (数値－m)		埋葬施設 (数値－m)				遺物	備考
古墳名	支群名等	形状	規模	形状	長さ	幅	高さ（深さ）		
上ヶ原古墳群（34基）									
上ヶ原 第1号古墳	上ヶ原 A-1号墳	円墳	径：[16.5] 高さ：[3.65]	横穴式石室 無袖式	7	奥壁：0.95 中央部：1 入口：1.48	1.56	須恵器・土師器（暗文の施された坏1含む）・鉄器（鏃18・刀子3・釘5）・馬具片（鏡板1・留金具1）・装飾品（金環2・丸玉3・小玉1）	
上ヶ原 第2号古墳	上ヶ原 A-2号墳	円墳	径：[11] 高さ：[3.5]	横穴式石室 無袖式	7.3	奥壁：1.2 中央部：1.65 入口：1.25	1.6	須恵器・土師器・鉄器（鏃13・刀子2・刀片・鍔1）・馬具片（鏡板1・帯金具1・轡？1）	玄室床面には中央西側壁側の一画以外に敷石
上ヶ原 第3号古墳	上ヶ原 A-3号墳	円墳		横穴式石室	[3]	[1.5]	[1.5]	須恵器	
上ヶ原 第4号古墳	上ヶ原 A-4号墳	円墳		横穴式石室				須恵器	
上ヶ原 第5号古墳	上ヶ原 B-1号墳	円墳	径：[9] 高さ：[2]	横穴式石室 無袖式	4	奥壁：1.26 入口：1.3	1.24	須恵器・土師器・鉄器（鏃5・鍔1・釘2）・金銅製品（足金物2）	
上ヶ原 第6号古墳	上ヶ原 B-2号墳	円墳	径：[8] 高さ：[2]	横穴式石室 無袖式	[5]	[1.5]	[1.2]	須恵器（高台付提瓶含む）・土師器・鉄器（鏃4）	
上ヶ原 第7号古墳	上ヶ原 B-3号墳	円墳	径：[10]	横穴式石室 無袖式	7.3	奥壁：1.6 入口：1.9	1.4	須恵器・土師器・装飾品（勾玉1・切子玉1）	床面に敷石

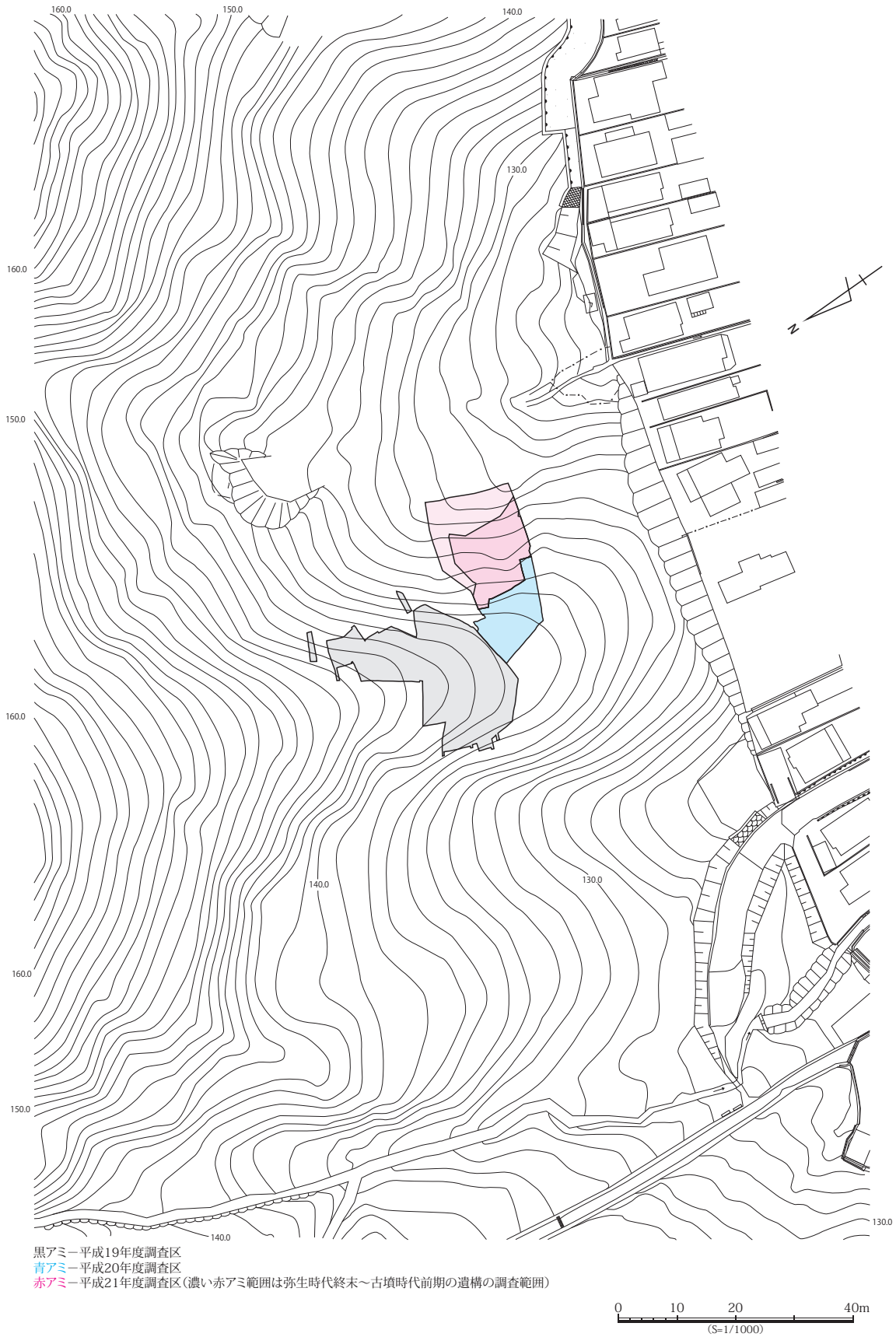
古墳群名		墳丘 (数値 – m)		埋葬施設 (数値 – m)				遺物	備考
古墳名	支群名等	形状	規模	形状	長さ	幅	高さ (深さ)		
上ケ原 第 8 号古墳	上ケ原 B-4 号墳	円墳							
上ケ原 第 9 号古墳	上ケ原 C-1 号墳	円墳		横穴式石室 両袖式	玄室： 1.4 羨道： 3.5	1.2	0.9	須恵器	
上ケ原 第 10 号古墳	上ケ原 C-2 号墳	円墳		横穴式石室	6	1.3	[0.9]	須恵器・鉄器片・装飾品（金環 3・管玉 2）	
上ケ原 第 11 号古墳	上ケ原 C-3 号墳	円墳		横穴式石室	4.3	1.5	[1.1]	須恵器	
上ケ原 第 12 号古墳	上ケ原 C-4 号墳	円墳		横穴式石室	5.5	1.3	[1.2]	須恵器・鉄器（鏃 5）	
上ケ原 第 13 号古墳	上ケ原 C-5 号墳	円墳		横穴式石室	6	1.6	[0.8]	須恵器・鉄器片	
上ケ原 第 14 号古墳	上ケ原 C-6 号墳	円墳		横穴式石室	3	1.2	1.2	須恵器・鉄器（刀 1）	
上ケ原 第 15 号古墳	上ケ原 C-7 号墳	円墳		横穴式石室	4	1.4	1.7		
上ケ原 第 16 号古墳	上ケ原 C-8 号墳	円墳		横穴式石室	4	1.4	1.1	土師器・鉄器（鏃 3）	
上ケ原 第 17 号古墳	上ケ原 C-9 号墳	円墳		横穴式石室	7	1.1		須恵器・鉄器（鏃片）	
上ケ原 第 18 号古墳	上ケ原 C-10 号墳	円墳	径：[13]	横穴式石室 無袖式	6.05	奥壁：1.55 中央部：2.05 入口：1.6	1.4	須恵器・土師器・鉄器（鏃 5 以上・刀子 2）・馬具（轡 1）・装飾品（管玉 1）	玄室床面ほぼ全面に敷石
上ケ原 第 19 号古墳	上ケ原 C-11 号墳	円墳		横穴式石室					
上ケ原 第 20 号古墳	上ケ原 D-1 号墳	円墳		横穴式石室	6	1.4	1	須恵器・鉄器（鏃 5）・装飾品（金環 1・切子玉 1・小玉 10）	
上ケ原 第 21 号古墳	上ケ原 D-2 号墳	円墳		横穴式石室	5.5	1.1	1.2	鉄器（鏃 1）	
上ケ原 第 22 号古墳	上ケ原 D-3 号墳	円墳		横穴式石室	4.9	1.6	1.1	須恵器・鉄器（鏃 13・鉈 1・刀子 4）・装飾品（金環 2）	
上ケ原 第 23 号古墳	上ケ原 D-4 号墳	円墳		横穴式石室					
上ケ原 第 24 号古墳	上ケ原 D-5 号墳	円墳		横穴式石室				須恵器・鉄器（鏃片）	
上ケ原 第 25 号古墳	上ケ原 D-6 号墳	円墳		横穴式石室					玄室床面に敷石
上ケ原 第 26 号古墳	上ケ原 D-7 号墳	円墳		横穴式石室					
上ケ原 第 27 号古墳	上ケ原 D-8 号墳	円墳		横穴式石室					
上ケ原 第 28 号古墳	上ケ原 E-1 号墳			箱形石棺	2	0.4	0.5		
上ケ原 第 29 号古墳	上ケ原 E-2 号墳	円墳		箱形石棺	2	0.6	0.5		

古墳群名		墳丘 (数値 – m)		埋葬施設 (数値 – m)				遺物	備考
古墳名	支群名等	形状	規模	形状	長さ	幅	高さ (深さ)		
上ケ原 第 30 号古墳	上ケ原 E-3 号墳			箱形石棺	1.8		0.31		
上ケ原 第 31 号古墳	上ケ原 E-4 号墳			箱形石棺	1.05	0.44			
上ケ原 第 32 号古墳	上ケ原 E-5 号墳			箱形石棺	0.67	0.32			
上ケ原 第 33 号古墳	上ケ原 E-6 号墳			竪穴式石室 か？				勾玉 1	
上ケ原 第 34 号古墳	D 支群	円墳	長径：10.3 短径：7.8	横穴式石室 無袖式	南側壁： 6.6 北側壁： 6.98	奥壁：0.82 中央部：0.9 入口：0.92	1.22	須恵器・土師器（暗文の施された坏 1）・鉄器（鏃 1・鍔 1・刀子 1・紡錘車 1）・馬具（帯金具 1※27 号墳のものか？）・装飾品（耳環 1）	玄室床面の奥壁側の半分の範囲に、南側壁奥壁側の一画を除き敷石
九品寺北古墳群（2 基）									
九品寺南古墳群（3 基）									
九品寺南 第 1 号古墳	九品寺 第 1 号古墳	円墳	径：[14] 高さ：[2.3]	横穴式石室	[4.82]	1.1			
九品寺南 第 2 号古墳	九品寺 第 2 号古墳	円墳		横穴式石室	[3.7]	[0.7]			
九品寺南 第 3 号古墳	九品寺 第 3 号古墳	円墳		横穴式石室					
城ヶ平古墳群（3 基）									
城ケ平 第 1 号古墳		円墳		横穴式石室 無袖式？	[2.5]	[0.82]		須恵器・土師器	
城ケ平 第 2 号古墳		円墳		横穴式石室				須恵器	
城ケ平 第 3 号古墳		円墳		横穴式石室				須恵器・鉄器（刀 3）	
原迫古墳群（14 基）									
原迫 第 1 号古墳		円墳	径：[13.6] 高さ：[2.9]	横穴式石室 無袖式	8.7	奥壁：1.15 中央部：1.69 入口：1.6	1.8	須恵器・鉄器（鏃 20・刀 1・鍔 2・刀子 3・斧 1）・刀責金具 1・馬具（轡 1）・装飾品（金環 2・小玉 2）	玄室床面には中央南側壁側の一画以外に敷石
原迫 第 2 号古墳		円墳	径：[8] 高さ：[1.7]	横穴式石室		1.5			
原迫 第 3 号古墳		円墳		横穴式石室					
原迫 第 4 号古墳		円墳	径：[11] 高さ：[2.5]	横穴式石室		1.2			
原迫 第 5 号古墳		円墳	径：[8] 高さ：[1.5]	横穴式石室					
原迫 第 6 号古墳		円墳	径：[11] 高さ：[2.3]	横穴式石室		0.85			
原迫 第 7 号古墳		円墳	径：[16] 高さ：[3]	横穴式石室					
原迫 第 8 号古墳		円墳		横穴式石室					
原迫 第 9 号古墳		円墳		横穴式石室	5.7	1.4			
原迫 第 10 号古墳		円墳		横穴式石室					

古墳群名		墳丘 (数値 – m)		埋葬施設 (数値 – m)				遺物	備考
古墳名	支群名等	形状	規模	形状	長さ	幅	高さ (深さ)		
原迫 第 11 号古墳		円墳	径：[12.4] 高さ：[1.1]	横穴式石室 無袖式	6.55	奥壁：1.1 中央部：1.2 入口：0.6	1.2	須恵器・鉄器（鏃 6・刀 1・鉇 1・釘 2）・馬具（轡 1・留金具 1）・装飾品（丸玉 1）	
原迫 第 12 号古墳		円墳		横穴式石室				須恵器・鉄器（鏃片）	
原迫 第 13 号古墳		円墳		横穴式石室					
原迫 第 14 号古墳				箱形石棺					
青古墳群（15 基）									
青 第 1 号古墳		円墳	径：[10.7] 高さ：[2]	横穴式石室 無袖式	[5]	奥壁：1.1 中央部：2	1.9	須恵器	玄室床面の中央部に斜めに帯状に敷石
青 第 2 号古墳		円墳		横穴式石室					
青 第 3 号古墳		円墳	径：[10] 高さ：[2]	横穴式石室 無袖式	[3.8]	奥壁：1 中央部：1.4 閉塞石部：1.5	1.5	須恵器・土師器・鉄器（鏃 6・刀 1）	墳裾に葺石。床面に敷石
青 第 4 号古墳		円墳	径：[9.1] 高さ：[2]	横穴式石室 無袖式	5.95	奥壁：1.24 中央部：1.45 入口：1.1	1.75	須恵器・鉄器（鏃片）・装飾品（金環 1）	
青 第 5 号古墳		円墳	径：[6.9]	横穴式石室		[0.8]	1.31	須恵器	
青 第 6 号古墳		円墳		横穴式石室				須恵器・鉄器（刀 1）・装飾品（金環 1）	
青 第 7 号古墳		円墳	径：[9.1] 高さ：[2]	横穴式石室	[2.7]	1.2	0.6	須恵器	
青 第 9 号古墳		円墳か？	径：[10]	横穴式石室	[2]	0.8			
青 第 13 号古墳		円墳		横穴式石室					
青 第 14 号古墳		円墳		横穴式石室					
青 第 15 号古墳		円墳		横穴式石室				須恵器	
給人原古墳群（16 基）									
給人原 第 1 号古墳	A 小支群	円墳	径：[13] 高さ：[2.5]	横穴式石室 無袖式	7.5	奥壁：1.35 中央部：1.75 入口：1.6	1.8	須恵器・鉄器（刀子 1）・馬具片（帯金具 1・轡 1）・装飾品（管玉 1・切子玉 3・丸玉 3・小玉 6）	玄室床面には東側壁奥壁側の一画以外に敷石
給人原 第 2 号古墳	A 小支群	円墳	径：[13.5] 高さ：[1.75]	横穴式石室 無袖式	8	奥壁：1.6 中央部：1.4 入口：1.2	1.85	須恵器・鉄器（鏃 2・刀子 1）	石室入口方向の墳裾に積石を施す。玄室床面には東側壁奥壁側の一画と中央西側壁側の一画以外に敷石
給人原 第 3 号古墳	C 小支群	円墳	径：[9] 高さ：[2]	横穴式石室 無袖式	5.75	奥壁：0.8 中央部：1.95 入口：1	1.65	須恵器	玄室床面ほぼ全面に小角礫で敷石

古墳群名		墳丘 (数値 – m)		埋葬施設 (数値 – m)				遺物	備考
古墳名	支群名等	形状	規模	形状	長さ	幅	高さ (深さ)		
給人原 第 4 号古墳	C 小支群	円墳	径：[9] 高さ：[1.5]	横穴式石室 無袖式	6.2	奥壁：1 中央部：1.7 入口：1.2	1.4	須恵器・土師器・装飾品（耳環 2・切子玉 1・丸玉 2）	玄室床面の奥壁側半分を中心に敷石
給人原 第 5 号古墳	C 小支群	円墳	径：[9] 高さ：[1.2]	横穴式石室 無袖式	6.2	奥壁：0.7 中央部：1.25 入口：0.9	[0.9]	須恵器・鉄器（鏃片）	玄室床面の奥壁側半分に敷石
給人原 第 6 号古墳	C 小支群	円墳	径：[8] 高さ：[1.9]	横穴式石室 無袖式	6	奥壁：0.6 中央部：0.9 入口：1	1.5	須恵器・土師器・鉄器（鏃 1・刀子 1）・装飾品（金環 1・管玉 4・小玉 3）・八稜鏡	玄室床面ほぼ全面に敷石
給人原 第 7 号古墳		円墳	径：[12.3]	横穴式石室					
給人原 第 8 号古墳	A 小支群	円墳	径：[7.5] 高さ：[1.5]	横穴式石室 無袖式	[4.5]	奥壁：1.1 中央部：1.6	1.45	須恵器・土師器（暗文の施された把手付**埦** 1 含む）・鉄器（鏃 4・刀子 2）	玄室床面ほぼ全面に敷石
給人原 第 9 号古墳	B 小支群	円墳	径：[12.8] 高さ：[1]	横穴式石室 無袖式	5.8	奥壁：0.87 中央部：1.1 入口：1.15	[1.1]	須恵器・土師器（暗文の施された坏 1 含む）・鉄器（鏃 2・刀子 2）・装飾品（金環 1・銀環 1）	墳丘内に石室の裏込状に石積がされる。玄室床面の奥壁側半分に敷石
給人原 第 10 号古墳	B 小支群	円墳	径：[7] 高さ：[1.5]	横穴式石室 無袖式	[5.2]	奥壁：0.9 中央部：1.15	[0.8]	須恵器・土師器・装飾品（勾玉 1・耳環 1）	墳丘内に石室の裏込状に石積がされる。玄室床面ほぼ全面に敷石を施すが入口側はやや疎になる
給人原 第 11 号古墳	B 小支群	円墳	長径：[8.5] 短径：[7.5]	横穴式石室 無袖式	5.5	奥壁：0.85 中央部：1.1 入口：1.2	[1.12]	須恵器・装飾品（金環 2）	墳丘内に石室の裏込状に石積がされる。玄室床面ほぼ全面に敷石
給人原 第 12 号古墳		円墳		横穴式石室					
給人原 第 13 号古墳		円墳	径：[14] 高さ：[2.5]	横穴式石室					
給人原 第 14 号古墳		円墳	径：[10]	横穴式石室					
給人原 第 15 号古墳		円墳		横穴式石室					
給人原 第 16 号古墳		円墳		横穴式石室					

※ 井手三千男 / 善入義信『可部古墳群－目で見る給人原古墳群－』はにわ会 1974 年・広島県立可部高等学校『はにわ 第 2 ～ 13 号』1963 ～ 1974 年・広島市役所『可部町史』1976 年・広島県『広島県史 考古編』1979 年等を参考に作成



第４図　上ヶ原遺跡周辺地形図（S=1/1000）

Ⅲ　遺構と遺物

1　上ヶ原遺跡

(1)　調査の概要（第 4・5 図）

本遺跡は，福王寺山頂 (標高 496.2m) から南東へ派生する尾根筋から，帆待川の東側で谷筋に沿って南にのびる尾根の標高 130 ～ 140m 付近，南面する緩やかな尾根筋やその斜面上に位置する。直近の沖積平野との比高は　約 90 ～ 100m，西側に約 100m 離れた地点に位置する帆待川との比高差は約 5 ～ 15m である。

調査は三次に分けて行った。平成 19 年度の第一次調査では調査区全体のほぼ北半分，平成 20 年度の第二次調査では第一次調査区の南側に隣接した箇所，平成 21 年度の第三次調査では第二次調査区の東側に隣接した箇所の調査を実施した。

第一次・第二次調査では，広島市市民局文化スポーツ部文化財課の試掘調査により，遺構の検出が想定される尾根筋の平坦面を中心に，調査を開始した。ただ，第二次調査中に上ヶ原第 34 号古墳の存在を確認し，古墳の調査として実施した第三次調査については，古墳調査に伴う試掘溝の観察から，古墳形成層より下層に遺構の存在を確認したため，第二次調査区の東側から，遺構の確認場所を含む範囲までを調査区として設定し，調査を行った。

その結果，調査区は北から南へ緩やかに傾斜する尾根筋とその東側斜面を比高で約 6m 下がった尾根中腹に位置する緩斜面までを含む範囲となり，北東端最高所で標高 143.4m，南東端最低所で標高 130.9m を測る。

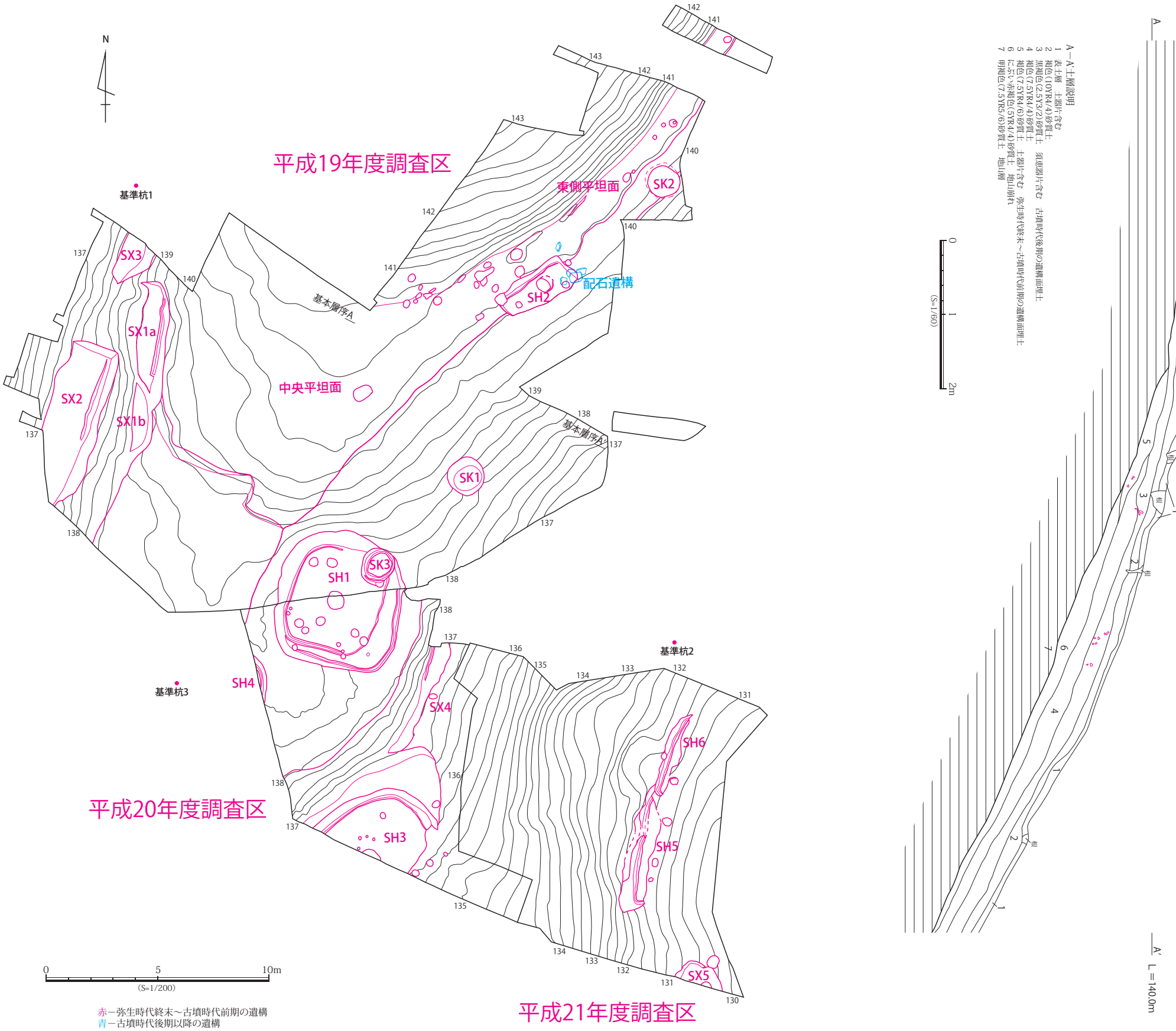
調査の結果，弥生時代終末～古墳時代前期の遺構として，竪穴住居跡 6 軒，テラス状遺構 5 か所，土坑 3 基，尾根筋のほぼ中央とそこから北東へ向かう箇所に平坦面を確認し，古墳時代後期以降の遺構として，配石遺構 1 か所を確認した。遺物は土器 (弥生土器・土師器)・須恵器・鉄器・石器・土製品が出土した。

(2)　基本層序（第 5・29 図）

本調査区は先述のように，尾根筋と尾根中腹という立地状況が異なる箇所を包括しているため，いくつかの試掘溝の中から，尾根筋の堆積状況として第 5 図 A － A’，尾根中腹の堆積状況として第 29 図 A － A’ を基本層序として述べる。

尾根筋では，弥生時代終末～古墳時代前期の遺構面は，地山面もしくは地山が崩れた層にあたる 5 図－ 6・7 層に形成されている。その後，その面が 4・5 層で覆われた後，3 層にあたる黒褐色砂質土層が堆積している。この層には，須恵器片が含まれており，地山層及び 4・5 層の面が古墳時代後期以降の遺構面となる。

尾根中腹では，弥生時代終末～古墳時代前期の遺構面が 29 図 A － A’ 67 層の地山面と 66 層にあたる褐色砂質土層に形成される。遺構面上に堆積した 61・62・64 層は黒色や暗褐色の砂質土であり，植物が繁茂分解を繰り返した状況を示していると想定される。そのことから，この地が集



第５図　上ヶ原遺跡遺構配置図（S=1/200）・基本層序（S=1/60）

落廃絶後は，古墳時代後期の古墳築造までは，しばらく利用されなかったことを示していると考えられる。

(3)　遺構

①弥生時代終末～古墳時代前期の集落跡

○ SH1・4（第 6 図）

SH1 は調査区全体のほぼ中央，標高 138.5m 付近に位置する竪穴住居跡である。第一次・第二次調査で，それぞれ，ほぼ半分ずつを検出した。壁は全周で残存する。住居跡の北東隅に検出状況から SH1 より先行すると想定される SK3 が位置する。本住居跡は壁溝及び土層の状況から 1 回の拡張が行われている。以下，拡張前を SH1a，拡張後を SH1b と呼称し，述べて行く。

SH1a は，北側と西側で SH1b と共有する部分は大きく壁が残存し，東側と南側は壁溝もしくはわずかな段差の形で壁が想定できる。想定されるそれらの壁で, 平面形状を見ると隅丸方形となる。床面規模は北壁で約 350cm，東壁で約 440cm，南壁で約 350cm，西壁で約 440cm となる。床面最高所は標高 138.0m で，残存する壁高は最高 90cm である。壁溝は北壁の西側約 120cm の範囲から続き，西壁を経て南壁までの範囲で確認した。幅 4 ～ 12cm，残存する深さ 4 ～ 7cm である。

主柱穴は壁面との位置関係と規模から P1 ～ P3 と検出し得なかったが SK3 の位置に想定される柱穴の 4 本と考えられる。P1 は底面形状が長径 22cm，短径 19cm の長円形で，底面標高は約 137.58m である。P2 は底面形状が径約 22cm の円形で，底面標高は約 137.3m である。P3 は底面形状が長径 21cm，短径 15cm の長円形で，底面標高は約 137.41m である。柱間距離は，P1 － P2 間で 285cm，P2 － P3 間で 254cm となる。

SH1b は，SH1a の東側を最大 110cm，南側を最大 51cm 拡張している。壁は全周で残存し，平面形状は隅丸方形となる。床面規模は北壁で約 400cm，東壁で約 480cm，南壁で約 420cm，西壁で約 480cm となる。床面最高所は標高 138.1m で，残存する壁高は最高 90cm である。壁溝は SH1a と共用する北壁の西側約 120cm の範囲から西壁のほぼ全ての範囲までと，西端を除く南壁のほぼ全ての範囲から東壁の南側約 340 ㎝の範囲までで確認した。幅 4 ～ 15cm，残存する深さ 4 ～ 7cm である。

主柱穴は壁面との位置関係と規模から P4 ～ P6 及び検出し得なかったが SK3 南東隅の掘り方のラインが外側に膨らむ部分に想定される柱穴の 4 本と考えられる。P4 は底面形状が長径 12cm，短径 10cm の長円形で，底面標高は約 137.56m である。P5 は底面形状が長径 21cm，短径 18cm の長円形で，底面標高は約 137.56m である。P6 は底面形状が長径 24cm，短径 19cm の長円形で，底面標高は約 137.39m である。柱間距離は，P4 － P5 間で約 330cm，P5 － P6 間で約 270cm となる。SK3 内に想定される柱穴との距離は P4 から 230 ㎝，P6 から 270 ㎝となる。

また，床面のほぼ中央，主柱穴に囲まれた位置に東西約 74cm，南北約 80cm の長円形の掘り込みを確認した。掘り込みの底面形状は東西約 55cm，南北約 63cm の長円形で底面標高は 137.73m である。この掘り込みは床面での位置や土層でも灰が混じることから, 炉跡と想定される。この炉跡は , 位置から SH1a，SH1b で共用されていたと考えられる。

この炉跡上も含め，床面中心部で線刻の施されたもの 1 点を含む甑形土器 2 点 (5・6)，高坏 2 点 (3・4) が出土した。これらの遺物は，壁全周が遺存している SH1 の床面直上やそれに近い埋土中から出土したにも関わらず，欠損部分の割合が多い。また，炉跡上出土のものについては，掘り込みの埋土より上層から出土している。もちろん，南東側で残存する壁が低く，東側は急傾斜面が近いことから，流失した可能性もあるが，傾斜面を含めた第三次調査区から接合する土器片がほとんど出土していないことや，欠損部分の割合が大きいことからその可能性は低い。これらのことから，床面中心部出土の遺物については，住居の廃絶時に，既に破損していた土器を廃棄したものと考えられる。

また, P1 の約 15cm 南側から, 台石 (88) と砥石 (89) が出土した。これらの石器は出土状況から，ほぼ住居使用時の位置を保っていると想定され，住居北西側が石器を使用する作業スペースだったと考えられる。

SH1 遺構面からは，土器 (1 ～ 6)，鉈 (85)，台石 (88)，砥石 (89) が，埋土からは土器 (7 ～ 10)，磨石 (90) が出土している。床面出土土器の形態から，若島一則氏によるⅢ－ 1 期 [1] に属すると考えられる。

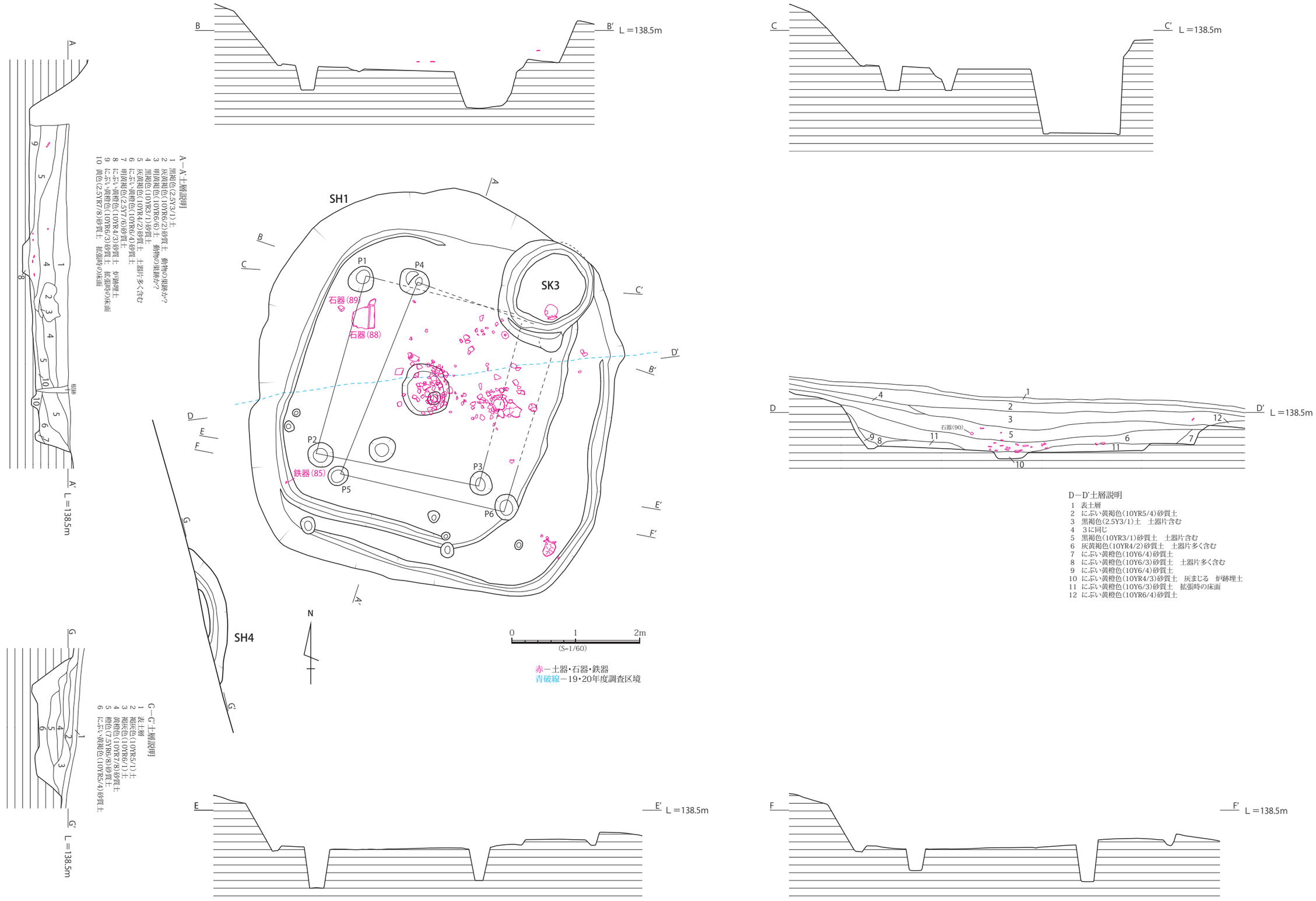
SH4 は SH1 の南西約 1.1m に位置する竪穴住居跡である。約 215cm の範囲で緩やかな弧を描く壁とそれに伴う床面を確認したが，大部分が西側調査範囲外へと延びている。確認した部分だけでは平面形状は想定しにくいが，近接する他の住居跡の形状を参考にすると隅丸方形が考えられ，その場合，確認部分が住居の角にあたる。床面最高所は標高 138.15m，残存する壁高は最高で 64cm である。壁面に沿って壁溝を確認し，残存する規模は，幅 5 ～ 10cm，深さ約 7cm である。確認した範囲だけでは，本住居跡の規模は想定し得なかった。

SH4 埋土からは，土器 (16) が出土している。遺存状況が悪いため土器の形態では時期が想定しにくいが，少なくともⅡ－ 3 期以降に属すると考えられる。

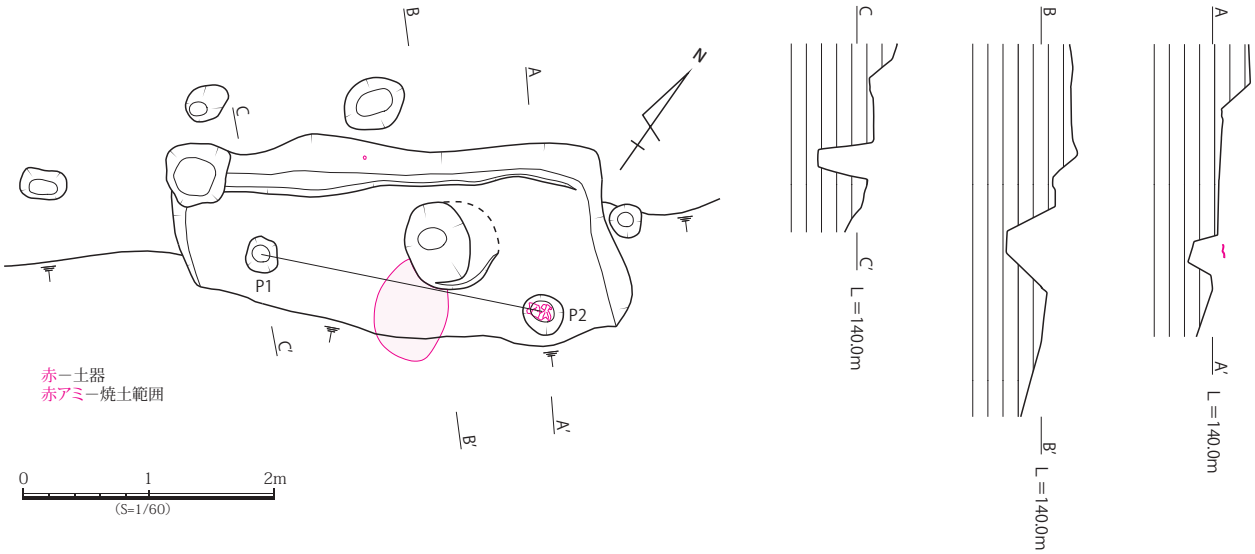
○ SH2（第 7 図）

SH2 は SH1 の北東約 12m に位置する竪穴住居跡で，北西側は東側平坦面と切り合っている。北西壁及びその両端に続く南西壁と北東壁の一部とそれに伴う床面が北東－南西ラインで約 318cm，北西－南東ラインで約 90 ～ 140cm の範囲で残存するが，それ以外は流失している。残存する部分から平面形状は方形と想定される。床面最高所は標高 140.14m，残存する壁高は最高で 22cm である。北西壁の壁面に沿って，約 280cm の範囲で壁溝を確認し，残存する規模は，幅 4 ～ 14cm，深さ約 3cm である。

主柱穴は壁面との位置関係と規模から P1，P2 の 2 本と考えられる。P1 は底面形状が長径 15cm，短径 13cm の長円形で，底面標高は約 139.69m である。P2 は底面形状が長径 20cm，短径 15cm の長円形で，底面標高は約 139.82m である。P1 － P2 間の柱間距離は約 230cm となる。南東側に P1 － P2 に対応する主柱が想定されるが，残存状況からは，本住居の規模については想定し得なかった。



第６図　SH1・４実測図（S=1/60）



第７図　SH2 実測図（S=1/60）

床面中央には長径約 70cm，短径約 58cm の長円形の範囲で焼土が確認された。炉跡と想定される遺構は確認できなかったが，流失部分に炉跡が存在していた可能性がある。

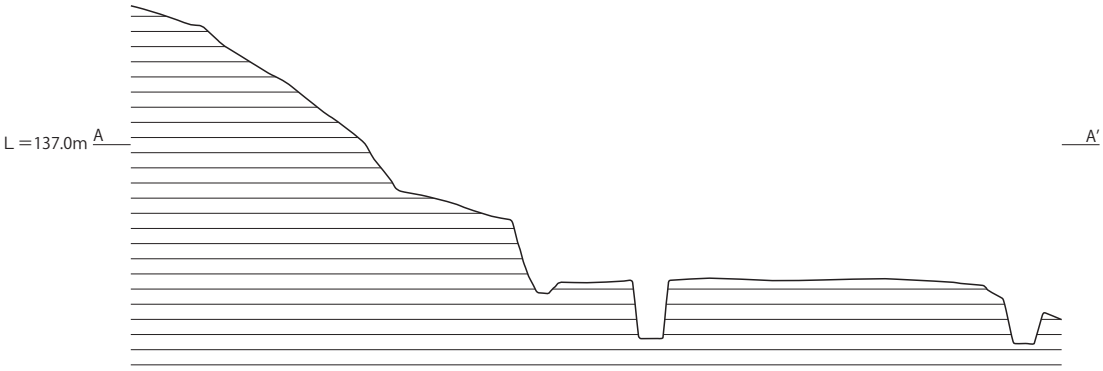
SH2 の埋土からは，土器 (11) が出土した。P2 の埋土上から出土しており，SH2 の時期そのものを表してはいないが，その形態から，Ⅲ－１期に属すると考えられる。また，SH2 は，検出状況から東側平坦面に先行する。

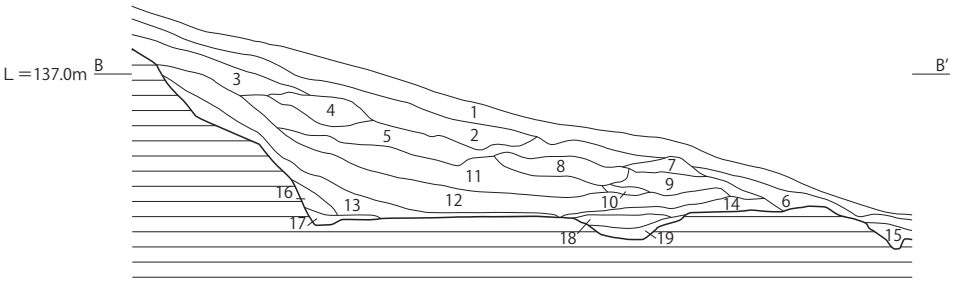
○ SH3（第８図）

SH3 は SH1 の南約 5.4m に位置する竪穴住居跡である。北東壁の一部及び北西壁の一部とそれに伴う床面を確認したが，北西壁はさらに調査範囲外へと延びており，全体は確認し得なかった。床面は，残存する壁に沿って約 234 ～ 390cm の範囲で残存するが，南東側は流失し，南西側は調査範囲外へ続いている。残存部分から平面形状は隅丸方形と想定される。床面最高所は標高 135.96m，壁高は最高で 49cm である。壁面に沿って壁溝を確認し，残存する規模は，幅 6 ～ 45cm，深さ約 3 ～ 8cm である。

また，壁の掘り方に沿って，掘り方の外側へ約 30 ～ 200cm 離れた位置で掘り込みに伴う平坦面を確認した。この平坦面は，調査範囲外から南西－北東方向へ約 6m 延び，北東壁に沿う形で南東へ向きを変え，約 3m 延びる。掘り込みの高さは最高 133cm である。この平坦面は平面形状からも SH3 の建築に伴い，傾斜面を造成した際に崩れ防止や垂木のスペース確保などの意図で造られたものと考えられる。

主柱穴は壁面との位置関係と規模から P1，P2 の２本と考えられる。P1 は底面形状が長径 19cm，短径 14cm の長円形で，底面標高は約 135.47m である。P2 は底面形状が径約 15 ～ 17cm の歪な円形で，底面標高は約 135.43m である。P1 － P2 間の柱間距離は約 295cm となる。P1 － P2 に対応して，調査範囲外に２本の主柱が想定できる。その場合，P1 の北西壁と北東壁へ





B－B′土層説明

1　表土層
2　褐灰色(10YR4/1)土
3　橙色(7.5YR6/8)砂質土
4　橙色(7.5YR6/6)砂質土
5　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
6　５層に同じ
7　黒褐色(10YR3/1)土　根が多い
8　黄橙色(10YR7/8)砂質土
9　褐灰色(10YR5/1)土
10　明褐色(7.5YR5/6)土
11　明黄褐色(10YR6/6)砂質土
12　明黄褐色(10YR6/8)砂質土
13　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
14　褐灰色(10YR5/1)砂質土　炭化物含む
15　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
16　黄橙色(10YR8/6)砂質土
17　明黄褐色(10YR7/6)砂質土　堅くしまる
18　橙色(7.5YR6/8)粘質土　炉の埋土
19　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土　炉の埋土

第８図　SH3 実測図（S=1/60）

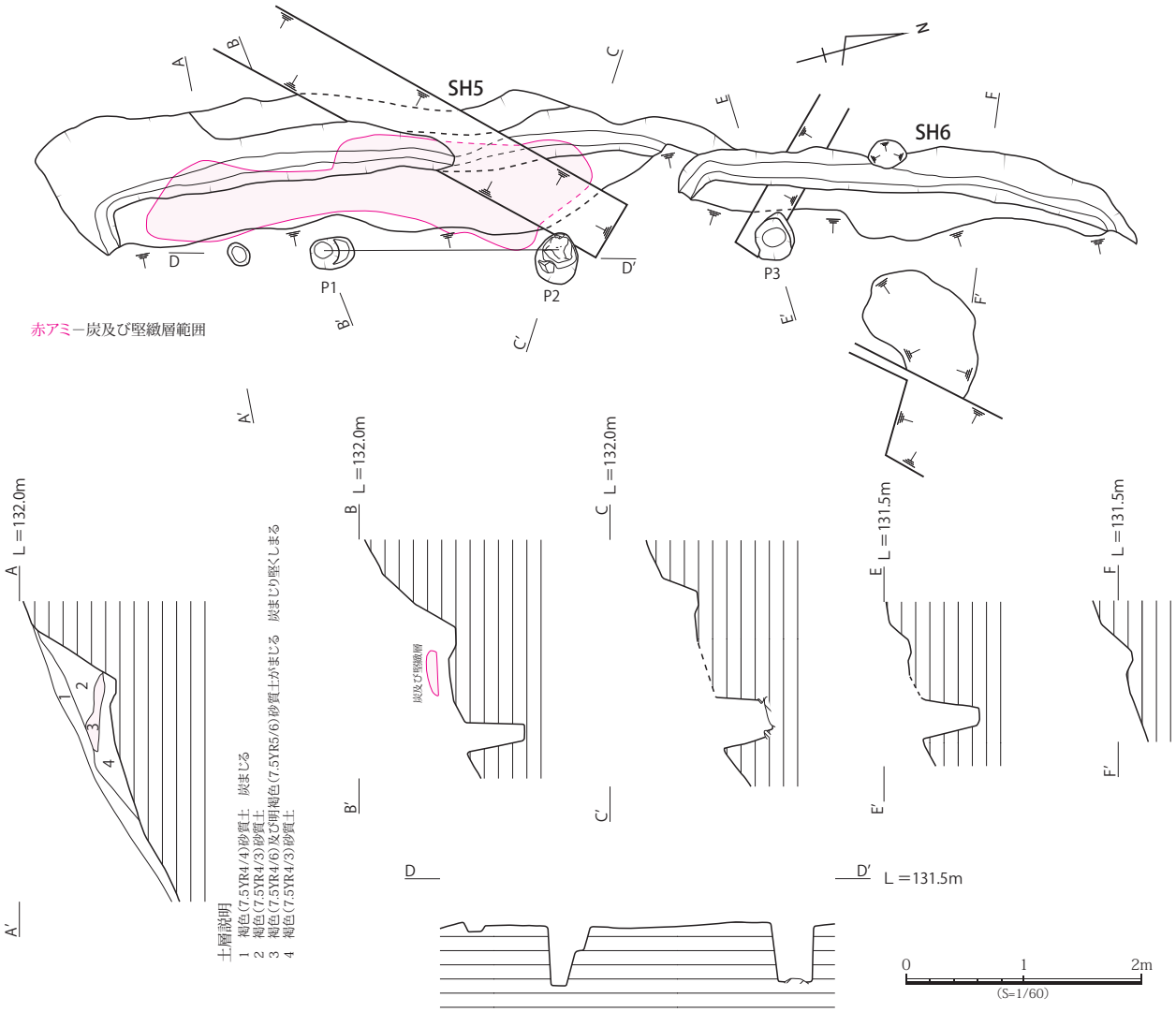
の距離を援用すると，本住居跡は北西－南東ライン約 470cm，北東－南西ライン約 550cm の隅丸方形の住居跡と想定できる。

また，想定される床面の中央付近に調査範囲外へ延びる 90×30cm 大の掘り込みを確認した。その位置と直上の埋土ではないが，B － B’ の 14 層に炭化物が含まれることもあわせると，炉跡と想定される。

SH3 遺構面からは，土器 (12・13) が，埋土からは土器 (14・15) が出土している。床面出土土器の形態からⅡ－ 3 期に属すると考えられる。

○ SH5・6（第 9 図）

SH5 は SH1 の南東約 14m, 尾根中腹の緩斜面上に位置する竪穴住居跡で, 北端で SH6 と切り合っている。南壁の一部及び西壁とそれに伴う床面が南北約 485cm，東西約 40 ～ 70cm の範囲で残



第 9 図　SH5・6 実測図（S=1/60）

存するが，それ以外は流失している。残存する部分から平面形状は方形と想定される。床面最高所は標高 131.28m，残存する壁高は最高で 71cm である。壁面に沿って，南壁で約 40cm，西壁で約 475cm の範囲で壁溝を確認し，残存する規模は，幅 5 ～ 11cm，深さ約 5cm である。

主柱穴は壁面との位置関係と規模から P1，P2 の 2 本と考えられる。P1 は底面形状が長径 16cm，短径 14cm の長円形で，底面標高は約 130.59m である。P2 は底面に約 22×24cm の範囲で礫が表出しており，そこを底面とすると底面標高は約 130.66m である。P1 － P2 間の柱間距離は約 200cm である。P1，P2 の西壁との距離は，P1 が約 80cm，P2 が約 95cm であり，南北の床面規模もふまえると主柱が 2 本とは考えにくい。P1 － P2 に対応する主柱を想定すると少なくとも 4 本以上の主柱が考えられる。ただし，床面，主柱の残存状況からは，本住居の規模については想定し得なかった。

また，床面埋土上からは，南北約 380cm，東西約 36 ～ 86cm の範囲で，厚さ約 5 ～ 10cm の炭の混じる堅緻な層を検出した。この層は，住居跡直上埋土である A － A’ 4 層の上に堆積することから，住居に伴うものとは考えにくく，住居廃絶から，それほど遠くない時期に住居掘り方の窪みを利用して，何らかの理由で火を使用した痕跡と想定される。

SH5 の埋土からは，土器 (17 ～ 20)，鉄器 (86) が出土した。土器の形態から，Ⅲ－ 1 ～ 2 期に属すると考えられる。なお，検出時の切り合い関係から後述の SH6 よりは先行する。

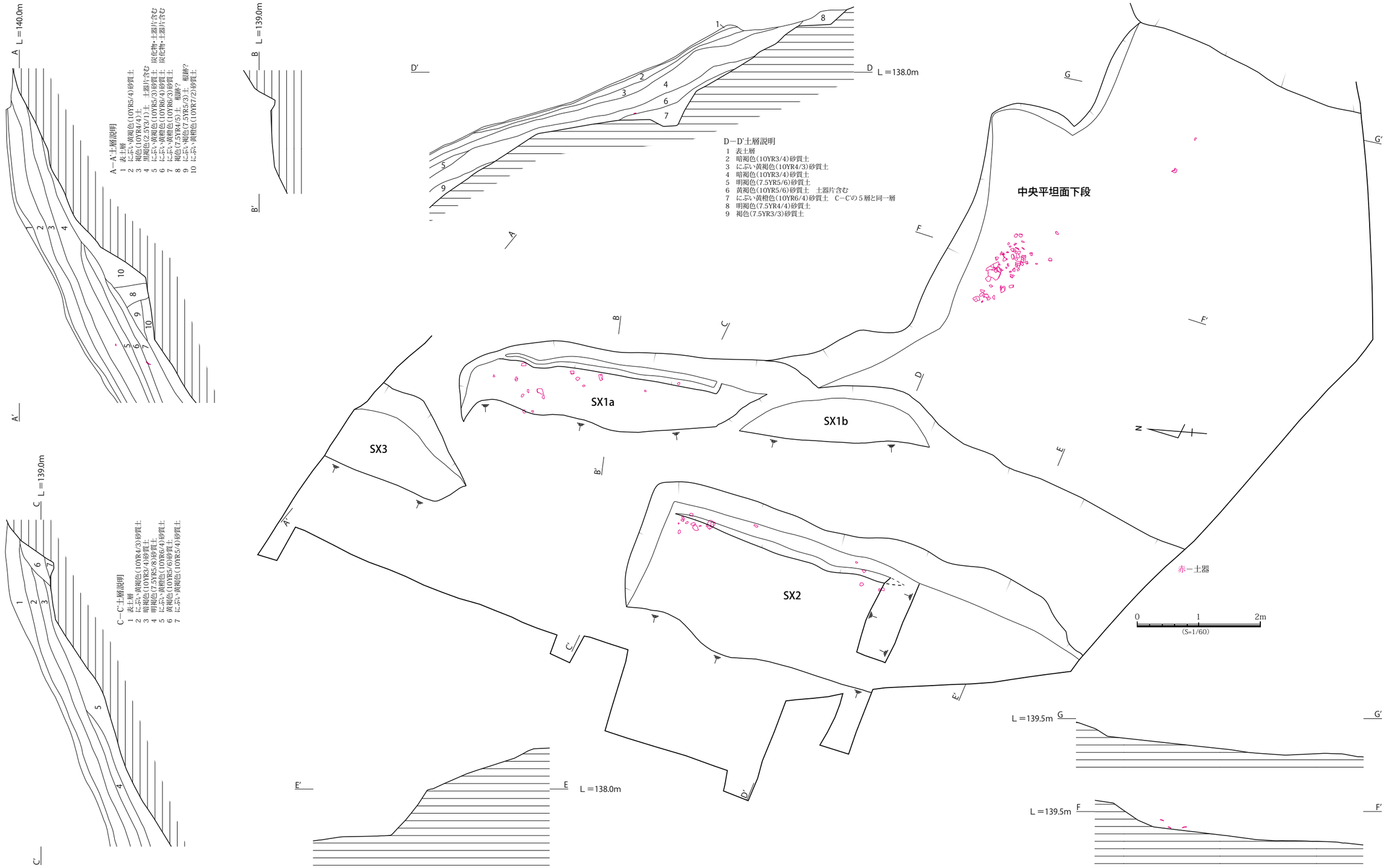
SH6 は SH5 の北側に切り合って位置する。南壁の一部及び西壁と西壁から角度を変えてわずかな北壁と，それらに伴う床面が南北約 360cm，東西約 24 ～ 62cm の範囲で残存するが，それ以外は流失している。残存部から平面形状は方形もしくは隅丸方形と想定される。床面最高所は標高 131.42m，残存する壁高は最高で 26cm である。壁面に沿って，南壁で約 32cm，西壁で約 340cm，北壁で約 10cm の範囲で壁溝を確認し，残存規模は，幅 6 ～ 16cm，深さ約 5cm である。

主柱穴は壁面との位置関係と規模から P3 と考えられる。P3 は底面形状が長径 19cm，短径 15cm の長円形で，底面標高は約 130.69m である。P3 が西壁から約 65cm，南壁から約 85cm の距離に位置することと残存する床面形状から，P3 から 200cm 程度北側に離れた流失部分に主柱の存在を想定できる。この時，P3 の位置や南北の床面規模もふまえると主柱が 2 本とは考えにくく，少なくとも 4 本以上の主柱が想定できる。ただし，床面や主柱の残存状況からは，本住居の規模については想定し得なかった。

SH6 遺構面からは，土器 (21) が，埋土からは，土器 (22・23) が出土した。土器の形態から，Ⅲ－ 1 ～ 2 期に属すると考えられる。なお，検出状況から先述の SH5 よりは後出することや SH5 では埋土中からしか，土器が出土していないことから，Ⅲ－ 1 期頃に SH5 の廃絶と SH6 の建築が行われたものと考えられる。

○ SX1・2・3・中央平坦面（第 5・10 図）

SX1 は SH1 より北西に約 9m 離れて位置するテラス状遺構である。東側は中央平坦面と接している。西側は急傾斜になっており，流失している可能性がある。等高線に平行するように掘り込ん



第 10 図　SX1・2・3・中央平坦面実測図（S=1/60）

で平坦面を形成しており，北側の比較的広い平坦面と一段下がる南側の狭い平坦面に分かれる。ここで北側平坦面をSX1a，南側平坦面をSX1bと呼称して述べていきたい。

SX1aは東壁が約500cm，東壁北端から角度を変えて延びる北壁は約70cm残存する。壁高は最高で52cmである。平坦面は東壁に沿って，奥行55～105cmの範囲で残存し，平坦面最高所は標高138.85mである。東壁の壁面に沿って約342cmの範囲で壁溝を確認し，残存する規模は，幅3～6cm，深さ約6cmである。ここで本遺構の性格を考えてみたい。SX1aは東壁から北壁にかけてあたかも方形住居のように角度を変じるが，住居であるとすれば想定される主柱の位置に，柱穴が全く確認できなかった。また，形状からも通路とは考えにくい。床面から土器片が出土していることからも，何らかの作業場としての性格が考えられる。

SX1a遺構面からは土器(24)，埋土からは土器(25・26)が出土しており，その形態からⅡ－3期に属すると考えられる。

SX1bは東壁が約370cmの範囲で緩やかな弧を描いて残存する。その内，北側約100cmはSX1aの平坦面から掘り込まれており，SX1aとの比高差は約11cmである。壁高は最高で23cmである。平坦面は東壁に沿って半月状に残存し，奥行は最高で71cmである。平坦面最高所は標高138.78mである。SX1bに伴う遺物は出土しておらず，SX1aとの先後関係は確認できなかったが，東壁の検出状況から，時期差が無く，一体のものである可能性も考えられる。

SX2はSX1の西側に約95cm離れて位置するテラス状遺構である。南側は調査範囲外へ延びており，遺構全体は確認し得なかった。また平坦面の西側は急傾斜になっており，流失している可能性がある。東壁が確認範囲で約700cm，東壁北端からほぼ直角に方向を変じて延びる北壁が約188cm残存する。壁高は最高で74cmである。平坦面は東壁に沿って，奥行183～219cmの範囲で残存し，平坦面最高所は標高137.25mである。東壁の北側の壁面に沿って約390cmの範囲で壁溝を確認し，残存する規模は，幅15～24cm，深さ約11cmである。

ここで本遺構の性格を考えてみたい。SX2は東壁から北壁にかけて，方形住居のようにほぼ直角に角度を変じるが，住居とした場合に想定される主柱の位置に，柱穴が全く確認できなかった。平面形状から通路とは考えにくいことや，床面から土器片が出土していることからも，何らかの作業場としての性格が考えられる。

SX2遺構面からは土器(27)，埋土からは土器(28)が出土しており，その形態からⅢ－1期に属すると考えられる。また，土層観察からSX1より後出する。

SX3はSX1の北西側に約50cm離れて位置するテラス状遺構である。北側は調査範囲外へ延びており，遺構全体は確認し得なかった。また平坦面の西側は急傾斜になっており，流失している可能性がある。東壁を約218cmの範囲で確認し，北側は調査範囲外へ続く。平坦面は東壁に沿って，奥行58～102cmの範囲で残存し，平坦面最高所は標高137.94mである。

SX3の確認部分からは，その性格については想定できなかった。

SX3に伴う遺物は出土していないが，SX3の西側斜面からは土器(29～34)が出土している。

その形態からⅢ－１期に属する土器と考えられ，SX3 の時期を直接決定づけるものではないが，出土した層位からは，それほどの誤差はないと考えられる。

中央平坦面は，尾根筋の頂部，SX1 の東側に隣接して位置する。北西－南東方向では幅約８～12m，南西－北東方向では幅約 17m の範囲で確認した。緩やかな傾斜を持つ平坦面を形成し，周辺地形からも北側，南側双方の調査範囲外へ尾根筋に沿って延びると考えられる。平坦面は SX1a と SH1b の境付近から南東に向けて上段と下段に分かれる。上段の最高所は標高 140.92m，下段の最高所は標高 139.34m である。上段から下段への掘り込み部分の比高差は最高で 40cm である。この掘り込みは，ラインの形状から意識的に造成したとは考えにくいことから，尾根筋の緩斜面をわずかに造成して平坦面を形成する際に，障害物の排除など何らかの理由で生じたものと考えられる。

平坦面下段では，SH1b から約 190cm，直近の掘り込みから約 30cm 離れた位置から，約 150×50cm の範囲で，土器だまりを確認した。出土した土器 (40 ～ 44) の形態はⅢ－１～２期に属するものと考えられる。

中央平坦面は，集落の中心と想定される場所にあることやその規模から，広場としての性格が想定できる。時期については，中央平坦面からは住居など他の遺構が確認されなかったことから，Ⅲ－１～２期のみでなく，集落が形成された当初から広場としての性格を持った空間であったと考えられる。

○ SX4（第 11 図）

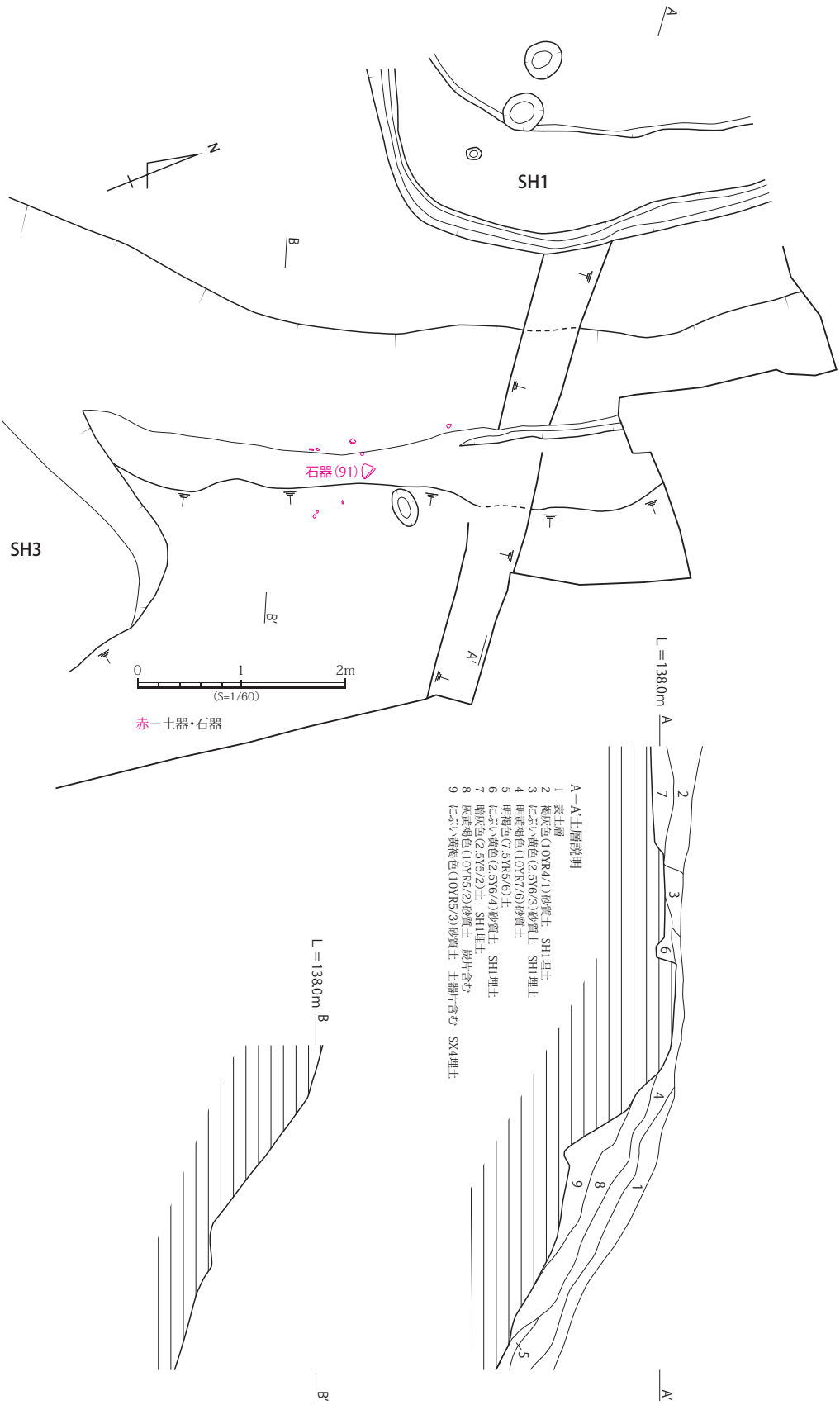
SX4 は SH1 の南東側に約 74cm 離れて位置するテラス状遺構である。北側は調査範囲外へ延びており，遺構全体は確認し得なかった。また，平坦面の東側は急傾斜になっており，流失している可能性がある。西壁は床面を伴う箇所では約 518cm，床面が調査範囲外へ続く箇所では約 190cm の範囲で確認したが，さらに北側の調査範囲外へ延びると想定される。壁高は最高で 87cm である。平坦面は西壁に沿って，奥行 29 ～ 90cm の範囲で残存し，平坦面最高所は標高 137.16m である。また西壁の壁面に沿って北側 156 ㎝の範囲で壁溝を確認し，残存する規模は，幅４～ 12cm，深さ約 4cm である。

ここで本遺構の性格を考えてみたい。平面形状から通路とは考えにくいことや，床面から土器片や砥石 (91) が出土していることからも，何らかの作業場としての性格が想定される。

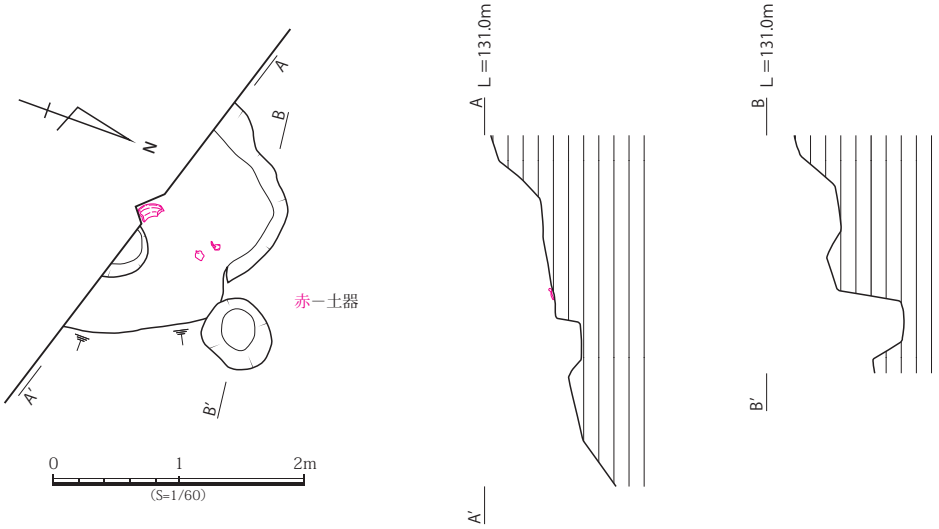
SX4 遺構面からは土器 (35)・砥石 (91)，埋土からは土器 (36) が出土しており，土器の形態からⅢ－１期に属すると考えられる。また，土層観察から SH1 に先行する。

○ SX5（第 12 図）

SX5 は SH5 の南東側に約 3.3m 離れて位置するテラス状遺構である。南側は調査範囲外へ延びており，遺構全体は確認し得なかった。また，平坦面の東側は急傾斜になっており，流失している可能性がある。北西壁が確認範囲で約 90cm，北西壁北端から方向を変じて延びる北東壁が約



第 11 図　SX4 実測図（S=1/60）



第 12 図　SX5 実測図（S=1/60）

74cm 残存する。壁高は最高で 32cm である。平坦面は北西壁に沿って，奥行 115 ～ 197cm の範囲で残存し，平坦面最高所は標高 130.57m である。

また，平坦面上に，底面形状が長径約 32cm の長円形と想定されるピットを確認したが，調査範囲外に延びるため，全体は確認し得なかった。底面標高は約 130.24m である。平坦面の北東に隣接し，掘り方の外側にあたる位置にも，底面形状が長径 33cm，短径 26cm，底面標高は 129.91m のピットを確認した。形状・規模から，何らかの柱穴と考えられる。

本遺構の性格については，平面形状やピットを確認したことから住居である可能性もあるが，確認範囲だけでは断定し得なかった。

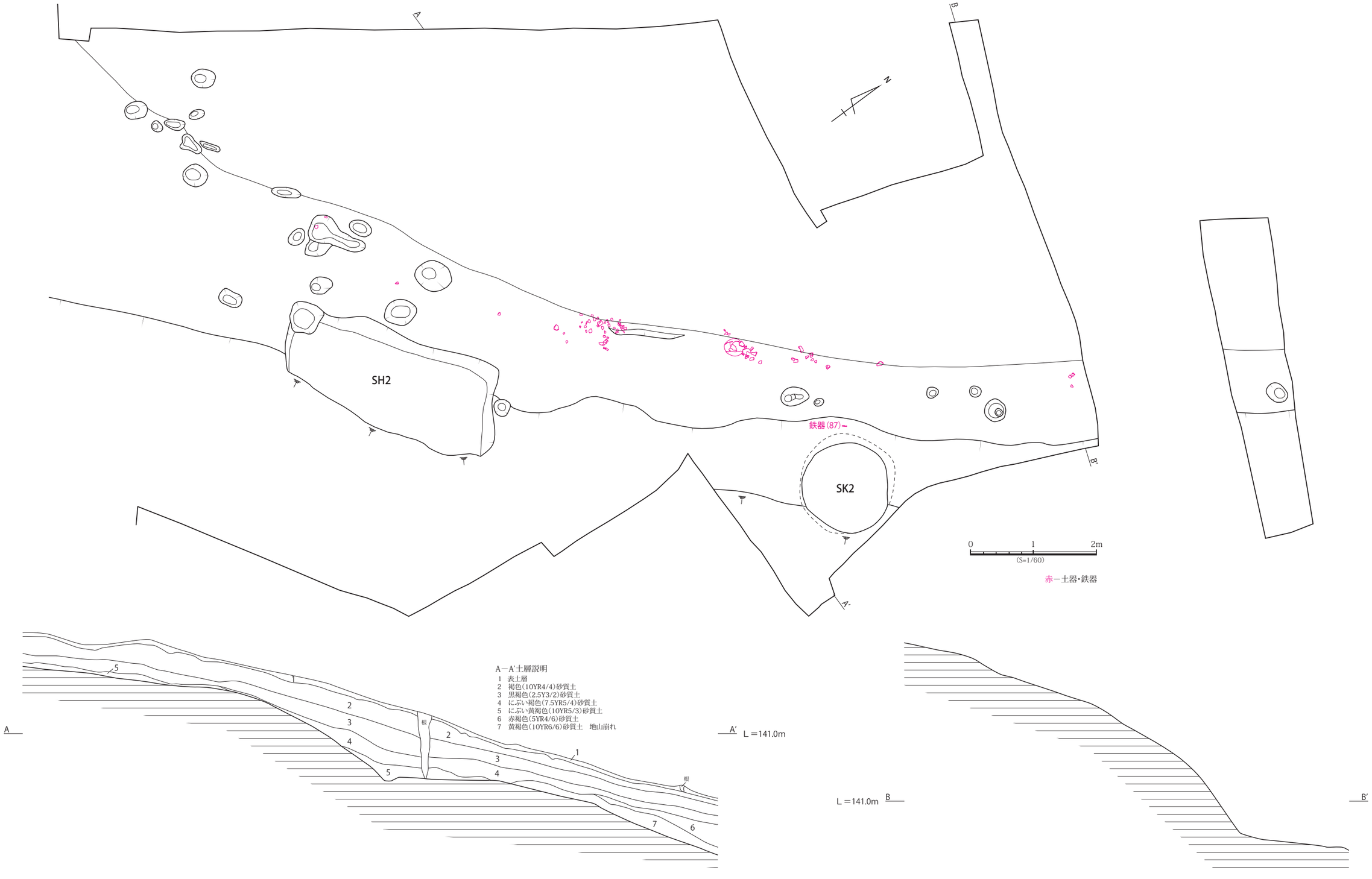
SX5 遺構面からは土器 (37・38)，埋土からは土器 (39) が出土しており，土器の形態からⅢ－ 1 期に属すると考えられる。

○東側平坦面（第 13 図）

東側平坦面は，中央平坦面の北東側に位置する。確認範囲の中央付近南寄りの平坦面東側で SH2 と切り合い，同じく中央付近北寄りの平坦面東側に約 35cm 離れて SK2 が位置する。北東－南西方向で，試掘溝で確認したものも含めて約 20m の範囲で，幅 92 ～ 360cm の平坦面を形成している。北東側は調査範囲外へ延びる。平坦面最高所は標高 140.47m，最低所は標高 140.22m である。

確認した平坦面の中央付近の北西側には溝状遺構を確認した。溝状遺構は平坦面の北西側の斜面と平坦面の境に造られており，残存規模は，119cm の範囲で幅 7 ～ 13cm，深さ約 5cm である。

平坦面上を中心に，不定形なものも含めて 24 のピットを確認した。これらのピットについては，SH2 や SK2 の至近のものについては，補助柱穴や附属する施設の柱穴の可能性があるが，確認状況からは，その性格を想定し得なかった。



第 13 図　東側平坦面実測図（S=1/60）

ここで，東側平坦面の性格について考えると，平面形状や北東から中央平坦面へ延びていくことから，広場へ続く通路であったと想定される。

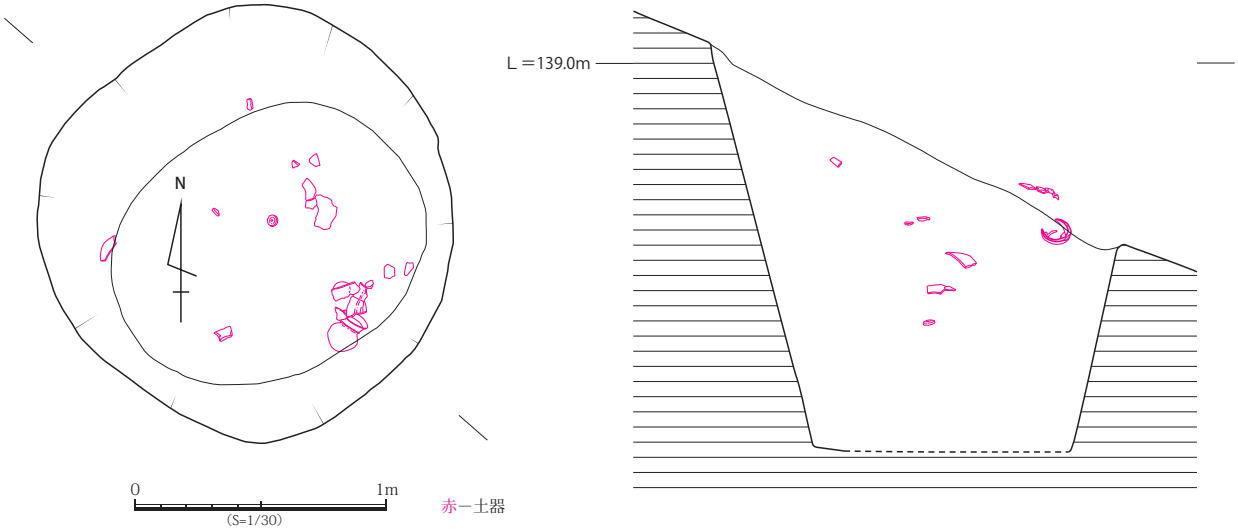
東側平坦面からは，土器 (45 ～ 47)，鉄器 (87) が出土し，土器の形態からⅢ－ 1 期に属するものと考えられる。

○ SK1（第 14 図）

SK1 は SH1 の約 4m 北東側に位置する土坑である。平面形状は長円形で，底面の規模は長径 126cm，短径 100cm，深さは最高 160cm，底面標高は約 137.45m である。

規模・形状から貯蔵用と考えられる。

SK1 埋土からは, 土器 (48 ～ 50) が出土している。遺構の年代を直接決定付けるものではないが, その形態からⅢ－ 1 期の時期に属する土器と考えられ，本遺構の廃棄時の下限はⅢ－ 1 期と想定される。



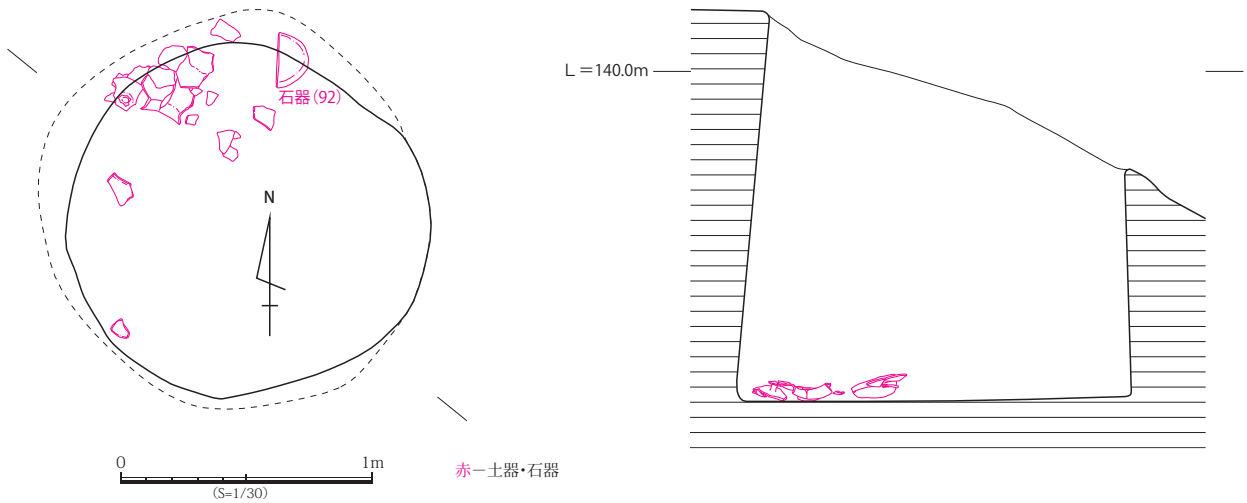
第 14 図　SK1 実測図（S=1/30）

○ SK2（第 15 図）

SK2 は SH2 の約 5m 北東側に位置する土坑である。平面形状は，ほぼ円形を呈し，底面の規模は長径 158cm，短径 150cm，深さは最高 154cm，底面標高は約 138.69m である。断面形状はフラスコ状を呈しており，いわゆる袋状土坑である。

規模・形状から貯蔵用と考えられる。

また，底面の北東側に集中して，土器や石器が出土したが，土器は欠損部分の割合が大きいため，貯蔵状況を示すものではなく，土坑廃絶時に廃棄したものと考えられる。また底面直上に廃棄されていることから，土坑内に土が流入して，貯蔵の用途を失ったため廃棄されたのではなく，何らかの理由で廃棄されたものであると想定される。後述するように，これらの土器はⅡ－ 3 ～Ⅲ－ 1



第 15 図　SK2 実測図（S=1/30）

期に属しており，同じくⅢ－ 1 期に属し，西側に隣接する東側平坦面の造成に伴って，位置的に邪魔になるために廃棄された可能性が考えられる。

SK2 底面からは，土器 (51 ～ 54)・石器 (92) が，埋土からは土器 (55 ～ 57) が出土している。その形態からⅡ－ 3 ～Ⅲ－ 1 期に属すると考えられ，本遺構の廃棄時の下限はⅢ－ 1 期と想定される。

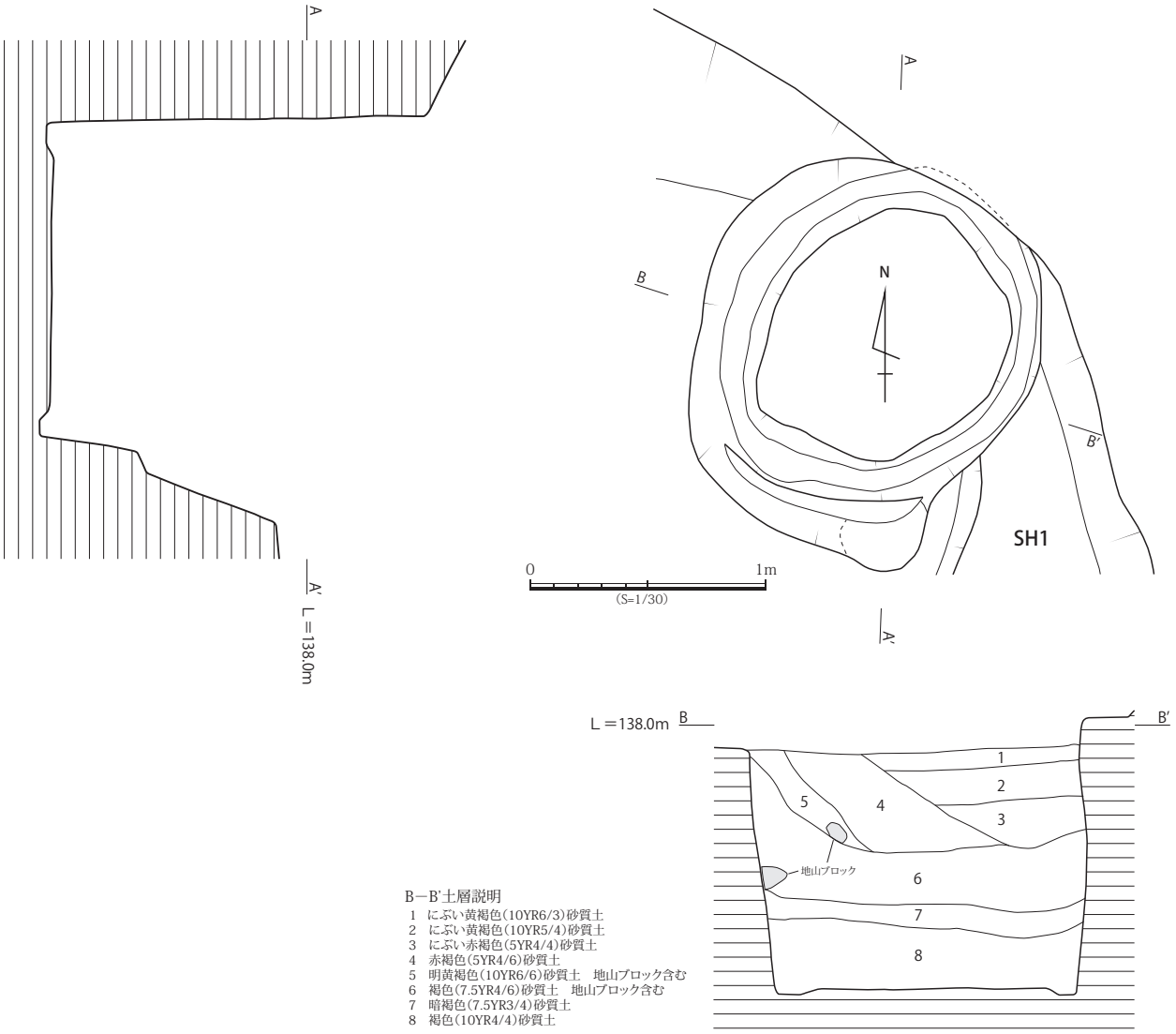
○ SK3（第 16 図）

SK3 は SH1 内の北東隅に位置する土坑である。平面形状は長円形で，底面の規模は長径 112cm，短径 97cm，深さは最高 155cm，底面標高は約 136.91m である。また，壁面に沿って全周にわたり壁溝を確認した。壁溝の規模は，幅 7 ～ 13cm，深さ約 4cm である。

また，南側壁面には，86cm の範囲で幅約 4 ～ 9cm の弧状の平坦面を確認した。平坦面最高所は標高 137.32m である。昇降のための施設の可能性が考えられるが，確認状況だけでは断定し得なかった。

本土坑は，規模・形状から貯蔵用と考えられる。

SK3 に伴う遺物は出土していないが，掘り方南隅の膨らみが SH1 の柱穴による掘り込みと想定されることや SH1 床面に伴うと想定される土器 (1) が SK3 上端よりも上層から出土したことから SH1 に先行すると考えられる。また，B － B’ 土層における 5・6 層は地山ブロックを含んでおり，1 ～ 5 層までは自然堆積とは考えにくい。7 層まで土が流入した時点で，SH1 の建築が行われ，その際に埋められたものと想定される。また，SK3 掘り方の北東側は，SH1 の掘り方と共用しており，このことは SK3 の位置を北東端として SH1 が建築されたことを示していると考えられる。これらのことから，本遺構の直接の時期を決定づけるものではないが，本遺構の廃棄時の下限は SH1 の時期であるⅢ－ 1 期と想定される。



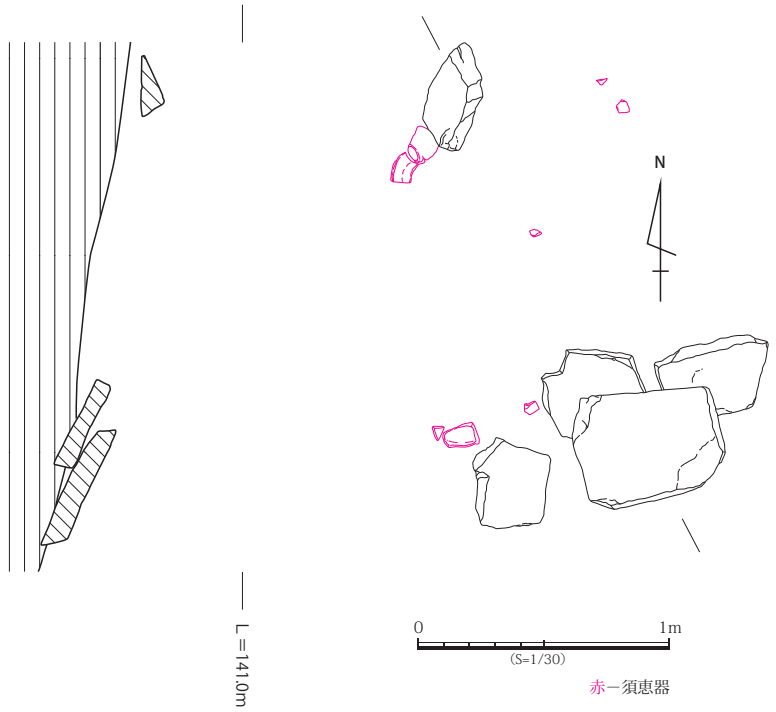
第 16 図　SK3 実測図（S=1/30）

②古墳時代後期以降の遺構

○配石遺構（第 17 図）

配石遺構は，調査区の北東側，尾根筋の緩斜面上に位置する遺構である。集落遺構の SH2 と東側平坦面の埋土上に形成される。41×25×9cm と 38×31×7cm 程度の板石 2 枚，その 2 枚の板石上の一角に架かる 55×41×8cm 程度の板石 1 枚，そこから 11cm 南西側に離れて，32×24×7cm 程度の板石 1 枚を確認した。これらの石のグループは等高線と平行に配置されている。また，このグループから北東へ 150cm 離れた位置にも，斜めに傾いた状態で 27×17×7cm 程度の板石を確認した。この石も検出状況から 4 枚の板石のグループと一連のものと考えられるが，攪乱によって，斜めになっているとも考えられ，本遺構は，本来はさらに拡がるものだった可能性もある。

これらの石の間からは，破片の状態で須恵器の広口壺 (82) が出土した。破片が散らばっていることから，破砕された可能性も考えられる。その形態や技法から中村浩氏によるⅣ型式 1 段階 [2)]



第 17 図　配石遺構実測図（S=1/30）

に属すると考えられる。

また，中央平坦面やそこから緩やかに南東方向へ下る緩斜面上埋土からは須恵器 (73 ～ 75・77・78・80・81・83・84) が出土している。その形態や技法からⅡ型式 6 段階の後半からⅣ型式 1 段階までに属するものと考えられる。また，須恵器の中には，破砕されたと想定される環状瓶 (83) と子持台付壺？ (84) が含まれている。

これらのことを念頭に置いて，本遺構の性格を考えると尾根筋の平坦面では，古墳時代後期から奈良時代初頭まで何らかの祭祀が行われており，配石遺構もその最終期の施設として使用されたと想定される。眼下には古墳時代後期の古墳である上ヶ原第 34 号古墳を含めた上ヶ原古墳群 D 支群が望めることから，古墳との密接な関連も考えられる。

(4)　出土遺物

本遺跡の出土遺物としては，土器 (弥生土器・土師器)・須恵器・鉄器・石器・土製品がある。その中で特徴的な遺物について述べるが，個々の遺物の詳細については，後掲する観察表を参照されたい。

○土器（第 18 ～ 24 図）

本遺跡から出土した土器について，時期を追って特徴的なものについて概観してみたい。

・弥生時代終末

甕形土器 (55・58)，壺形土器 (26)，器種不明品 (14・15) は，内面の口縁部屈曲点には接合部

分の調整の結果としての平坦面は見られず，緩やかなカーブを描くか，稜を持つ。口縁部中位あたりから外に湾曲し，端部も薄くなり，端部は (15) は平らに，それ以外は丸く，もしくはやや尖り気味に収める。(58) の底部は平底ではあるが丸みを帯びている。また，碗形土器 (53・71) は底部から口縁部にかけて徐々に器厚を減じ，底部は，(53) は平坦気味の丸底，(71) は丸みを帯びた平底である。これらの特徴を有するものは弥生時代後期末葉のものと考えられる (Ⅱ－３期[3])。

・古墳時代前期

甕形土器 (11・18・56)，鉢形土器 (66) は，口縁端部に向け，徐々に薄くなり，端部は尖り気味に収めている。また口縁部接合点まで内面のヘラケズリが続き，鋭い稜を持つ。(11・56) の残存する胴部上位は丸みを帯びる。また，壺形土器 (46・52)，鉢形土器 (31) は，胴部最大径をほぼ中位に持ち，器厚は，(46･31) については口縁部屈曲点やその直下と底部付近でわずかに厚いものの，ほぼ一定である。体部は倒卵形を呈し，底部の残る (46・31) は丸底である。碗形土器 (34・70) は底部から口縁部にかけて徐々に器厚を減じ，端部は尖り気味に収め，丸底である。これらの特徴を有するものは古墳時代初頭のものと考えられる (Ⅲ－１期)。

甕形土器 (22) は，Ⅲ－１期のものに特徴が似ているが，前期のものより，器厚が薄く一定である。これらの特徴を有するものは古墳時代前期のものと考えられる (Ⅲ－２期)。

・非在地系土器

本遺跡では，いわゆる山陰系土器の出土比率が他の広島湾沿岸の遺跡に比べて高い。ここで，特徴的な非在地系の土器について見てみたい。

甕形土器 (60) は，やや外反して開く薄い二重口縁を持ち，口縁端部は尖り気味に収める。これらの特徴を有するものは，山陰系土器の中でも鍵尾式土器[4] にあたるものと考えられる。

甕形土器 (10・48・49・51) は，二重口縁を持ち，頸部から口縁部にかけて「く」の字状に短く外反し，その端部は拡張部の基部より，横方向へ鋭く突出する。拡張部の端部は丸く収めるか，平坦に収める。(49) の体部の器形は倒卵形である。これらの特徴を有するものは，山陰系土器の大木権現山式土器[5] にあたるものと考えられる。

壺形土器 (42) は，二重口縁を持ち，端部は平坦に収める。また，大木権現山式土器にあたると考えられるものより，口縁部の器厚が厚く，残存部から想定される体部は，球形化が進んでいる。鼓形器台 (72) は，筒部の高さが想定される器高の 1/6 以下である。これらの特徴を有するものは，山陰系土器の小谷式土器[6] にあたるものと考えられる。

甕形土器 (36) は，二重口縁を持ち，拡張部外面に最多で７条の浅い凹線を持つ。胴部は倒卵形であるが，胴部下半でも膨らみがわずかに見られる。これらの特徴を持つものは，高橋護氏による吉備地方南部平野の土師器編年の 10b 期[7] にあたるものと考えられる。また高坏 (68・69) の脚部は柱部から屈折し，低く「ハ」の字状に開き，高坏としては，(68) は短脚，(69) は標準的な長さの脚であるといえる。脚部しか残存していないため，いわゆる庄内系高坏[8] の可能性もあるが，吉備系のものだとするなら，(68) は 10a 期，(69) は 10b 期にあたるものと考えられる。

甕形土器 (19・63) は，外面はハケ目調整を主体とし，内面はヘラケズリを施し，口縁端部に至る直前で強くつまんでいる。(63) は内面に指頭圧痕を残し，縦方向のハケ目調整の後，横方向の

ハケ目調整を施している。これらの特徴を持つものは，いわゆる布留系甕[9]と考えられる。ここで，(19) と (63) を比較すると，(63) は口縁端部が肥厚しており，(19) は内面のヘラケズリが口縁部屈曲点付近まで施され，器厚が薄く一定である。このことから，(63) は米田敏幸氏による編年の庄内式期Ⅳ[10]，(19) は布留式期Ⅰにあたるものと考えられる。

出土土器の中で甕形土器について，在地系・非在地系の土器の割合を示すと在地系 61％，山陰系 30％，布留系甕 6％，吉備系 3％となる。

ここで，在地系土器と非在地系土器の併行関係について見てみたい。従来，在地系のⅡ－3期を庄内式，鍵尾式に，Ⅲ－1期を庄内式新相ないしは布留0式，大木権現山式に，Ⅲ－2期を布留1式，小谷式に併行するという考え方がなされてきた[11]。本遺跡で出土した非在地系土器で遺構に伴うものを見ると，山陰系の小谷式土器と想定される (42) と畿内系の布留式期Ⅰにあたると想定される (19) は，同遺構もしくは埋土中出土の在地系土器の時期がⅢ－1期である。しかし，これ以外のものについては，従来想定されている併行関係と一致している。また，調査区内出土のものも含めた遺跡全体で出土した在地系土器の時期はⅡ－3～Ⅲ－2期にわたり，Ⅲ－1期のものが主体である。これに対し，特に出土点数の多い山陰系の土器を見ると，鍵尾式～大木権現山式～小谷式のものが出土し，主体となるのは大木権現山式のものであり，先述の併行関係と矛盾しない。また吉備系の土器については，5期に細分されている 10 期が 3 世紀後半頃～ 4 世紀中頃と想定されている[12]ことから，10a・b 期の土器は古墳時代初頭の時期であるⅢ－1期と併行するとして矛盾はない。

このように，本遺跡出土の在地系土器と非在地系土器を見ると従来の併行関係の考え方を傍証する結果となった。しかし，本遺跡出土の非在地系土器は，口縁部付近しか残存していないものが多く，時期の想定が十分とは言えず，近年の各地での編年作業の成果や今後の調査事例もふまえて，詳細な検討が必要ではあろう。

なお，遺跡全体で出土した土器の時期を見ると弥生時代終末から古墳時代前期のものまでが，継続的に出土している。しかし，古墳時代前期以降に本遺跡で継続的に使用されたと考えられる土器は出土しておらず，時期を空けて，古墳時代後期の須恵器が出土している。

・甑形土器 (6)

本遺跡では，甑形土器 3 点が出土している。そのうち (6) には，主に刷毛状工具と櫛歯状工具，一部ヘラ状工具によって，線刻が施されている。刷毛状工具と櫛歯状工具によるものには，強く深めに線を施し，明確にラインを意識して描いたと考えられるものと，弱く浅めに線を施し，何度か重ねて描いた箇所も見られるなど，ラインをそれほど意識していないと考えられるものがある。ただ，何を描いたものかは，判然としない。また，順番は，ヘラ状工具による線刻の後，刷毛状工具と櫛歯状工具による線刻を施しており，ヘラ状工具による線刻が刷毛状工具と櫛歯状工具による線刻によって消えている箇所が見られる。そのため，全体が一連のものでない可能性も考えられる。

○須恵器（第 24 図）

本遺跡から出土した須恵器について，時期や特徴的なものについて概観してみたい。

・坏蓋 (73 ～ 76)

(73 ～ 75) は，蓋の内面に比較的長いかえりを持ち，かえりは口縁端部よりも下方に延びている。また天井部に断面形がひし形の宝珠形のつまみを持つ。これらの特徴を持つものは，田辺昭三氏による陶邑編年[13]の TK217 型式，中村浩氏による陶邑編年[14]のⅢ型式 1 段階，向田裕始氏による広島県の 7 世紀の土器編年[15]のⅡ型式にあたる。(76) は，天井部のみ残存するが，(73 ～ 75) のつまみよりは幅が広い扁平なボタン状のつまみを持つ。この特徴を持つものは，田辺編年の TK48 型式，中村編年のⅢ型式 3 段階，向田編年 7 世紀のⅢ型式にあたる。

・坏身 (77 ～ 79)

(77) は，器高 2.7cm で扁平な器形をしており，口縁端部をわずかに内傾させた程度の形骸化した受部を持つ。これらの特徴を持つものは，田辺編年の TK217 型式，中村編年のⅡ型式 6 段階，向田編年 7 世紀のⅠ型式にあたる。(78) は，口径 8.8cm と小型で，平底であり，口縁部は外上方に開く。これらの特徴を持つものは，田辺編年の TK217 型式，中村編年のⅢ型式 1 段階，向田編年 7 世紀のⅡ型式にあたる。(79) は，復元底径 9.4cm で，口縁部は外上方へ延びる。また底部の端部近くに高台を断面「ハ」の字形に貼り付けている。これらの特徴を持つものは，田辺編年の TK48 型式，中村編年のⅣ型式 1 段階，向田編年 8 世紀のⅠ型式にあたる。

・皿 (80)

復元口径は 23.4cm と大きく，口縁部は緩やかなカーブを描きながら外上方へ延び，端部は平らに収めている。これらの特徴だけでは，時期は想定し得なかったが，田辺編年では TK43 型式以降に皿が出現し，TK217 型式以降に中心器形となるとし，中村編年では，Ⅲ型式 3 段階以降に皿が出現するとしているため，7 世紀中葉以降のものと考えられる。

・高坏 (81)

短脚の高坏である。復元底径は 8.5cm で，脚部はラッパ状に開き，端部を下方へ屈曲させてつまみ出している。これらの特徴を持つものは，田辺編年の TK217 型式，中村編年のⅢ型式 1 段階，向田編年 7 世紀のⅡ型式にあたるものと考えられる。

・広口壺 (82)

口径や頸部径を見ると，長頸壺と広口壺の中間位の大きさだが，特徴が同時期と考えられる広口壺に近いため，広口壺として報告する。

口頸部は基部から直立して立ち上がり，中位で大きく外湾して外上方にのびる。端部は上内方に屈曲させている。胴部最大径は肩部にあり，突帯をめぐらして，強く屈曲する。また，底部の端部近くに，短い高台を断面「ハ」の字形に貼り付けている。これらの特徴を持つものは，田辺編年の MT21 型式，中村編年のⅣ型式 1 段階，向田編年 8 世紀のⅠ型式にあたる。

・環状瓶 (83)

粘土板をつなぎ合わせ筒をつくり，それを環状にしている。外面の内周部から外周部にかけての面は稜により 3 区画に分けられており，列点文を外側及び中央の区画に 2 段，内側の区画に 1 段，

円周に沿ってめぐらしている。残存部分が少なく，口頸部の位置や台の有無は不明である。また，内面内径側に顕著だが，器壁が剥離しており，凹凸が激しい。成形時になされたとは考えにくく，焼成時のもの，経年劣化によるものとも考えられるが，外面の剥離が少ないこともふまえると，人為的に破砕した際のものと想定される。残存部分が少ないこともそのことを傍証するものであろう。

これまでの環状瓶の出土例を見ると，(83) と特徴の異なるものを除いて，6 ～ 7 世紀か 7 世紀前半の時期が想定されている[16]。このことと本遺跡の尾根筋で出土した須恵器の時期を考えると，(83) についても，7 世紀前半頃の時期を想定したい。

・子持台付壺？ (84)

扁平な球状の体部中位に鍔状突帯がめぐり，突帯下部と体部にかけて支脚が貼り付く。突帯上には断面「ハ」の字状を呈する高坏と想定される子の脚部が乗る。子は 1 点，支脚は 2 点が残存する。突帯上下の剥離面の間隔から，本来は計 8 か所の支脚の上に突帯を挟んで，それぞれ子が位置していたものと想定される。残存部から，本体は径の細い基部を持つ頸部がつく壺と考えられる。本体の底部が残存していないため断定はできないが，他の装飾付須恵器の例から，短脚か高台程度の脚が付くものと想定される。

このような特徴を持つ装飾付須恵器は，柴垣勇夫氏による分類[17]では，短脚の場合はⅡ 2a 類，高台程度の脚の場合はⅡ 3a 類にあたる。また，Ⅱ 2a・Ⅱ 3a 類は，山田邦和氏による装飾付須恵器の編年[18]のⅡ後期からⅢ期にあたり，Ⅱ 3a 類においては，親壺の頸が広口ではなく長頸であるものは，Ⅲ期の中でも新しいとされており，7 世紀前半頃の時期を想定したい。

以上のように，本遺跡では 7 世紀初頭から 8 世紀初頭までの須恵器が，継続的に出土している。

○鉄器（第 24 図）

本遺跡の遺構に伴う鉄器としては，鉈 (85・87)・用途不明品 (86) が出土している。このうち，鉈について特徴を述べてみたい。

・鉈 (85・87)

(85) は，刃部が鏝状で，幅は身部よりわずかに大きい。刃部の断面形状は三日月形，身部の断面形状は長方形である。川越哲志氏による分類[19]の B3b 類にあたる。

(87) は，刃部幅と身部幅がほぼ同じで，刃部の断面形状は三日月形，身部の断面形状は長方形である。川越氏による分類の B1 類にあたる。

○石器（第 25・26 図）

本遺跡の遺構に伴う石器としては，台石 (88)・砥石 (89・91)・磨石 (90)・磨石？ (92) が，遺構に伴わないものは，石鏃 (93・94)・石錘？ (95) が出土している。このうち特徴的なものについて述べてみたい。

・台石 (88)

SH1 床面での出土状態における上面に段差がある。9×36cm 程度の長方形の高い段が，低い段

を長方形の長辺に接する広い面と短辺に接する狭い面に分断している。このうち，高い段と低い段の広い面に使用痕が残る。

・磨石？ (92)

円盤を半分に割った形状をしており，元々は円盤状の河原石だったと考えられる。打撃痕は見られないため，自然に割れたものと考えられるが，この形で使用したものか，使用時に割れたものかは，明確にし得なかった。半円の円弧の中間付近に，長さ 10cm，幅 2cm 程度の範囲で磨面が見られるため，磨石と想定される。大きさや形状から料理などでの使用は考えにくいが，出土状況などからは，用途については想定し得なかった。

〇土製品（第 26 図）

・土製丸玉 (96)

算盤玉のような形状をしており，両側から穿孔している。

第２表　上ヶ原遺跡出土土器観察表

（[　]：復元値・一部残存値）

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
1	甕形土器	SH1	口径　15.3 胴部最大径　21.6 器高　23.7	口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は平らに収める。胴部は倒卵形を呈する。	外面：口縁部ナデ，胴部上半ハケ目後部分的にナデ，胴部下半から底部ハケ目後ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部から底部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：明黄褐色，一部橙色 外面口縁部及び胴部から底部の一部と内面底部にスス付着。
2	甕形土器	SH1		頸部から口縁部にかけて「く」の字状に短く外湾し，その端部に外湾しつつ外上方に立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部は尖り気味に収める。胴部から頸部へ内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部から頸部ナデ，胴部磨耗著しく不明 内面：口縁部ナデ，胴部磨耗著しく不明	胎土：0.5 ～ 1mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：淡黄色
3	高坏	SH1	底径　13.1	脚部は断面「ハ」の字状に大きく開く。端部は尖り気味に収める。脚部中位に 4 箇所穿孔を施す。	脚部外面：ナデ 脚部端部：ヨコナデ 脚部内面：ナデ	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 黄褐色 内面 - にぶい黄橙色
4	高坏	SH1		残存する坏部の底部はわずかに内湾する。	外面：磨耗著しく不明 内面：ナデ	胎土：2 ～ 3mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面 - にぶい赤橙色 内面 - 橙色
5	甑形土器	SH1	上端部径　[9.2] 胴部最大径 [20.9] 残存高　[37.1]	胴部上部から上端部にかけては「く」の字状に内反し，内傾しつつ立ち上がる。上端部は尖り気味に収める。胴部は，上部がやや内湾するものの，ほぼ直線的に外下方にのびる。胴部から口縁部にかけての屈曲箇所に横方向のアーチ状の把手が 1 箇所つくが，本来は対になっていたと想定される。	外面：上端部ナデ，上端部下位から胴部ハケ目後部分的にナデ，把手ハケ目後ナデ 内面：上端部ナデ，胴部ヘラ削り 内面に粘土板接合痕が 7 箇所残る。内面口縁部直下と胴部中位にナデ時の指頭圧痕残る。	胎土：1 ～ 3mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 黄橙色 内面 - 橙色 外面胴部中位の一部に黒斑残る。
6	甑形土器	SH1	下端部径　[42.5] 胴部最大径 [45.2] 残存高　[56.6]	上端部から胴部上部にかけてはわずかに外湾し，胴部は内湾する。胴部から下端部にかけてはわずかに外湾し，下端部はわずかに肥厚しつつ平らに収める。胴部上位と下位に横方向のアーチ状の把手が 1 箇所ずつつくが，本来は対になっていたと想定される。	外面：上端部，胴部ハケ目後，櫛歯状工具等により線刻を施す，下部ナデ，下端部の一部に刺突状工具による刻目文を施す，把手ナデ 内面：上端部ハケ目後ナデ，胴部ハケ目，下部ハケ目後ナデ，下端部ナデ 内面に粘土板接合痕が 8 箇所残る。	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 橙色，にぶい黄橙色 内面 - にぶい黄橙色，灰黄褐色 外面上端部から胴部上位の一部に黒斑残る。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
7	甕形土器	SH1 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸く収める。胴部上位は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁端部ナデ，口縁部下位ハケ目後ナデ後部分的にヘラ磨き，胴部上位ハケ目後ヘラ磨き 内面：口縁部ヘラ磨き，胴部上位ヘラ削り後ヘラ磨き，胴部ヘラ削り	胎土：1 ～ 3mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 明赤褐色 内面 - 橙色，明赤褐色 口縁端部の一部にスス付着。
8	甕形土器	SH1 埋土		口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は尖り気味に収める。	外面：ナデ，胴部上位に櫛歯状工具による直線文と想定される施文がなされる 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
9	壺形土器	SH1 埋土		口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は尖り気味に収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色
10	甕形土器？	SH1 埋土		頸部から口縁部にかけて「く」の字状に短く外反し，その端部に直線的に短くのびた後，屈曲し，外上方に立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部はわずかに肥厚しつつ平らに収める。胴部上位から頸部にかけては直線的に立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部から頸部ナデ，胴部磨耗著しく不明	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面 - 黄橙色 内面 - 淡黄色
11	甕形土器	SH2 埋土	口径　[17.3] 胴部最大径 [19.3]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味に収める。胴部中位から頸部にかけて内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後ナデ 内面：口縁端部ナデ，口縁部ヘラ磨き，胴部ヘラ削り	胎土：1 ～ 3mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 明赤褐色，にぶい赤褐色 内面 - 赤褐色 内外面の一部にスス付着。
12	壺形土器	SH3		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸く収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部から胴部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部から底部ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
13	不明	SH3		口縁部は内傾し，端部は丸く収める。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：1 ～ 3mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - にぶい赤褐色 内面 - 明赤褐色 内面にスス付着。
14	甕形土器？	SH3 埋土		口縁部は「く」の字状に外湾する。胴部上位から頸部までは直線的に立ち上がる。	外面：口縁部から胴部上位ナデ，胴部中位ハケ目 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
15	不明	SH3 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 明赤褐色 内面 - 明赤褐色，橙色

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
16	不明	SH4 埋土		口縁部は外上方にのび，端部は丸く収める。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
17	甕形土器	SH5 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味に収める。胴部上位は内湾しつつ口縁部に至る。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：0.5 ～ 1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 明褐色 内面 - 橙色 内外面の一部に黒斑残る。
18	甕形土器	SH5 埋土	口径　[17.0]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味に収める。	外面：口縁端部ナデ，口縁部ハケ目後ナデ，胴部上位ハケ目 内面：口縁部ハケ目後ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：橙色
19	甕形土器	SH5 埋土	口径　[17.9]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部に至る直前で強くつまみ器厚が薄くなり，端部は尖り気味に収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後一部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：橙色 外面口縁部の一部にスス付着。
20	甕形土器	SH5 埋土		頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外湾し，その端部に外上方に外湾しつつ立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部は尖り気味におさめる。胴部上位から頸部にかけては内湾気味に立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：0.5 ～ 1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：明黄褐色 外面頸部にスス付着。
21	甕形土器？	SH6		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味に収める。	外面：口縁端部ナデ，口縁部ハケ目後ナデ，胴部上端ハケ目 内面：口縁端部ナデ，口縁部ハケ目後ヘラ磨き，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 外面口縁端部の一部にスス付着。
22	甕形土器	SH6 埋土	口径　[20.4]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味に収める。胴部中位から頸部にかけて内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部から胴部上位ナデ，胴部上位以下ハケ目後ナデ，頸部直下に櫛歯状工具による直線文を施す 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 明黄褐色，橙色 内面 - にぶい黄橙色，橙色 残存する外面の大半にスス付着。
23	甕形土器	SH6 埋土	口径　18.8	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に短く外反し，その端部に外湾しつつ外上方に立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部は丸く収める。胴部から頸部へかけて内湾しつつ立ち上がり，頸部へ至る直前でわずかに外反し，直線的に頸部に至る。	外面：口縁部から胴部上位ナデ，胴部中位ハケ目後部分的にナデ，頸部直下にハケ状工具による刺突文をめぐらす 内面：口縁部から頸部ナデ，胴部ヘラケズリ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面 - 浅黄橙色 内面 - 淡黄色 外面口縁部及び胴部の一部と内面胴部の一部にスス付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
24	不明	SX1a		口縁部は外上方に直線的に立ち上がり，端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 外面口縁端部にスス付着。
25	甕形土器	SX1 埋土	口径　[14.1]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味に収める。胴部上位から頸部にかけて内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後一部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：橙色
26	壺形土器	SX1 埋土	口径　[12.8]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味に収める。胴部上位は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部磨耗著しく不明 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1 ～ 3mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：橙色
27	甕形土器	SX2		口縁部は「く」の字状に外反し，端部に至る直前にわずかに外湾し，端部は尖り気味に収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒若干含む 焼成：やや軟調 色調：橙色
28	不明	SX2 埋土		口縁部は外湾しつつ外上方にのび，端部は尖り気味に収める。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：明黄褐色
29	甕形土器	SX3 斜面		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸く収める。胴部上位から頸部までは直線的に立ち上がる。	外面：口縁部上半ナデ，口縁部下半ヘラ磨き，胴部上位ナデ，胴部中位ナデ後一部ヘラ磨き 内面：口縁部ナデ，口縁部下位ナデ後一部ヘラ磨き，胴部ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - にぶい黄橙色 内面 - 黄褐色 外面口縁端部の一部にスス付着。
30	甕形土器	SX3 斜面		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味に収める。胴部上位から頸部までは内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁端部ナデ，口縁部ヘラ磨き，胴部上位ナデ，胴部中位ハケ目後ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 明黄褐色 内面 - 橙色
31	壺形土器	SX3 斜面	口径　18.6 胴部最大径　26.8 器高　23.0	口縁部は強く外湾しつつ端部に至り，端部は丸く収める。胴部は扁平な倒卵形を呈する。	外面：口縁部ナデ，胴部から底部ハケ目後一部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部から底部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 橙色，にぶい黄橙色 内面 - にぶい黄橙色 外面底部の一部にスス付着。
32	壺形土器	SX3 斜面		口縁部は外反しつつ外上方にのび，その端部に内傾しつつ立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部は尖り気味に収める。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：橙色
33	高坏	SX3 斜面	口径　11.5	体部から口縁部へかけて内湾しつつ外上方にのび，端部は尖り気味に収める。底部はわずかに内湾する。	外面：口縁部ナデ，体部から底部ハケ目後ナデ，底部から脚部上位ナデ 内面：底部ナデ，体部から口縁部ハケ目後ナデ	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
34	碗形土器	SX3 斜面	口径　[21.6]	底部から体部にかけて内湾しつつ立ち上がり，体部から口縁部に向けて直線的に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収める。	外面：口縁部ナデ，体部から底部ハケ目 内面：口縁部ナデ，体部ヘラ磨き，底部磨耗著しく不明	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 橙色 内面 - 明赤褐色
35	甑形土器	SX4	下端部径　[31.0] 残存高　[40.0]	胴部上位から下端部にかけて外湾しつつ，ラッパ状に開く。横方向のアーチ状と想定される把手の接合痕が胴部上位に２つ一組で２箇所，対になって残る。下端部直上にもほぼ対になる位置に接合痕が２つ残っており，上位のものと同様，横方向のアーチ状の把手がついていたと想定される。	外面：胴部ハケ目後部分的にナデ，下端部ナデ，把手接合時ナデ 内面：胴部上位ナデ，胴部中位から下位ヘラ削り，下端部ナデ 内面胴部上位の把手接合位置に把手端部を差し込み接合した痕跡が２つ一組で２箇所残る。	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 橙色，にぶい橙色 内面 - 橙色
36	甕形土器	SX4 埋土	口径　[12.0] 胴部最大径 [19.9] 器高　19.3	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し，その端部に内上方に内傾しつつ立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部は尖り気味に収める。胴部は倒卵形を呈する。	外面：口縁部ナデ，口縁拡張部にハケ状工具により，最多で７条の凹線を施す，胴部から底部ハケ目後ナデ及びヘラ磨き 内面：口縁部ナデ，頸部から胴部上半ヘラ削り，底部ヘラ削り後ナデ，胴部中位磨耗著しく不明 頸部直下及び底部にナデ時の指頭圧痕残る	胎土：精緻 焼成：やや軟調 色調：にぶい黄橙色，明赤褐色
37	壺形土器	SX5	口径　[23.0]	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し，その端部に外湾気味に直立する拡張部がつく複合口縁。端部は丸くおさめる。	外面：口縁部強いナデ，頸部ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部ハケ目後ナデ 頸部内外面の一部に粘土接合痕残る。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色，にぶい橙色
38	鉢形土器？	SX5		口縁部は「く」の字状に外反し，胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部上位ヘラ磨き，胴部下位ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り後ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
39	不明	SX5 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸く収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部上位ハケ目後ナデ，胴部中位ナデ及びヘラ磨き 内面：口縁端部ナデ，口縁部ヘラ磨き，頸部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 外面一部にスス付着。
40	甕形土器	中央平坦面土器だまり		口縁部は「く」の字状に外反し，端部に至るまでに急速に厚みを減じ，端部は丸く収める。胴部上位から頸部までは内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ナデ後一部ヘラ磨き 内面：口縁端部ナデ，口縁部ナデ後一部ヘラ磨き，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - にぶい黄橙色 内面 - 明黄褐色

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
41	甕形土器	中央平坦面土器だまり		口縁部は「く」の字状に外湾し，端部に至る直前で強くつまみ，端部は尖り気味に収める。胴部中位から頸部にかけて内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部上位磨耗著しく不明，胴部中位ハケ目 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面 - 橙色 内面 - 橙色，明赤褐色
42	壺形土器	中央平坦面土器だまり	口径　[18.2]	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外湾し，その端部に内傾しつつ立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部は外方に肥厚しつつ平らにおさめる。胴部上位から頸部にかけては内湾気味に立ち上がる。	外面：口縁部から頸部ナデ，胴部上位ハケ目後ナデ 内面：口縁部ナデ，以下磨耗著しく不明	胎土：0.5 ～ 1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：浅黄色
43	不明	中央平坦面土器だまり		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸く収める。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
44	不明	中央平坦面土器だまり	口径　[13.6]	口縁部は外湾しつつ端部に至り，端部は尖り気味に収める。	外面：口縁端部ナデ，口縁部ハケ目後ナデ 内面：口縁端部ナデ，口縁部一部ハケ目後ヘラ磨き	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：にぶい黄橙色，明黄褐色
45	甕形土器	東側平坦面		外上方へのびる口縁部の端部に外湾しつつ外上方に立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部は尖り気味に収める。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
46	壺形土器	東側平坦面	口径　15.2 胴部最大径　26.1 器高　32.4	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸く収める。胴部は倒卵形を呈する。	外面：口縁部ナデ，胴部から底部ハケ目後ていねいなナデ 内面：口縁部ナデ，胴部から底部ヘラ削り	胎土：0.5 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
47	高坏	東側平坦面	口径　[18.5]	底部から体部へかけて直線的に外上方にのび，体部中位で内側に強く屈曲し，さらに口縁部へむけて外湾しつつ外上方へのびる。端部は尖り気味に収める。底部には外湾気味に脚部の上部がつく。	外面：口縁端部ナデ，口縁部から体部中位ハケ目後ナデ，体部中位から脚部上位ていねいなナデ，一部ヘラ磨き 坏部内面：底部から体部ハケ目後ていねいなナデ，口縁部ナデ	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
48	甕形土器	SK1 埋土	口径　[16.2]	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に短く外反し，その端部に外湾しつつ外上方に立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部は丸く収める。	外面：口縁部から頸部ナデ，肩部にナデ後ハケ状工具による波状文を施す 内面：口縁部から頸部ナデ，胴部ヘラケズリ	胎土：0.5 ～ 1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：淡黄色
49	甕形土器	SK1 埋土	口径　11.7 胴部最大径　14.2 器高　15.8	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に短く外反し，その端部に外上方に外湾しつつ立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部は丸くおさめる。胴部は倒卵形を呈する。	外面：口縁部から肩部ナデ，胴部ハケ目後ナデ，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部から底部ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 外面胴部下半にスス付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
50	壺形土器	SK1 埋土	口径　11.3	口頸部は外上方に直線的に立ち上がり，端部は尖り気味に収める。	外面：口縁端部ナデ，口頸部ナデ一部ヘラ磨き 内面：口縁端部ナデ一部ヘラ磨き，口頸部ナデ	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 橙色 内面 - にぶい黄褐色，橙色
51	甕形土器	SK2		頸部から口縁部にかけて「く」の字状に短く外反し，その端部に外傾しつつ立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部は平坦気味に丸く収める。胴部上半は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目，口縁部中位に櫛歯状工具による波状文をめぐらせた後ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り 外面胴部上位にハケ目を横方向に施しており，直線文を意識したものである可能性がある。	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：淡黄橙色 外面一部にスス付着。
52	壺形土器	SK2	口径　[13.9] 胴部最大径　[22.1]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味に収める。胴部は倒卵形を呈する。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後一部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：2 ～ 3mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：橙色 外面口縁部の一部と胴部下半の大半にスス付着。
53	碗形土器	SK2	口径　[11.9] 器高　5.6	底部から口縁部にかけて内湾しつつ立ち上がる。口縁端部にいたる直前でわずかに屈曲させて内傾気味に端部に至る。口縁端部は丸く収める。底部は平坦気味ではあるが丸底。	外面：口縁部ナデ，体部から底部ハケ目後ナデ 内面：ナデ 内面口縁部にナデ時の指頭圧痕残る。	胎土：2 ～ 3mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 橙色 内面 - 明赤褐色 外面体部下半の一部に黒斑残る。
54	高坏	SK2	底径　[17.4]	残存する底部はわずかに内湾する。脚部は断面「ハ」の字状に大きく開く。端部は丸く収める。	内外面：磨耗著しく不明 脚部端部：ナデ 脚部内面：中位はヘラ磨き，上位はハケ目，天井部はナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：浅黄橙色
55	甕形土器	SK2 埋土		口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は丸く収める。胴部上位は内湾気味に立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部磨耗著しく不明 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：橙色
56	甕形土器	SK2 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味に収める。胴部上位は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：0.5 ～ 1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 橙色 内面 - にぶい黄橙色 外面胴部の一部にスス付着。口縁端部内外面の一部に黒斑残る。
57	壺形土器	SK2 埋土		外上方に外湾しつつ立ち上がる口縁部の端部に内傾する拡張部がつく複合口縁。端部は丸くおさめる。	外面：口縁部上位ナデ，口縁部下位ハケ目後ナデ，口縁立ち上がりの屈曲点と端部にヘラ状工具による刺突文を 5 ～ 6mm 間隔でめぐらす 内面：ナデ	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
58	甕形土器	調査区内	口径　16.5 胴部最大径　16.1 底径　4.0 器高　18.1	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味に収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部から胴部にかけては直線気味に立ち上がる。底部はわずかに平底。	外面：口縁部ナデ，胴部から底部へラ磨き 内面：口縁端部ナデ，口縁部ハケ目後ナデ，胴部から底部へラ削り	胎土：1 ～ 3mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 外面胴部下半の一部にスス付着。
59	甕形土器	調査区内	胴部最大径　21.6 底径　2.8	口縁部は「く」の字状に外反する。胴部は倒卵形を呈する。底部はわずかに平底。	外面：口縁部ナデ，胴部から底部ハケ目 内面：口縁部ナデ，頸部ナデ，胴部から底部へラ削り 内面頸部にナデ時の指頭圧痕残る。	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 外面胴部の一部にスス付着。
60	甕形土器	調査区内	口径　[18.2]	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に短く外湾し，その端部に外湾しつつ外上方に立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部はやや尖り気味に収める。	外面：口縁部から頸部ナデ，胴部上位ハケ目 内面：口縁部ナデ，胴部へラ削り	胎土：0.5 ～ 1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：淡黄色，黄橙色
61	甕形土器	調査区内	口径　[12.7]	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に短く外湾し，その端部に内傾しつつ短く立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部は尖り気味に収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部へラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：淡黄色，浅黄色
62	甕形土器	調査区内		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸く収める。	外面：口縁端部ナデ，口縁部ハケ目後ナデ，胴部上位ナデ 内面：口縁端部ナデ，口縁部へラ磨き，胴部へラ削り	胎土：2 ～ 3mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：外面 - 橙色，明赤褐色 内面 - 橙色 外面口縁部の一部にスス付着。
63	甕形土器	調査区内	口径　[16.9]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部に至る直前で器厚を薄くした後，端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。胴部上位から頸部にかけて内湾気味に立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目 内面：口縁部ナデ，胴部へラ削り 内面頸部にナデ時の指頭圧痕残る。	胎土：0.5 ～ 1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：橙色 外面口縁部の一部にスス付着。
64	壺形土器	調査区内		頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外湾し，その端部に直立する拡張部がつく複合口縁。端部は丸くおさめる。胴部上位から頸部にかけては内湾気味に立ち上がる。	外面：口縁部から頸部中位ナデ，頸部下位から胴部上位ハケ目後ナデ，胴部中位ハケ目 内面：口縁部ナデ，頸部ハケ目後ナデ，胴部へラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：浅黄色
65	壺形土器	調査区内	口径　[15.0]	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し，その端部にわずかに内傾する拡張部がつく複合口縁。端部は丸みを帯びるものの平らにおさめる。胴部上位から頸部にかけては内湾気味に立ち上がる。	外面：口縁拡張部ナデ，口縁部から胴部上位ハケ目後ナデ，口縁拡張部に 2 段，頸部直下に 1 段ハケ状工具による波状文をめぐらす 内面：口縁部ナデ，頸部以下磨耗著しく不明	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 外面口縁拡張部の一部に黒斑残る。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
66	鉢形土器	調査区内	口径　[14.3] 胴部最大径 [12.4] 底径　[1.7] 器高　11.6	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味に収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部から胴部にかけては内湾気味に立ち上がる。底部はわずかに窪み底。	外面：口縁端部ナデ，口縁部から胴部上位ハケ目後ナデ，胴部上位から下位ハケ目後ナデ一部ヘラ磨き，底部ナデ 内面：口縁端部ナデ，口縁部ハケ目後ナデ，胴部から底部ヘラ削り	胎土：0.5 ～ 1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 橙色 内面 - にぶい黄褐色 外面の一部と内面胴部下位の一部にスス付着。
67	高坏	調査区内	口径　12.4	体部から口縁部へかけて内湾気味に外上方にのび，体部中位には一段稜がめぐる。口縁端部に至るまでに内湾し，端部は上方に向き，尖り気味に収める。	口縁端部：ナデ 外面：ていねいなヘラ磨き 内面：ヘラ磨き	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - にぶい橙色，橙色 内面 - 橙色
68	高坏	調査区内	底径　14.8	残存する坏底部はわずかに内湾する。脚部は断面「ハ」の字状で，中位で外反し外側に大きく開く。端部は尖り気味に収める。脚部中位に 1 箇所穿孔を施しており，本来は数箇所に穿孔があったと想定される。	坏部内面：底部ナデ 脚部外面：ナデ 脚部内面：下半はハケ目後ナデ，上半はナデ	胎土：0.5 ～ 1mm 大の砂粒わずかに含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色
69	高坏	調査区内	底径　[13.5]	脚部は断面「ハ」の字状で，中位で外反し外側に大きく開く。端部は丸く収める。脚部下半中位に 1 箇所穿孔を施しており，本来は数箇所に穿孔があったと想定される。	脚部外面：ナデ一部ヘラ磨き 脚部端部：ナデ 脚部内面：下位ハケ目後ナデ，上位ナデ	胎土：0.5 ～ 1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
70	碗形土器	調査区内	口径　[14.4] 器高　6.8	底部から口縁部にかけて内湾しつつ立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収める。底部は丸底。	外面：口縁部から体部ナデ，底部ハケ目後ナデ 内面：口縁部から体部ていねいなナデ，底部ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 外面体部に部分的にスス付着。
71	碗形土器	調査区内	口径　[12.8] 底径　[2.8] 器高　6.9	底部から口縁部にかけて内湾しつつ立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収める。底部はわずかに平底。	外面：口縁部から体部ハケ目後ていねいなナデ，底部ナデ 内面：口縁部ハケ目後ナデ，体部上位ナデ一部ヘラ磨き，体部下位から底部ナデ	胎土：1mm 大の砂粒わずかに含む 焼成：良好 色調：外面 - 橙色，にぶい黄橙色 内面 - 橙色 外面体部下半から底部にうすく黒斑残る。
72	鼓形器台	調査区内	口径　[20.8]	口縁部は外上方に外湾しつつ開き，端部は尖り気味に収める。頸部は上下に稜を持ち，「く」の字状に外反する。脚部は外下方へのびる。	外面：口縁部上位ナデ，口縁部下位ヘラ磨き及びナデ，頸部から脚部上位ナデ，脚部中位ヘラ磨き 内面：口縁部上位ナデ，口縁部ヘラ削り後ヘラ磨き及びていねいなナデ，頸部ナデ，脚部ヘラ削り後ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色

第３表　上ヶ原遺跡出土須恵器観察表

（[　]：復元値）

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
73	坏蓋	調査区内	口径　10.0 かえり径　7.7 器高　1.5 つまみ高　1.1	天井部中央に宝珠形のつまみがつく。天井部は平坦で，体部は直線的に口縁端部に至る。端部は丸く収める。かえりは内傾しつつ，口縁端部より下方に垂下する。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後ナデ，つまみナデ，つまみ接合時工具によるナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面 - 青灰色，一部灰オリーブ色 内面 - 灰色 ロクロ右回転。外面の大半に 0.5 ～ 2mm 大の砂粒が熔着し，一部自然釉がかかる。
74	坏蓋	調査区内	口径　[10.0] かえり径　[7.6] 器高　1.7 つまみ高　1.1	天井部中央に宝珠形のつまみがつく。天井部は平坦で，体部は内湾気味に口縁端部に至る。端部は丸く収める。かえりは内傾しつつ即座に屈曲し，口縁端部より下方に垂下する。端部は尖り気味に収める。	天井部：つまみナデ，つまみ接合時工具によるナデ，それ以外の箇所は砂粒が全面に熔着しており不明 内面：ロクロ回転によるナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面 - 灰色，一部灰オリーブ色 内面 - 灰色 ロクロ左回転。外面の大半に 0.5 ～ 2mm 大の砂粒が熔着し，一部自然釉がかかる。
75	坏蓋	調査区内	口径　[9.5] かえり径　[6.8] 器高　1.7 つまみ高　1.1	天井部中央に宝珠形のつまみがつく。天井部は平坦で，体部は内湾気味に口縁端部に至る。端部は尖り気味に収める。かえりは内傾しつつ即座に屈曲し，口縁端部より下方に垂下する。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後ナデ，つまみナデ，つまみ接合時工具によるナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面 - 灰白色 内面 - 灰色 ロクロ右回転。
76	坏蓋	調査区内	つまみ高　0.6	天井部中央に扁平でやや中央を高くしたボタン状のつまみがつく。天井部は平坦である。	天井部：残存部少ないため不明，つまみロクロ回転によるナデ 内面天井部：ロクロ回転によるナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色
77	坏身	調査区内	口径　12.3 受部径　12.9 器高　2.7	口縁部の立ち上がりと受部の境界が明瞭ではない。立ち上がりは上方に短くのび，端部は尖り気味に収める。受部は体部から横方向にわずかにつまみ出し，端部は尖り気味である。体部は内湾気味で，底部は平坦である。	内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：灰白色
78	坏身	調査区内	口径　8.8 器高　3.1	底部から体部に向けて直線的に外上方に立ち上がり，体部中位で「く」の字状に内反して，口縁部は外上方へ直線的にのびる。端部は尖り気味に収める。底部は平坦である。	内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り後一部ナデ	胎土：1mm 大の砂粒わずかに含む 焼成：良好 色調：外面 - 青灰色，灰色 内面 - 灰色

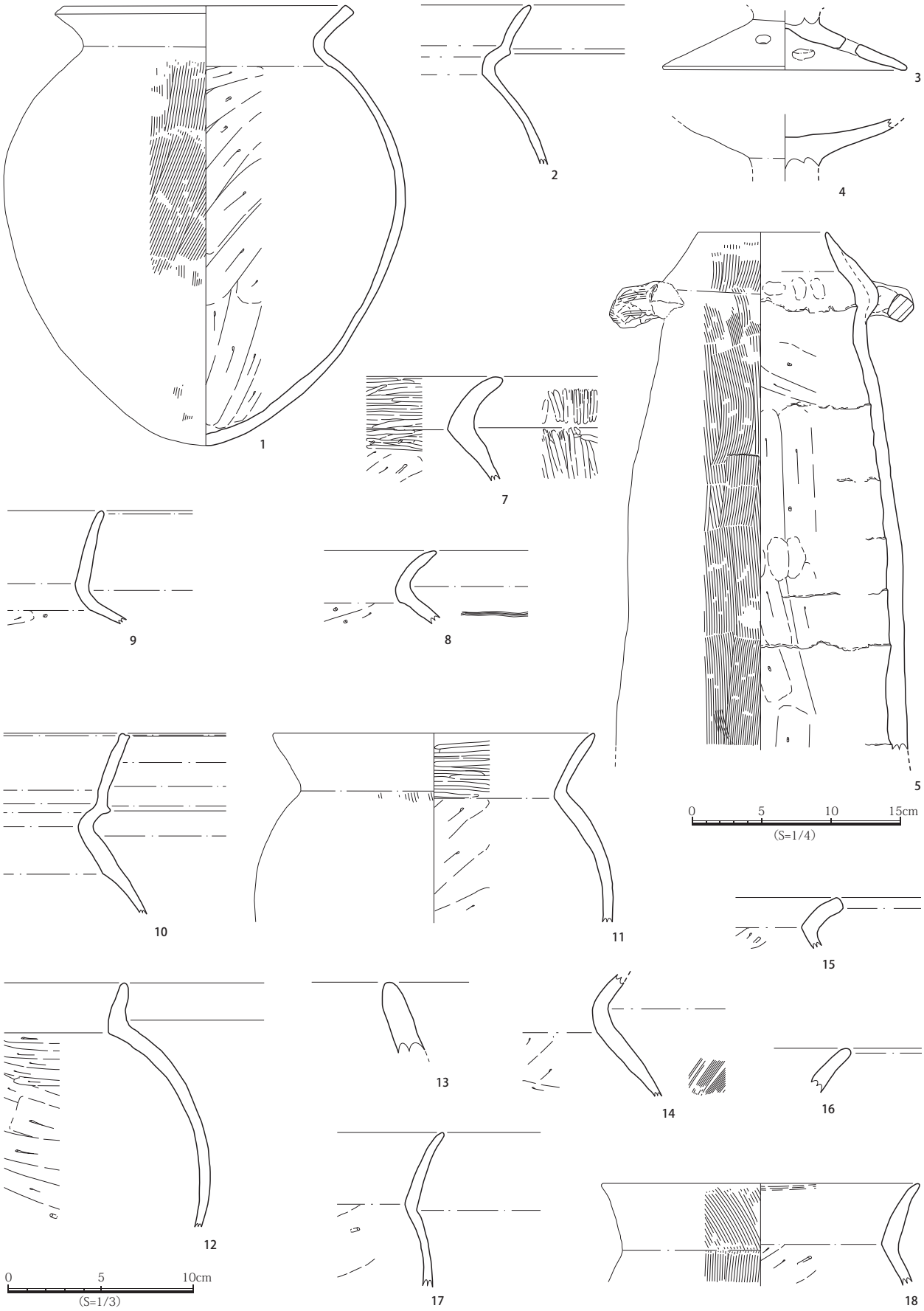
番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
79	坏身	調査区内	底径　[9.4]	底部から体部に向けて直線的に外上方に立ち上がり，体部下位でわずかに内反して，外上方へ直線的にのびる。底部は平坦で底部の端部にやや内傾して立ち上がる短い高台を貼り付ける。高台接地面は平坦である。	内外面・高台：ロクロ回転によるナデ 底部：残存部少ないため，明確ではないがロクロ回転によるヘラ削りの可能性がある	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面 - 青灰色，灰色 内面 - 灰色
80	皿	調査区内	口径　[23.4] 器高　2.8	口縁部はゆるやかなカーブを描きながら，外上方にのびる。端部はわずかに外に肥厚しつつ，平らに収める。底部は平坦である。	内面底部：ナデ 内外面体部：ロクロ回転によるナデ 底部端：ヘラケズリ 底部中央：ナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰色 ロクロ右回転。
81	高坏	調査区内	底径　[8.5]	坏部の底部から体部へかけて内湾気味に外上方へのびる。底部は平坦で，直線的に脚部に至る。脚部は断面「ハ」の字状を呈し，端部に至る直前で強く外湾しつつ横方向へのび，さらに下方に屈曲させて外湾気味に横方向につまみ出している。端部は尖り気味に収める。	坏部内面：底部ヨコナデ，体部以上ロクロ回転によるナデ 坏部外面：体部ロクロ回転によるナデ 底部：脚部接合後ロクロ回転によるナデ 脚部外面・脚部内面下部：ロクロ回転によるナデ，脚部外面中位直下に２条の凹線をめぐらす 脚部内面上位：ナデ	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：青灰色
82	広口壺	配石遺構	口径　[13.6] 胴部最大径　17.8 底径　9.4 器高　17.1	口頸部は基部では直立し，中位で大きく外湾して外上方にのびる。端部はわずかに上方に肥厚しつつ平らに収める。頸部から肩部までは緩やかに下り，肩部には突帯をめぐらす。体部は扁平な算盤球形を呈する。高台は断面「ハ」の字状を呈し，端部は平らに収める。	口頸部：ロクロ回転によるナデ，口頸部接合後ナデ，外面中位に凹線を約 1.5 回転めぐらす 外面：体部はロクロ回転によるナデ，肩部に突帯貼付後，ロクロ回転によるナデ，底部外側は高台貼付後ロクロ回転によるナデ，底部中央ヨコナデ 内面：体部はロクロ回転によるナデ，底部はヨコナデ	胎土：0.5 ～ 1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：灰色
83	環状瓶	調査区内	外径　[18.6] 内径　[5.0] 筒状部断面短径幅　[5.7]	所々に稜があるものの断面が卵型となる筒が環状になる。	外面：ロクロ回転によるナデ，内周部から外周部にかけての面に刺突状工具による列点文を５段めぐらす 内面：外周部ロクロ回転によるナデ，内周部剥離著しく不明 内面に粘土接合痕が残る。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰黄色

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
84	子持台付壺？	調査区内	胴部最大径 [16.4] 鍔状突帯部最大径 [21.6]	頸部から体部にかけて内湾しつつ下り，体部は扁平な球形を呈する。体部中位に鍔状突帯がめぐり，突帯下部から体部にかけて支脚が貼り付く。鍔状突帯の上には断面「ハ」の字状を呈する子の脚部が乗る。子の器形は高坏と想定される。剥離面の間隔から本来は計８か所の支脚の上に子が位置していたものと想定される。	外面：ロクロ回転によるナデ，体部上半に３条の凹線をめぐらす。上の凹線間には櫛歯状工具による刺突文を一段，下の凹線間には羽状に二段めぐらす。支脚部はナデ 内面：ロクロ回転によるナデ 子の外面・坏部内面・脚部内面下位：ロクロ回転によるナデ 子の脚部内面上位：ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：灰色

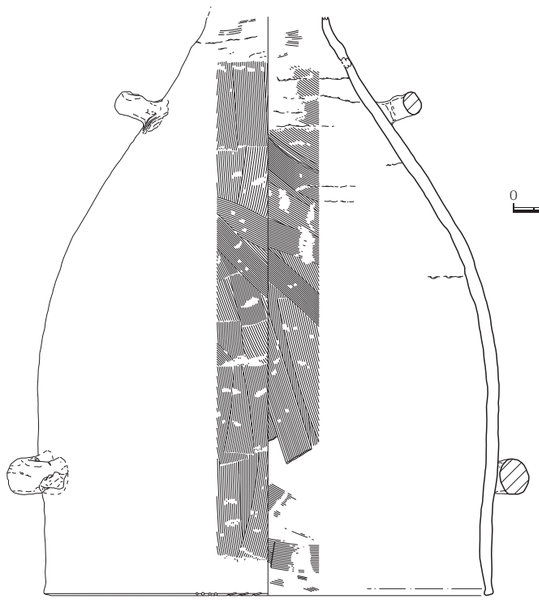
第４表　上ヶ原遺跡出土金属器・石器・土製品観察表

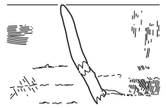
（[　]：残存値）

番号	種別	出土位置	計測数値（cm，g）				備考
			長さ	最大幅	断面厚	重量	
85	鉈	SH1	身部　[1.8] 刃部　[1.8]	身部　0.6 刃部　0.8	身部　0.3 刃部　0.2	2.8	断面形状－長方形　刃部断面形状－三日月形 身部，刃部共に欠損している。
86	用途不明鉄製品	SH5 埋土	[5.5]	0.45	0.4	3.8	断面形状－方形 両端が欠損している。
87	鉈	東側平坦面	身部　[1.9] 刃部　5.5	身部　1.1 刃部　1.5	身部　1.1 刃部　0.3	9.5	断面形状－長方形　刃部断面形状－三日月形 身部が欠損している。
88	台石	SH1	46.1	35.7	21.3	-	花崗岩
89	砥石	SH1	10.2	9	3.9	658.6	使用痕が３面に残る。花崗岩
90	磨石	SH1 埋土	13.1	5.9	4.3	566.2	磨面が上下にある。花崗岩・安山岩
91	砥石	SX4	14.4	11.4	4.4	813.1	使用痕が１面に残る。花崗岩
92	磨石？	SK2	11.6	21.3	6	2400	折損し半円状になっている。磨面が円弧面の中央にある。砂岩
93	石鏃	調査区内	2.5	1.75	0.3	0.8	頁岩
94	石鏃	調査区内	1.8	1.1	0.3	0.8	頁岩
95	石錘？	調査区内	6.9	4.8	2.5	131.4	一端のみ打ち欠いている。泥岩
96	土製丸玉	調査区内	-	2.9	2.5	17.7	穿孔されており，穴の最大径 0.4cm。



第 18 図　出土遺物実測図 (1)（S=1/3，5 のみ S=1/4）

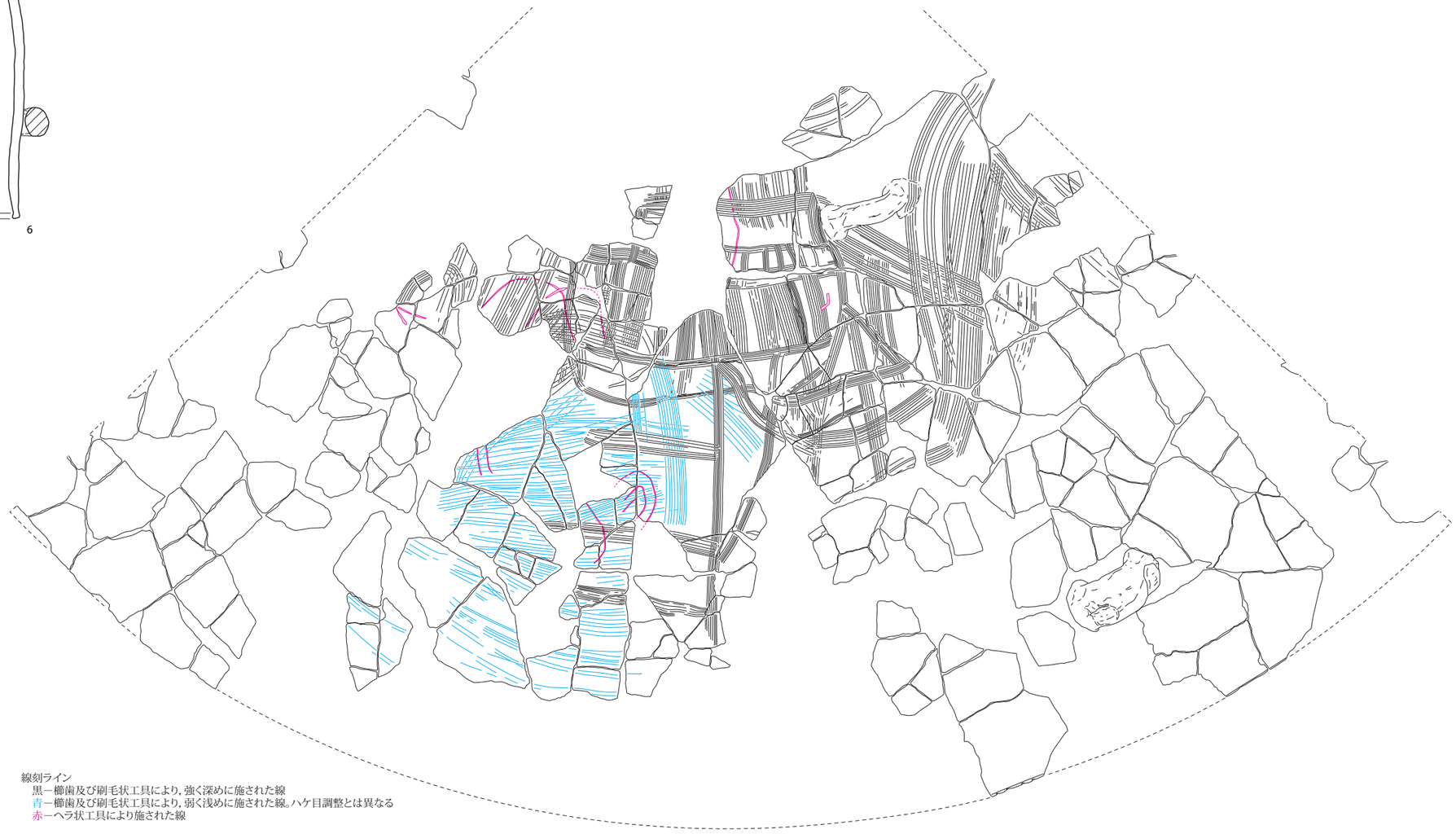




左記の破片は胎土・焼成・色調の点や線刻が施してある点から，6と同一個体と考えられるが，残存部では，接合面が無いことや出土位置が上ヶ原第34号古墳の墳丘盛土や埋土中と離れているため，別図で示している。

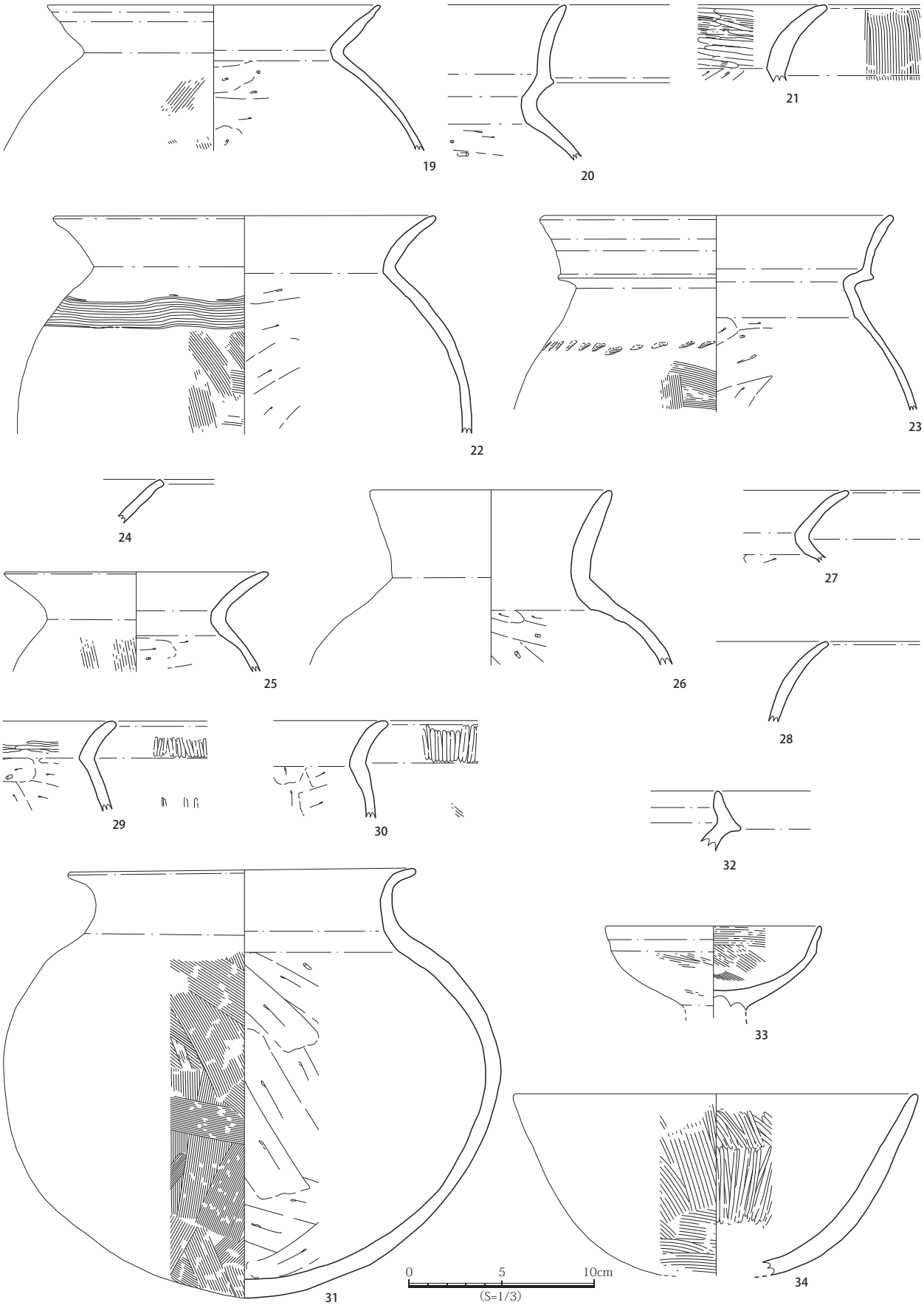
0 1 20cm
(S=1/6)

0 5 10 15cm
(S≒1/4)

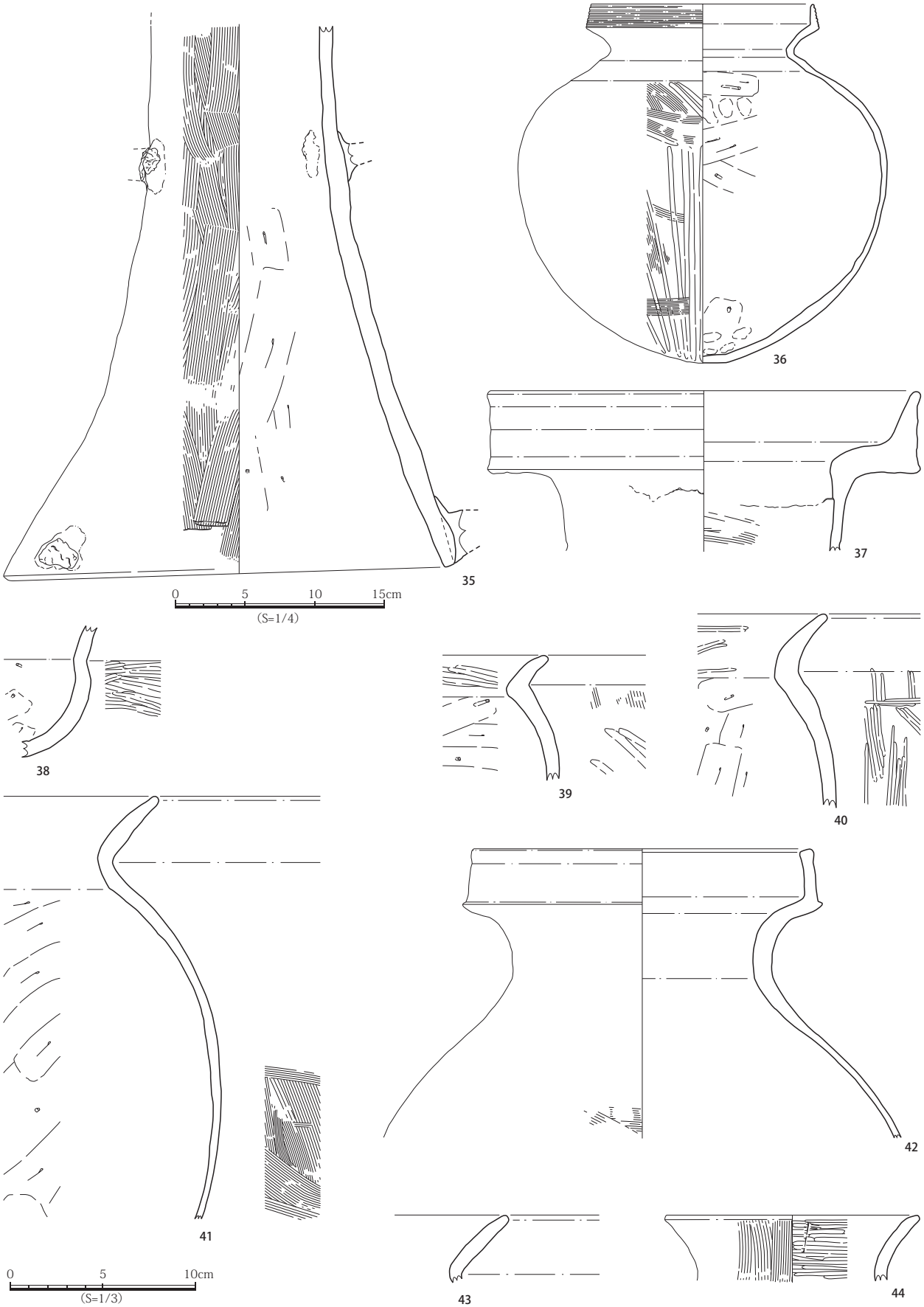


線刻ライン
黒－櫛歯及び刷毛状工具により，強く深めに施された線
青－櫛歯及び刷毛状工具により，弱く浅めに施された線。ハケ目調整とは異なる
赤－ヘラ状工具により施された線

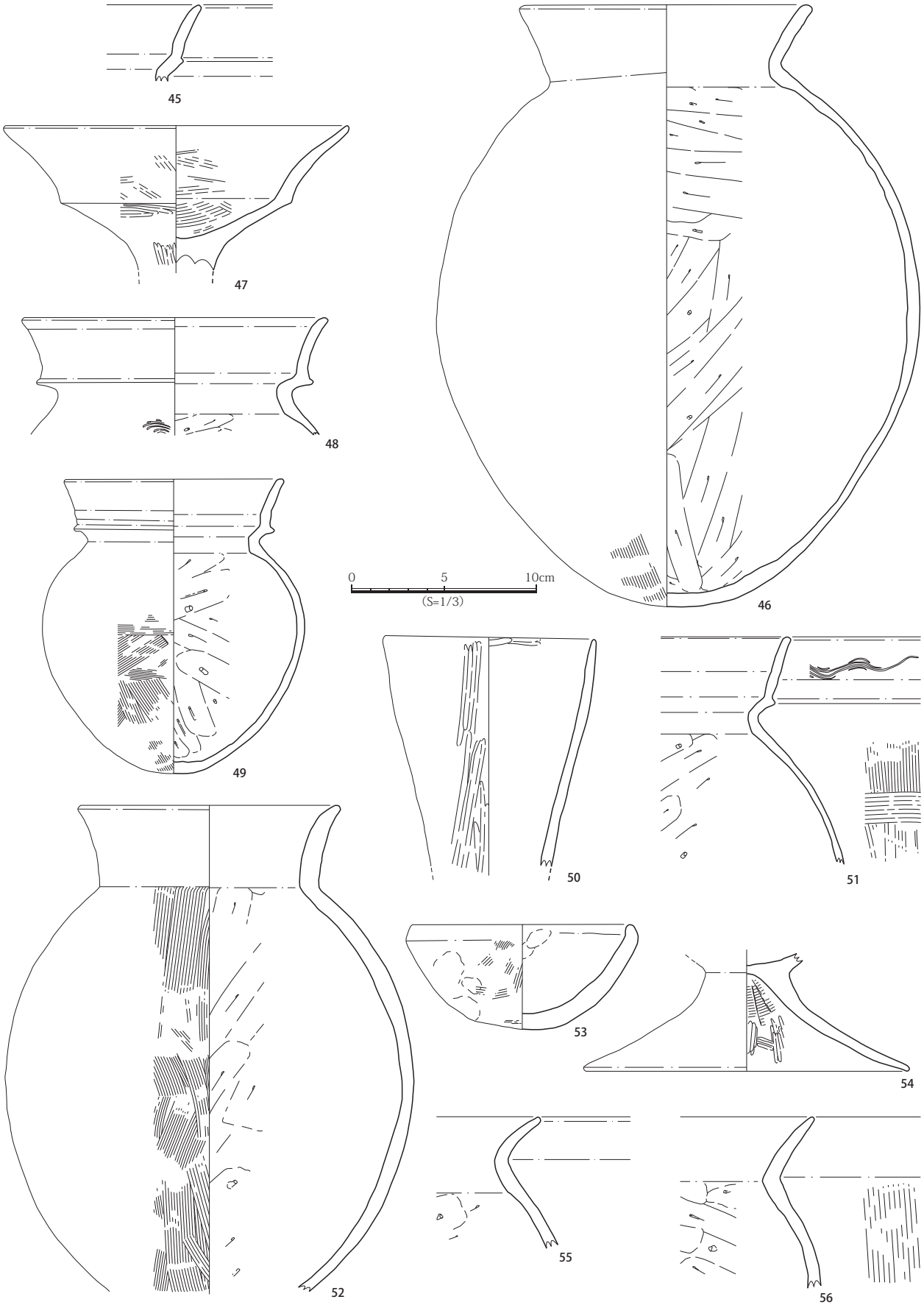
第 19 図　出土遺物実測図 (2)（立面図は S=1/6，平面図及び展開図は歪みが生じているため，おおむね 1/4 である）



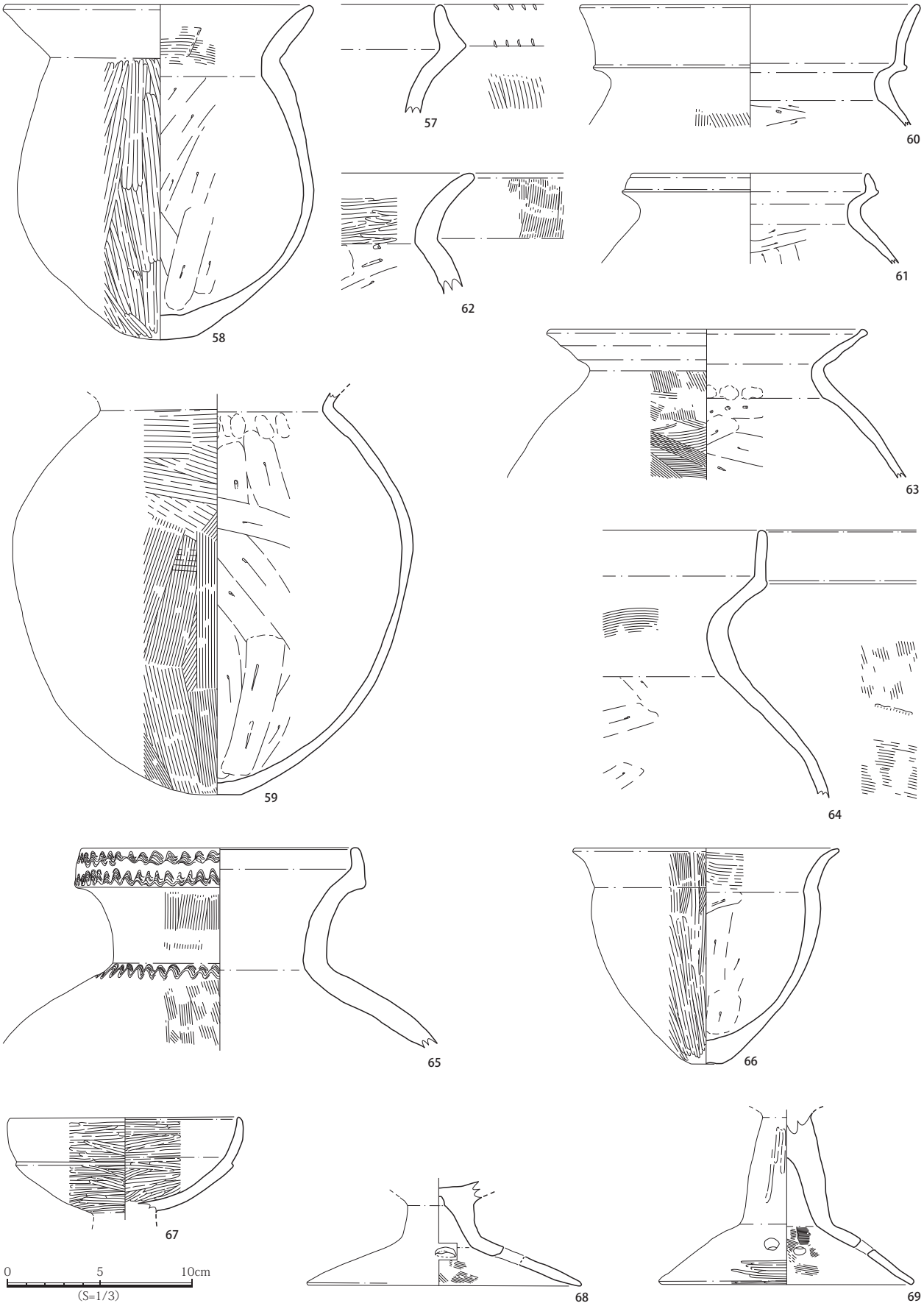
第 20 図　出土遺物実測図 (3)（S=1/3）



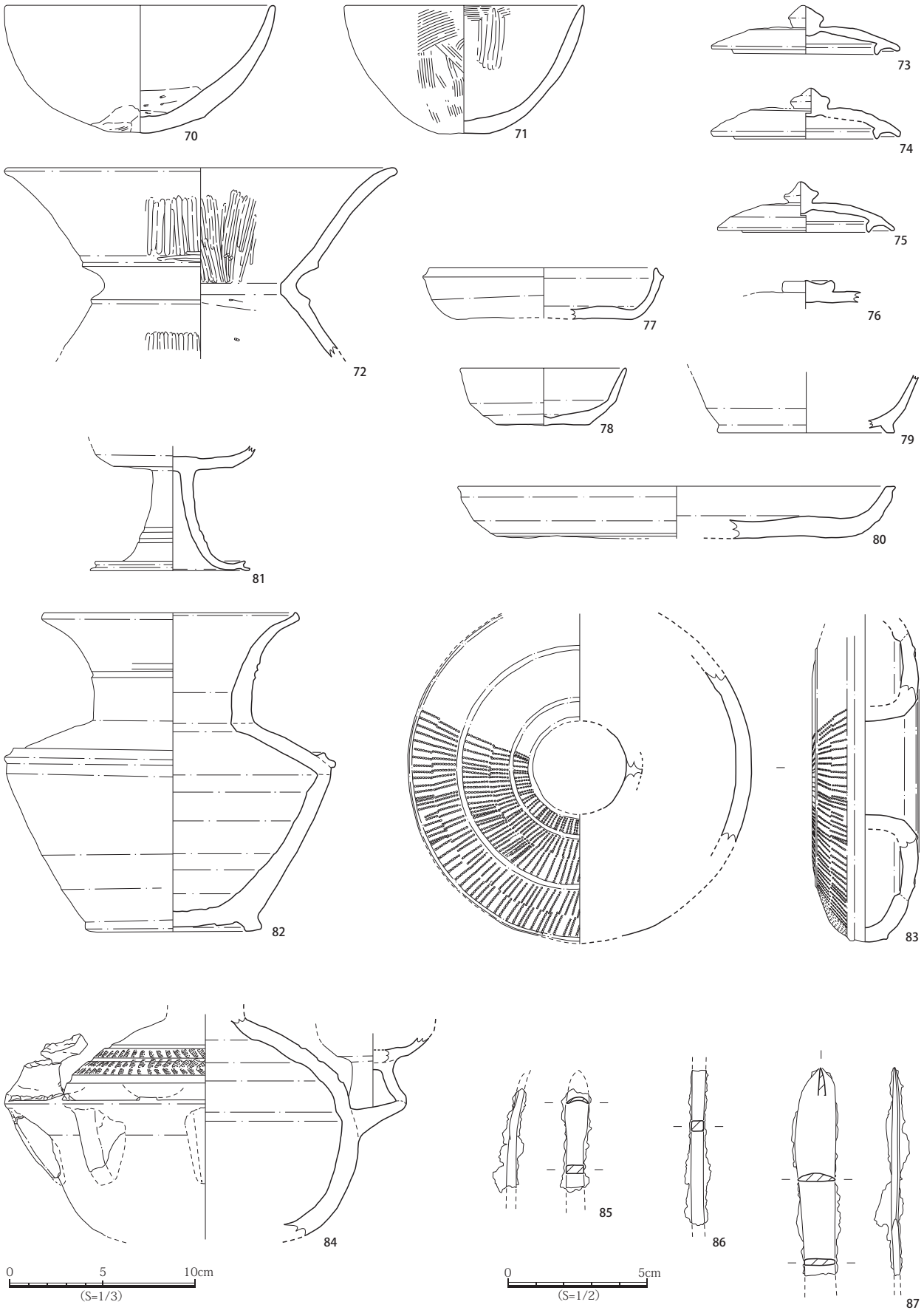
第 21 図　出土遺物実測図 (4)（S=1/3，35 のみ S=1/4）



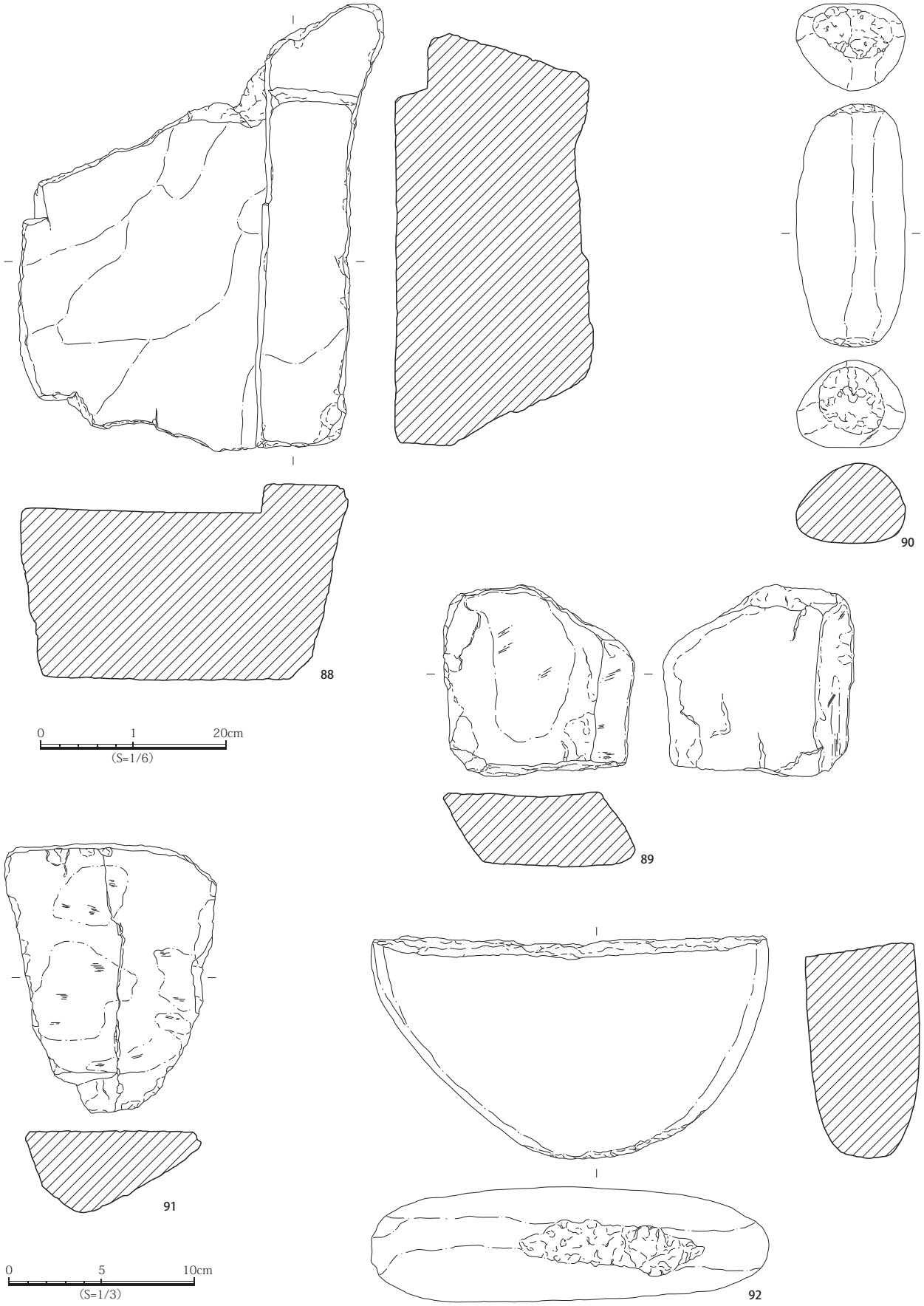
第 22 図　出土遺物実測図 (5)（S=1/3）



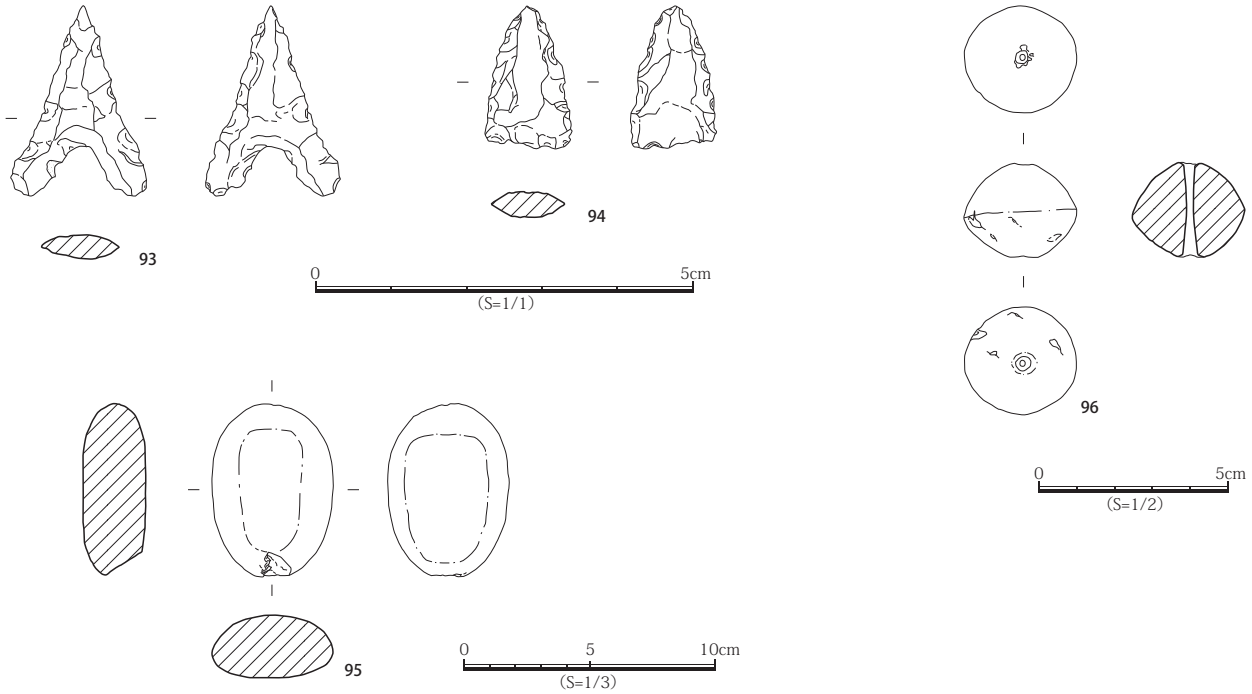
第 23 図　出土遺物実測図 (6)（S=1/3）



第 24 図　出土遺物実測図 (7)（S=1/3，85 ～ 87 のみ S=1/2）



第 25 図　出土遺物実測図 (8)（S=1/3，88 のみ S=1/6）



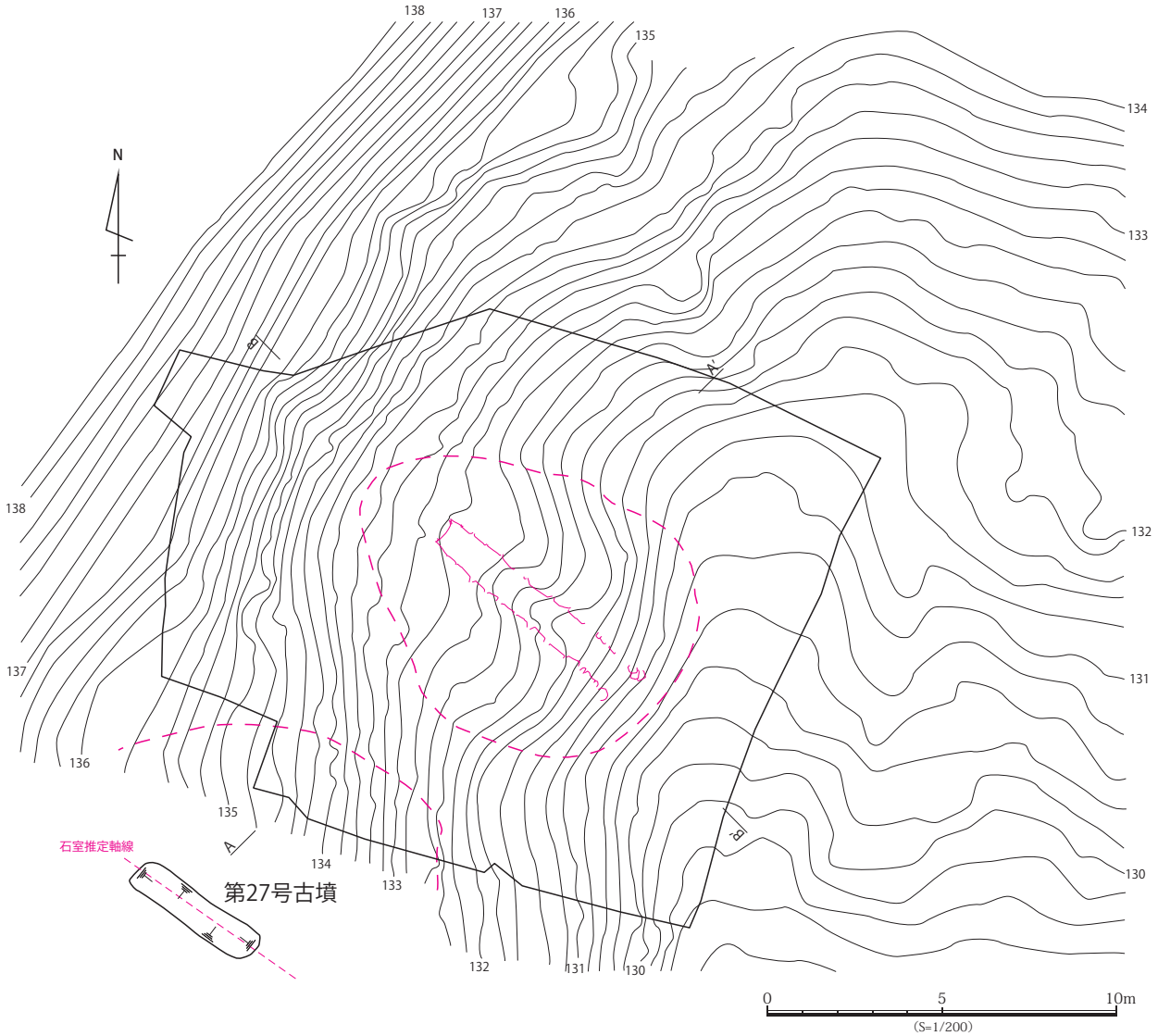
第 26 図　出土遺物実測図 (9)（93・94 - S=1/1，95 - S=1/3，96 - S=1/2）

2　上ヶ原第 34 号古墳

(1)　古墳の立地（第 3・4 図）

上ヶ原古墳群は，広島市安佐北区可部町大字中野に所在する。可部古墳群中，最大の古墳群であるが，現在その大半は消滅している。これまでに 34 基の古墳が確認され，立地や埋葬施設の形態により 5 つの支群に分けられている。横穴式石室を埋葬施設とする古墳が 24 基，箱形石棺を埋葬施設とするものが 5 基，竪穴式石室と考えられる埋葬施設を持つものが 1 基確認されている。古墳群は，福王寺山頂 (標高 496.2m) から南東へ派生する尾根筋から南にのびる尾根，すなわち帆待川の形成する谷の東側の尾根や緩斜面上に位置し，標高約 70 ～ 135 mの範囲に分布している。眼下には，可部地区の沖積平野が臨める。

上ヶ原第 34 号古墳は，D 支群と呼ばれる横穴式石室を埋葬施設とするものでは，最高所に位置する支群に属する。D 支群は，9 基の古墳で構成されており，それらは，帆待川に並行する尾根や



第 27 図　上ヶ原第 34 号古墳実測図（調査前・S=1/200）

緩斜面上に南北一列に並ぶように位置する。既に第 20 ～ 25 号古墳は消滅しているが，第 26 号古墳は，第 34 号古墳から約 20m 南西側に離れた位置に，第 27 号古墳は，第 34 号古墳の南西側，墳丘中心間では約 13m 離れた位置に現存している。

第 34 号古墳は，上ヶ原古墳群の中で，現在のところ最北端に位置する古墳であり，標高 132m 付近に位置する。また，第 34 号古墳は，北から南へ緩やかに下る尾根の中心から約 40m 東側に離れた谷筋へ向かって急傾斜で下る尾根中腹の斜面が，やや緩やかになった場所に築かれている。そのため，南西への眺望は尾根によって遮られ，南東方向を中心に眺望が開けている。東側の谷筋との比高差は，約 2m である。

(2)　調査の概要（第 27 図）

本古墳の調査は，残存する天井石と考えられた石材と天井石が抜き取られた後の窪みから想定される石室の中軸ラインを基準線とし，墳丘のほぼ中心においてこれに直交する線を設け，土層観察用の試掘溝を設定して実施した。

調査の結果，墳丘は歪な円墳であることが明らかになり，墳丘西半を中心に北側から西回りで南側に至る周溝を確認した。また，墳丘東半の盛土中には石積遺構 [20] を確認した。埋葬施設は南東方向に開口する無袖式の横穴式石室である。天井石は残存していると考えた石材も含め，全て抜き取られていた。石室内では，玄室床面の一部に敷石を確認した。遺物は，石室内，周溝，開口部前面などから，須恵器・土師器・鉄器・装飾品が出土した。

(3)　墳丘・周溝・墳丘基準面・石室掘り方（第 28 ～ 30 図）

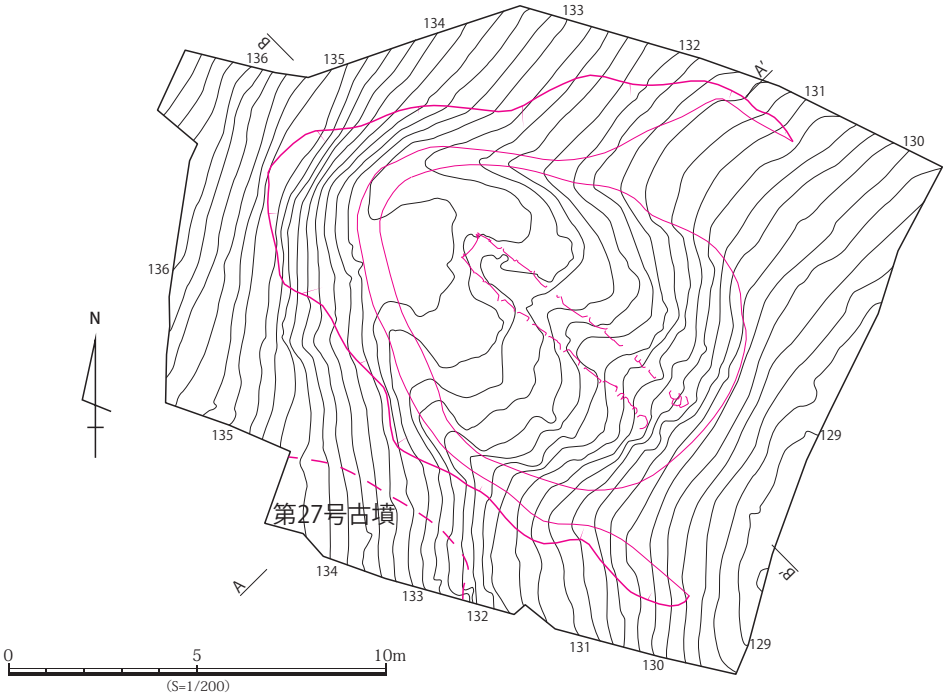
試掘溝の土層観察で墳丘と周溝と想定した層の直上には，基本的に第 29 図 A － A’ における 4・14 ～ 16 層や 29 図 B － B’ における 5・6・9 ～ 11 層など，黒色あるいは黒褐色の砂質土層が堆積していた。これは古墳築造後に繁茂した植物などが分解して含まれた層であると考えられ，基本的には，これらの層の下で古墳の遺構面を検出した。ちなみに，黒色系の砂質土層は墳丘盛土中にも存在するが，これは，上ヶ原遺跡の弥生時代終末～古墳時代前期の遺構の廃絶後に繁茂した植物などが分解して含まれた層 (29 図 A － A’ における 61・64 層や 29 図 B － B’ における 39・40 層など) から掘削・盛土をしたものと考えられる。また，29 図 B － B’ における 2 層では水流の痕跡が検出された。この層は，古墳の遺構面よりも上層であるが，調査区周辺，特に東側の谷地には巨大な石が点在していたことも含めて，墳丘の東側が水流や土石流などでかなり削平されているのではないかと想定した。しかしながら，後述する開口部前面の遺物出土状況から，削平はほとんど受けていないと想定され，東側は墳丘の傾斜よりわずかに緩やかになる傾斜面であり，それは古墳使用時からのものと判断された。

検出した墳丘規模は，北西－南東ラインが長径となり 10.3m，北東－南西ラインが短径となり 7.8m で，墳形は，西側が細くなる卵形をした円墳である。残存する墳丘の高さは，北東側墳裾から約 1m，南西側墳裾から約 0.2m である。墳丘の北東側から反時計回りで南側までは，周溝がめぐる。周溝は，北東側の端部が幅 3.5m と最も広く，そこから墳丘の北西端まで，約 11m にわたり，

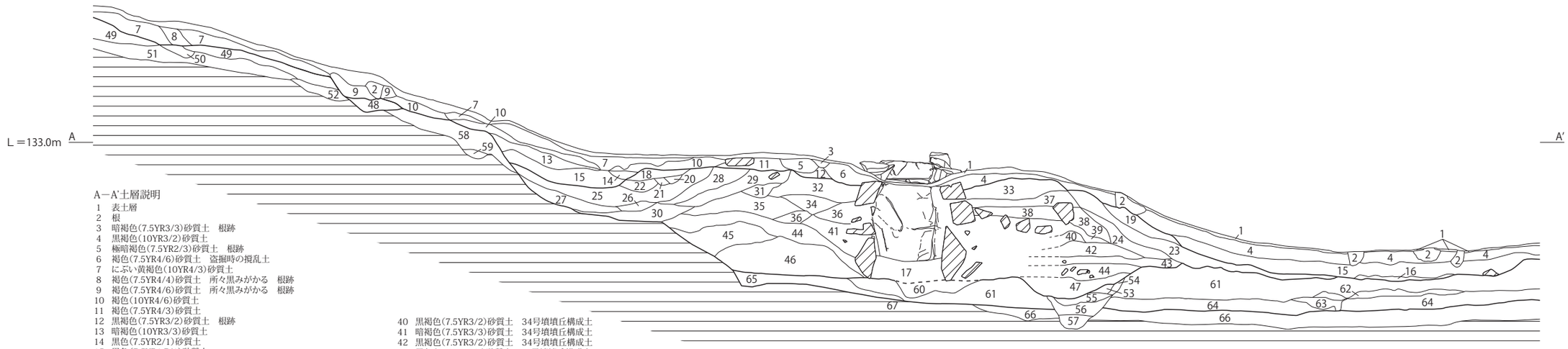
急激に幅を狭め，墳丘に沿ってめぐる。北西端では，幅 0.6m である。そこから，南東に向かい，約 10m にわたり墳丘に沿ってめぐった後，墳丘から離れ，約 3.5m 南東へ延びた後に消滅する。墳丘は，北から南へ緩やかに下る尾根筋から東側の谷へ向かって急傾斜で下る斜面が，やや緩やかになった場所に築かれている。この場所には，上ヶ原遺跡の SH5・6 が位置していたため，古墳築造前も緩やかな傾斜になっていたと考えられ，そのことも古墳の選地に影響を与えたものと想定される。しかしながら，隣接する第 27 号古墳と比較しても，急傾斜面である事には変わりなく，墳丘最高所は標高 133.15m，最低所は 130.2m で，墳丘自体がかなり傾斜している印象を受ける。

ここで墳丘の築造過程を想定してみたい。まず，古墳築造のための基準面を整地するために，標高の高い西側を中心に，半円状に掘削して，段差が生じる箇所もあるが，大きく東西約 6.5m，南北約 8m の平坦面を形成している。掘り方は，最も高い位置で，標高 135.25m 付近から掘削しており，直近の平坦面との比高差は 2.27m である。平坦面最高所は標高 133.1m である。

墳丘基準面からさらに，石室を構築するための掘り方を掘削している。掘り方は，北東側は南東－北西に約 3m のび，そこで緩やかな弧を描いて角度を変じ，南東方向へ約 8m 続いている。掘り方の深さは北西の奥壁側が最も深く 1.2m である。掘り方に伴い整地面を確認した。整地面最高所は標高 131.57m，最低所は標高 130.80m である。奥壁側が比較的狭く，幅約 1.5m であり，奥壁側から南東へ 2.9m の位置で，整地面の幅が 4.4m と極端に南西側へ広がる。これは，石室基底石のラインから，特に南側壁構築時の作業場，足場を確保するためと考えられる。整地面には，30 ～ 50cm 大の石室の基底石を据えるための穴を 5 つ確認した。最も深い奥壁のもので深さ 33cm



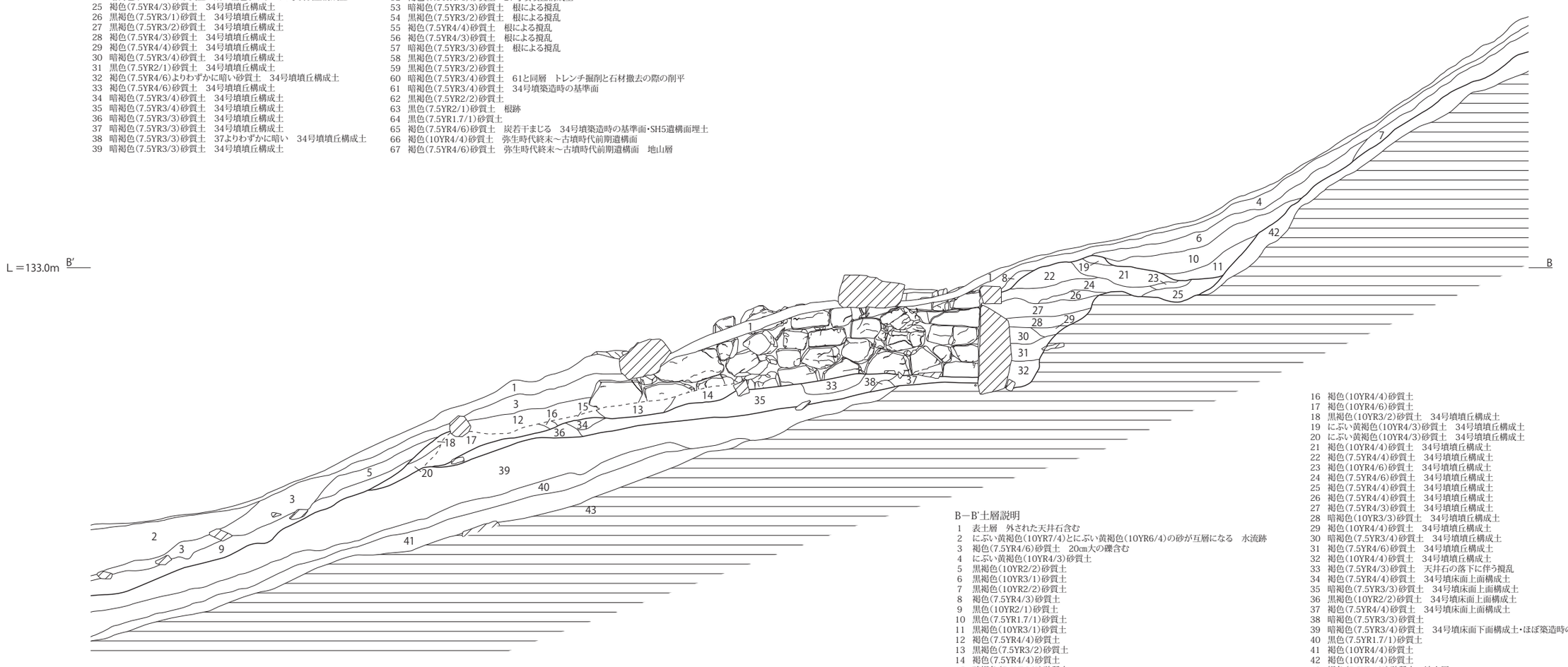
第 28 図　上ヶ原第 34 号古墳実測図（調査後・S=1/200）



A－A′土層説明

1　表土層
2　根
3　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土　根跡
4　黒褐色(10YR3/2)砂質土
5　極暗褐色(7.5YR2/3)砂質土　根跡
6　褐色(7.5YR4/6)砂質土　盗掘時の撹乱土
7　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
8　褐色(7.5YR4/4)砂質土　所々黒みがかる　根跡
9　褐色(7.5YR4/6)砂質土　所々黒みがかる　根跡
10　褐色(10YR4/6)砂質土
11　褐色(7.5YR4/3)砂質土
12　黒褐色(7.5YR3/2)砂質土　根跡
13　暗褐色(10YR3/3)砂質土
14　黒色(7.5YR2/1)砂質土
15　黒色(7.5YR1.7/1)砂質土
16　黒褐色(10YR2/2)砂質土
17　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土　34号墳床面上面構成土
18　褐色(7.5YR4/3)砂質土　34号墳墳丘構成土
19　暗褐色(10YR3/3)砂質土　34号墳墳丘構成土
20　黒褐色(7.5YR3/1)砂質土　34号墳墳丘構成土
21　黒褐色(7.5YR3/2)砂質土　34号墳墳丘構成土
22　褐色(7.5YR4/3)砂質土　34号墳墳丘構成土
23　黒褐色(10YR2/2)砂質土　34号墳墳丘構成土
24　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土　所々橙色まじる　34号墳墳丘構成土
25　褐色(7.5YR4/3)砂質土　34号墳墳丘構成土
26　黒褐色(7.5YR3/1)砂質土　34号墳墳丘構成土
27　黒褐色(7.5YR3/2)砂質土　34号墳墳丘構成土
28　褐色(7.5YR4/3)砂質土　34号墳墳丘構成土
29　褐色(7.5YR4/4)砂質土　34号墳墳丘構成土
30　暗褐色(7.5YR3/4)砂質土　34号墳墳丘構成土
31　黒色(7.5YR2/1)砂質土　34号墳墳丘構成土
32　褐色(7.5YR4/6)よりわずかに暗い砂質土　34号墳墳丘構成土
33　褐色(7.5YR4/6)砂質土　34号墳墳丘構成土
34　暗褐色(7.5YR3/4)砂質土　34号墳墳丘構成土
35　暗褐色(7.5YR3/4)砂質土　34号墳墳丘構成土
36　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土　34号墳墳丘構成土
37　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土　34号墳墳丘構成土
38　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土　37よりわずかに暗い　34号墳墳丘構成土
39　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土　34号墳墳丘構成土
40　黒褐色(7.5YR3/2)砂質土　34号墳墳丘構成土
41　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土　34号墳墳丘構成土
42　黒褐色(7.5YR3/2)砂質土　34号墳墳丘構成土
43　黒色(7.5YR1.7/1)砂質土　34号墳墳丘構成土
44　黒褐色(7.5YR2/2)砂質土　10cm大の礫を多く含む　34号墳墳丘構成土
45　暗褐色(7.5YR3/4)砂質土　34号墳墳丘構成土
46　暗褐色(7.5YR3/4)砂質土　34号墳墳丘構成土
47　黒褐色(10YR2/2)砂質土　34号墳墳丘構成土　整地時の木の除去痕跡と考えられる
48　黒褐色(7.5YR3/2)砂質土
49　褐色(7.5YR4/6)砂質土　27号墳墳丘構成土
50　黒褐色(10YR2/2)砂質土　根跡
51　褐色(7.5YR4/3)砂質土　27号墳墳丘構成土
52　褐色(7.5YR4/6)砂質土　27号墳墳丘構成土
53　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土　根による撹乱
54　黒褐色(7.5YR3/2)砂質土　根による撹乱
55　褐色(7.5YR4/4)砂質土　根による撹乱
56　褐色(7.5YR4/3)砂質土　根による撹乱
57　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土　根による撹乱
58　黒褐色(7.5YR3/2)砂質土
59　黒褐色(7.5YR3/2)砂質土
60　暗褐色(7.5YR3/4)砂質土　61と同層　トレンチ掘削と石材撤去の際の削平
61　暗褐色(7.5YR3/4)砂質土　34号墳築造時の基準面
62　黒褐色(7.5YR2/2)砂質土
63　黒色(7.5YR2/1)砂質土　根跡
64　黒色(7.5YR1.7/1)砂質土
65　褐色(7.5YR4/6)砂質土　炭若干まじる　34号墳築造時の基準面・SH5遺構面埋土
66　褐色(10YR4/4)砂質土　弥生時代終末～古墳時代前期遺構面
67　褐色(7.5YR4/6)砂質土　弥生時代終末～古墳時代前期遺構面　地山層

0　1　2　3　4m
(S=1/60)



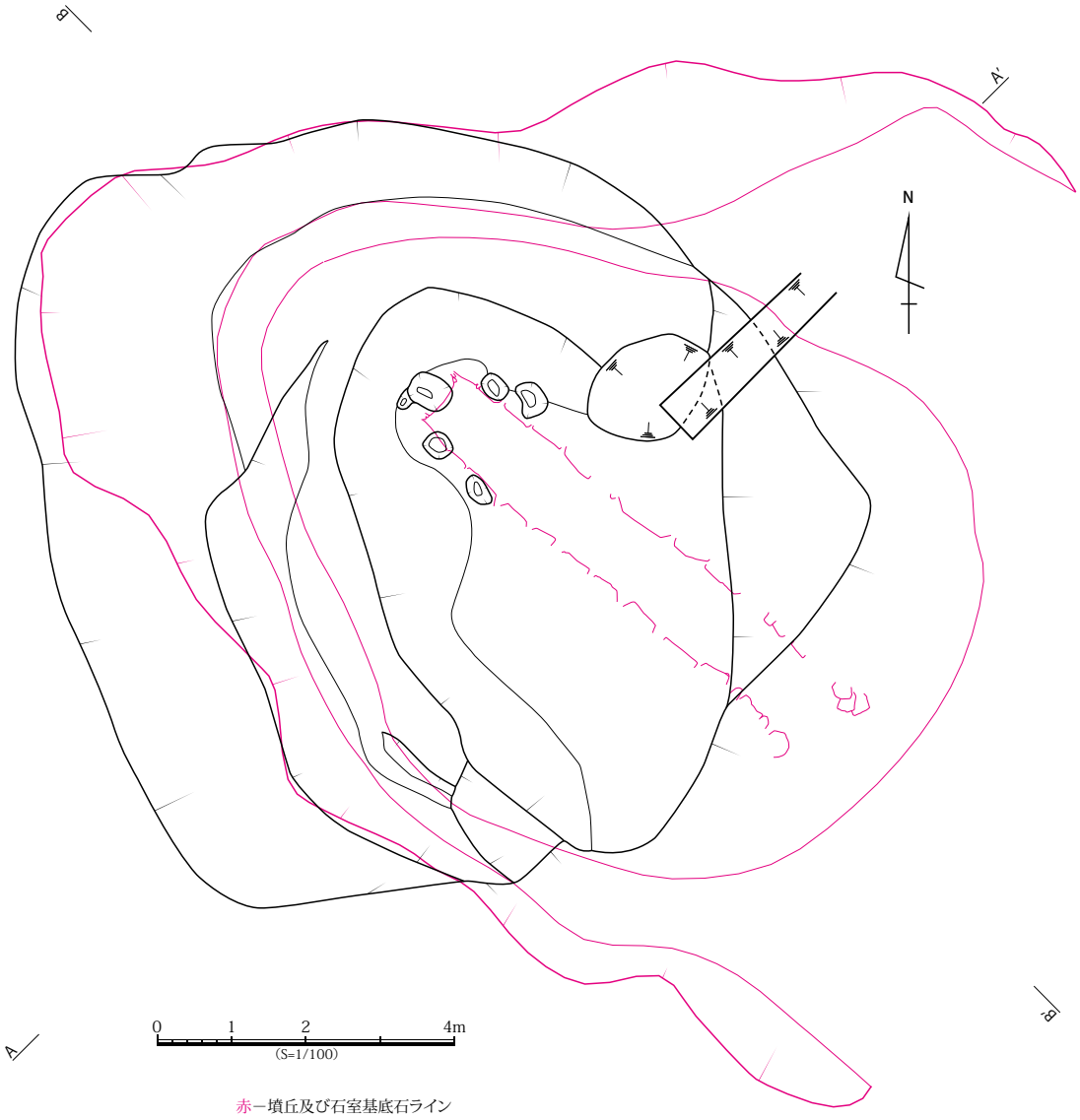
B－B′土層説明

1　表土層　外された天井石含む
2　にぶい黄褐色(10YR7/4)とにぶい黄褐色(10YR6/4)の砂が互層になる　水流跡
3　褐色(7.5YR4/6)砂質土　20cm大の礫含む
4　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
5　黒褐色(10YR2/2)砂質土
6　黒褐色(10YR3/1)砂質土
7　黒褐色(10YR2/2)砂質土
8　褐色(7.5YR4/3)砂質土
9　黒色(10YR2/1)砂質土
10　黒色(7.5YR1.7/1)砂質土
11　黒褐色(10YR3/1)砂質土
12　褐色(7.5YR4/4)砂質土
13　黒褐色(7.5YR3/2)砂質土
14　褐色(7.5YR4/4)砂質土
15　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土
16　褐色(10YR4/4)砂質土
17　褐色(10YR4/6)砂質土
18　黒褐色(10YR3/2)砂質土　34号墳墳丘構成土
19　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土　34号墳墳丘構成土
20　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土　34号墳墳丘構成土
21　褐色(10YR4/4)砂質土　34号墳墳丘構成土
22　褐色(7.5YR4/4)砂質土　34号墳墳丘構成土
23　褐色(10YR4/6)砂質土　34号墳墳丘構成土
24　褐色(7.5YR4/6)砂質土　34号墳墳丘構成土
25　褐色(7.5YR4/4)砂質土　34号墳墳丘構成土
26　褐色(7.5YR4/4)砂質土　34号墳墳丘構成土
27　褐色(7.5YR4/3)砂質土　34号墳墳丘構成土
28　暗褐色(10YR3/3)砂質土　34号墳墳丘構成土
29　褐色(10YR4/4)砂質土　34号墳墳丘構成土
30　暗褐色(7.5YR3/4)砂質土　34号墳墳丘構成土
31　褐色(7.5YR4/6)砂質土　34号墳墳丘構成土
32　褐色(10YR4/4)砂質土　34号墳墳丘構成土
33　褐色(7.5YR4/3)砂質土　天井石の落下に伴う撹乱
34　褐色(7.5YR4/4)砂質土　34号墳床面上面構成土
35　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土　34号墳床面上面構成土
36　黒褐色(10YR2/2)砂質土　34号墳床面上面構成土
37　褐色(7.5YR4/4)砂質土　34号墳床面上面構成土
38　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土
39　暗褐色(7.5YR3/4)砂質土　34号墳床面下面構成土・ほぼ築造時の基準面
40　黒色(7.5YR1.7/1)砂質土
41　褐色(10YR4/4)砂質土
42　褐色(10YR4/4)砂質土
43　褐色(7.5YR4/6)砂質土　地山層

第 29 図　墳丘土層断面図（S=1/60）

である。また，整地面の東側に隣接して，5.5m の範囲で，傾斜はあるものの三角形状の緩やかな面が形成されていた。これも，石室基底石のラインから，北側壁構築時の作業場，足場を確保するスペースであると考えられる。

墳丘の盛土は約 1.2m 残存する。第一段階は，石室の構築とあわせて行われる裏込め・盛土作業であり，後述する墳丘内石積遺構の構築もこの段階で行われる。29 図 A － A'における 32 ～ 47 層，29 図 B － B' における 26 ～ 32 層がこれにあたる。第二段階は，墳形や周溝を整える作業であり，29 図 A － A' における 18 ～ 31 層，29 図 B － B' における 18 ～ 25 層がこれにあたる。本来は，天井石を覆う作業が，第一段階と第二段階の間に入るものと想定されるが，全ての天井石が抜き取



第 30 図　墳丘基準面・石室掘り方実測図（S=1/100）

られ，撹乱を受けており，確認し得なかった。また，土層中で，版築を想起させるような堅く締まった層は確認できなかった。

(4)　第 27 号古墳（第 27 ～ 29 図）

第 34 号古墳の南西側，墳裾間では約 2.2m 離れた位置に，第 27 号古墳の北側の墳裾を確認した。墳裾は急傾斜面にあたるため，流失部分が多く，土層断面でわずかに確認できた。墳裾の想定ラインは調査範囲外へ延びる。また，調査範囲外に天井石と想定される石材や，天井石が抜き取られたために生じた窪みを確認しており，そこを古墳の中心とすると，第 27 号古墳は径 12m 前後の円墳と考えられる。また，土層観察により，第 27 号古墳墳裾直上の埋土である 29 図 A － A’ 48 層が，第 34 号古墳墳丘基準面の掘り方によって削られているため，第 27 号古墳は第 34 号古墳に先行する。

(5)　墳丘内石積遺構（第 31 図）

墳丘内には，比較的急傾斜である東側で石積遺構を検出した。高い位置の石材は，墳丘検出時に露頭していたが，後述する土層観察からも盛土の流失に伴う露頭で，本来は墳丘盛土中に収まっていたものと考えられる。石積遺構は，10 ～ 50cm 大の石材を使用し，平面形状は，大別すると南側で 2 列，北側で 3 列の石列となる。石列はそれぞれ，石室の側壁を起点に，側壁ラインと直交するように外側に延びた後，角度を変じて側壁ラインと平行にのび，墳丘東半の範囲内で消滅する。石列は 2 ～ 3 石で列をなす箇所，1 石のみで列をなす箇所，また数段積み上げられた箇所などがあり，不規則である。

南側壁に伴う石列を入口側から第 1・2 列として述べる。

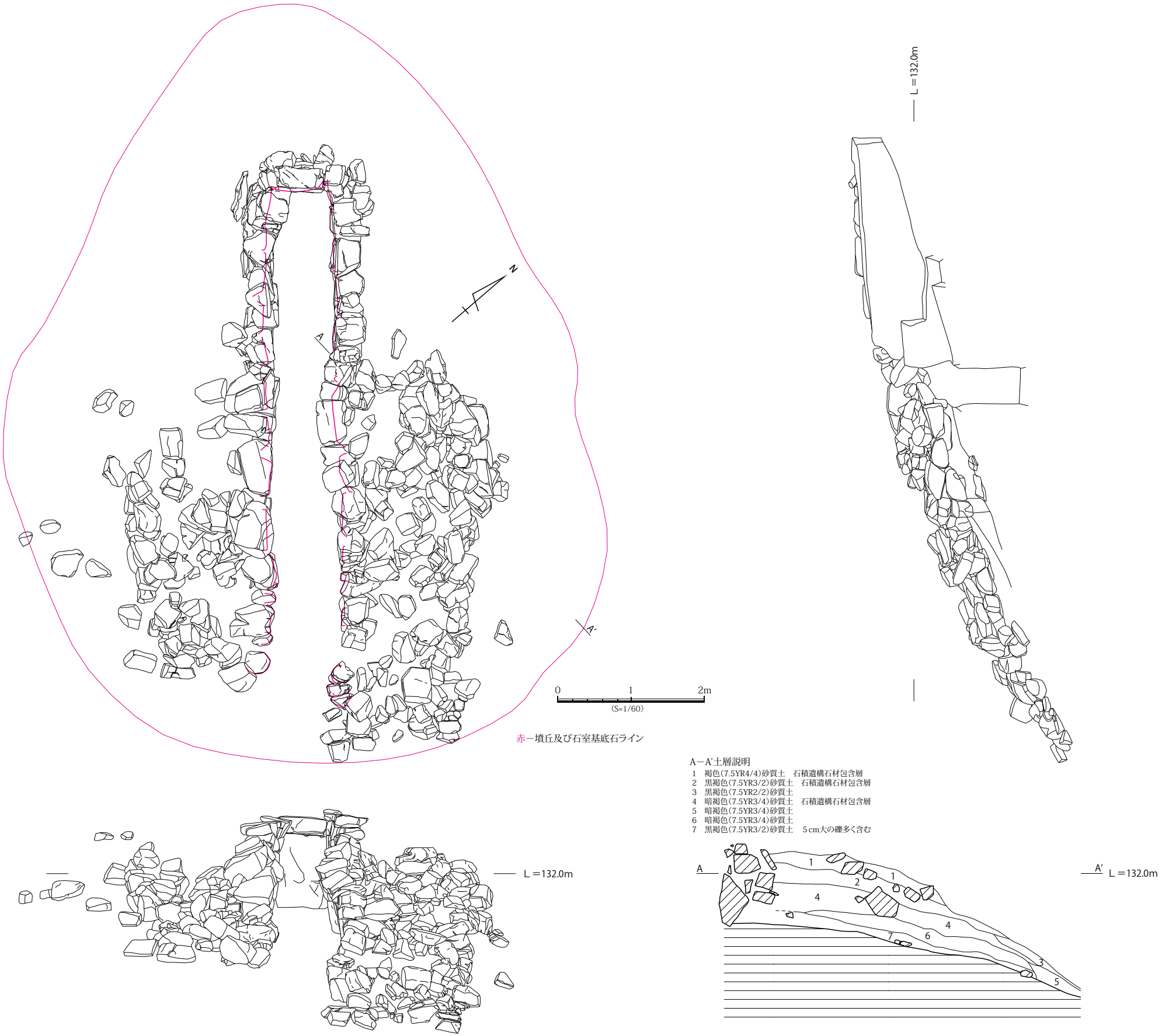
第 1 列は南側壁の入口側端部から発し，約 120cm 南西に延びた後，角度を変じ，石室と平行するように約 290cm 北西に延びる。石列は側壁端部では，傾斜に沿って，3 ～ 4 石が並び，最大幅が 105cm である。角度を変じた箇所から，平面では 2 ～ 3 石が並ぶのみで，幅が狭くなるが，ほぼ直立するように 2 ～ 3 段程度積み上げた箇所が見られ，最高で 50cm の高さである。

第 2 列は南側壁の入口側端部から北西側約 120 ～ 180cm の範囲から発し，約 140cm 南西に延びた後，角度を変じ，石室と平行するように約 100cm 北西に延びる。石列は側壁側では，傾斜に沿って 2 ～ 4 石が並び，最大幅が 120cm で，2 ～ 3 段程度，乱雑に積み上げている。角度を変じた箇所からは，1 石のみが 1 ～ 2 段で並んでいる。

第 1 列と第 2 列を比較すると石室と平行する範囲では第 1 列の上端の方が第 2 列の上端よりも高い位置になり，比高差は最大で 35 ㎝である。

北側壁に伴う石列を入口側から第 1・2・3 列として述べる。

第 1 列は北側壁の入口側端部から約 60cm 南東側までの範囲から発する。そこから約 170cm 北に延びた後，角度を変じ，石室と平行するように約 210cm 北西に延び，第 2 列と合流する。石列の南東端は，南側壁端部より，約 100cm 南東に突出しており，比高差も約 70cm ある。石列は側壁端部付近では，傾斜に沿って 3 ～ 4 石が 1 ～ 2 段で並び，最大幅が約 150cm である。角度を



第 31 図　墳丘内石積遺構実測図（S=1/60）

変じた箇所から，平面では 1 ～ 3 石が並び，正面から見ると約 89.5°の角度で 1 ～ 2 段程度積み上げた箇所が見られる。

第 2 列は北側壁の入口側端部から北西側約 120 ～ 220cm の範囲から発し，約 170cm 北に延びた後，角度を変じ，石室と平行するように約 260cm 北西に延びる。石列は側壁側では，石材が点在し，途切れる箇所もあるが，おおむね傾斜に沿って 2 ～ 4 石が並び，最大幅が約 110cm で，2 段程度積み上げた箇所がある。角度を変じた箇所からは，平面では 1 ～ 2 石が並び，正面から見ると約 75.5°の角度で 2 ～ 3 段程度積み上げられている。

第 3 列は，入口側端部から北西約 250 ～ 325cm の範囲から発し，約 80cm 北に延びた後，角度を変じ，平面上，第 2 列の約 30cm 南側に隣接し，石室と平行するように約 155cm 北西に延びる。側壁側では，傾斜に沿って 2 ～ 3 石が並び，最大幅が 75cm で，2 ～ 3 段程度積み上げられている。角度を変じた箇所からは，平面上 2 ～ 3 石が並び，正面から見ると約 61.5°の角度で 2 ～ 3 段程度積み上げられている。

これらの石列は北東側面からは石垣状に見え，第 3 列が加わる部分が最も高く約 80cm である。

なお，北側壁には，入口側端部から約 450cm の位置から発する平面上，石列に見える石材が 3 個あるが，石室と平行に角度を変じて続くことがなく，第 3 列よりも低い位置で収まる。また，側壁側は裏込石と一連になることから，石積遺構とは性格を異にする裏込石であると想定される。

ここで，石積遺構の構築過程を想定してみたい。A － A’の土層観察により，石積遺構は，基本的に石室側壁の築造段階に対応して，構築されていると想定される。すなわち，側壁石材を 1 ～ 2 段積んだ段階で石積遺構の石材を積み，側壁と石積遺構の間には裏込の土や石を盛り，同時に石積遺構の外側には墳丘盛土を施している。そして，側壁が高くなるごとにその作業を繰り返している。A － A’の第 1 層は北側壁第 3 列，第 2・4 層は北側壁第 2 列に対応し，土層では石材が確認できなかったが，レベルから北側壁第 1 列は，第 4 層の第 2 列の構築後，第 2 層の作業前に構築されたものと想定される。また，先述のように，石積遺構の外側に墳丘盛土を施していること，第 1 層上には，天井石架構後の盛土があったと想定されることから，石積遺構は墳丘盛土内に収まっていたと考えられる。南側壁側では，石材のレベルから石室構築作業に合わせて，第 2 列下段→第 1 列下段→第 2 列上段→第 1 列上段という形で作業が進んだものと想定される。このように石室に合わせた構築過程のため，南北側壁上端と平行する石積遺構上端のレベルは，ほぼ同じになっている。

この石積遺構は，構築過程からも，石室の強化という目的があったと想定される。また，高標高側の墳丘西側では全く検出されず，東側でも低標高側の北側壁に伴うものの方が範囲も広く，規模も大きいことから，墳丘を高くする目的も想定される。

(6)　埋葬施設（第 30・32 ～ 34 図）

本古墳の埋葬施設は南東方向 (S49.5°　E) に開口する無袖式の横穴式石室で，花崗岩を使用した割石積である。可部町の山地は花崗岩の分布域であり，周辺の谷地では，土石流などで運ばれたであろう巨大な花崗岩が点在している。そのため，石材は周辺から調達したものと考えられる。掘り

方は，奥壁側約 2m は，石室に応じた幅となっているが，そこから南東側約 4m の範囲は作業場・足場の確保のため，最大で幅 4.4m と広くなっている。また石室の南東側約 1.3m の範囲は整地されておらず，約 20°の急傾斜面に石室が築造されている。石室の平面プランは，無袖式で，ほぼ長方形となっている。石室の全長は，南側壁 6.6m，北側壁 6.98m である。本石室には明確な袖石が無いが，石材の積み方が変化し，側壁の上端ラインの傾斜角が緩やかなものから比較的急になる箇所を玄室と羨道の境と想定すると，基底石間で，奥壁から南側壁で約 2.52m，北側壁で約 2.5m の位置となる。その場合，羨道の長さは南側壁 4.08m，北側壁 4.48m であり，玄室と羨道の長さの比は，ほぼ 1:1.7 である。幅は，奥壁側で 0.82m，玄室の最大箇所で 1.05m，玄室南東端で 0.93m，玄室と羨道の境の羨道側基底石間で 0.9m，石室入口側基底石間で 0.92m である。玄室の幅と長さの比は，ほぼ 1:2.8 である。高さは奥壁側で 1.22m，玄室入口側で約 1.2m である。

なお，天井石は，調査前に残存していると考えられた石材も両側壁とも架かっておらず，すべてが抜き取られていた。

①奥壁

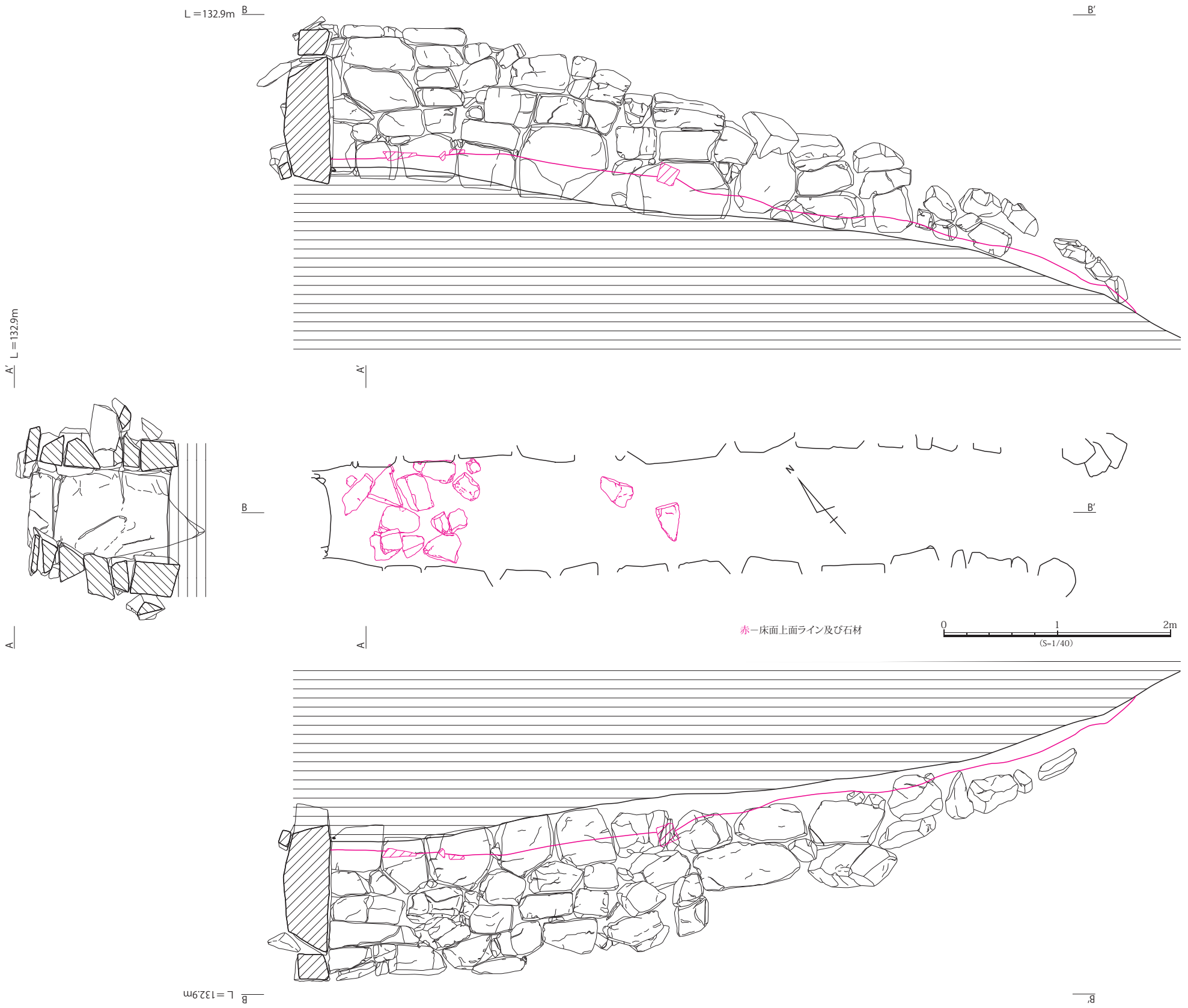
奥壁は基底に，最大幅 83cm，高さ約 127cm の歪な五角形の板石を使用し，幅が狭く鋭角になる五角形の頂点を約 30cm 埋め込む形で設置している。基底石の上端は石室側から北西に向け傾斜しているため，幅約 33cm，奥行約 25cm，高さ約 5cm の板石を北側に，幅約 40cm，奥行約 28cm，高さ約 10cm の石材を南側に載せ，水平をとり，上段の石材の足場としている。北側の石については石室側からも確認できる。これらの石材の上に，幅約 65cm，奥行約 28cm，高さ約 21cm の直方体状の石材を横積みしている。壁面は基底石の面が大半を占め，全体でほぼ垂直に立ち上がる。床面からの高さは約 1.22m である。

②南側壁

南側壁は，全体に 30 ～ 80cm 大の大きさや形状の異なる石材を使用している。南側壁の基底石は，隙間に詰めた小石材を除くと 14 個で，入口側以外は，おおむね広口積みにしている。基底石より上の段は，隙間を埋め，上端を揃えるように，長手積みと小口積みを行っている。完全な横目地は通らず，床面の傾斜に沿って奥壁から下降するラインになるものの，横目地を指向していると想定できる箇所は，奥壁から基底石で 5 石目までの約 2.5m の範囲である。側壁上端のラインは，横目地を想定できる範囲の列の上段にあたる奥壁から 2.3m の地点で，傾斜角が 6.5°から 20°へ変化しており，ここが玄室と羨道の境と考えられる。玄室では石材を 4 ～ 6 段積み上げている。玄室南側壁で床面から最も高い箇所は，奥壁から 1.44m の位置で 1.3m，最も低い箇所は奥壁から 0.62m の位置で 1.18m である。

羨道部分でも玄室に近い側の石材は，玄室の石材より大きな石材を広口積みもしくは長手積みしている箇所がある。積み方は乱雑であり，土圧で石室側にせり出しているものがある。また，入口に向かって段数を減じ，入口側基底石の 4 石は 1 段のみになる。

奥壁から約 0.3m の位置では，壁面は床面から約 0.72m の高さまでは，約 87°の角度で立ち上がり，中位付近でさらに 65°の角度で内傾し，持ち送り状になる。最上段の石材は基底石のものより，24cm 石室側へせり出している。ただ，奥壁から約 2.25m の位置では，床面から約 0.91m



第 32 図　石室実測図（S=1/40）

の高さまでは直立し，そこから 86°の角度で内傾するものの，最上段の石材は基底石のものより，6.5cm 石室側へせり出すのみである。明らかな持ち送りといえるものは，奥壁から南東へ約 0.4m の範囲に見られるのみである。

③北側壁

北側壁は，全体に 30 ～ 80cm 大の大きさや形状の異なる石材を使用している。北側壁の基底石は隙間に詰めた小石材を除くと 16 石で，おおむね広口積みで，入口側は小口積みにしている。また，奥壁から 4 石目までは，比較的，大きさ・形状の揃った石材を設置している。基底石より上の段は，隙間を埋め，上端を揃えるように，長手積みと小口積みを行っている。横目地が通る箇所は，奥壁から 0.44m，高さ 0.48m ～奥壁から 1.08m，高さ 0.58m の間，奥壁から 1.14m，高さ 0.48m ～奥壁から 5 石目の基底石の上端ラインの間及びその 1 段上の奥壁から 1.36m，高さ 0.82m ～奥壁から 2.52m，高さ 0.84m の間である。また，側壁上端のラインは，奥壁から 1.2m の地点で傾斜角が約 1°から約 10°に変わり，そこから横目地が通る範囲の列の上段にあたる奥壁から 2.5m の地点で傾斜角が 19°へ変化する。この列は，基底石では，奥壁から 5 石目の石材で約 2.44m の位置であり，ここが玄室と羨道の境と考えられる。玄室では石材を 3 ～ 6 段積み上げている。玄室北側壁で床面から最も高い箇所は，奥壁から 1.18m の位置で 1.28m，最も低い箇所は奥壁から 2.4m の位置で 1.18m である。

羨道部分の石材は，大きさ，形状，積み方が不規則になる。また，入口に向かって段数を減じ，入口側基底石の 3 石は 1 段のみになる。玄室との境，6 石目の基底石の北西側上段には，目詰の石を挟み，横 20 ㎝ × 縦 26 ㎝の面と角度を変えた横 10× 縦 22cm の面の長方形 2 面からなる小口面を石室に向けた石材が積まれているが，この石材は玄室の石材と比べると，石室側にせり出しており，一見袖石のように見える。しかしながら，基底石のラインは玄室側の 5 石目と羨道側の 6 石目で変わりなく，壁面も凹凸はあるが全体に一面と捉えられ，また，玄室側の石材とその石材の間は隙間が空いており，土圧で押し出された可能性も考えられる。これらの理由から，その石材をもって，玄室との境の標識とした可能性は考えられるが，袖石の範疇には入らない。

北側壁では，基底石から最上段の石まで，ほぼ直立しており，持ち送りにはなっていない。

奥壁，南側壁，北側壁の状況を見てきたが，ここで，その構築順について想定してみたい。掘り方や石材の組み合わせの状況から，まず奥壁の基底石を設置し，その後で奥壁側から順に，側壁の基底石を据えたものと考えられる。南側壁では奥壁から基底石の 3 石目，北側壁では奥壁から基底石の 4 石目付近までは，掘り方と側壁との間隔がほとんど無く，細かい作業は石室の内側で行ったと考えられる。また，土層観察や墳丘内石積遺構の構築過程からも，どちらかの側壁のみを一気に積み上げたのではなく，ほぼ同レベルで順次，段を積み上げていったと想定される。ここで，南側壁の奥壁側の一部のみが明確な持ち送りになっていることに注目すると，南側壁では，持ち送りを試みたものの，基底石の段階で石室幅が狭いため，上段の幅を確保するためには，北側壁については，直立に積み上げざるを得なかった，もしくは持ち送りの必要がなかったものと考えられる。このことや，南側壁が南西側の急傾斜面に近接しており，北側壁は整地した緩斜面も含め，広い作

業スペースを取れるため，南側壁を優先させる方が作業効率も上がると考えられることから，段階ごとの作業では，南側壁が先行したものと想定される。

④床面

床面は上下 2 面を確認した。下面は，ほぼ石室掘り方の整地面と同レベルであり，漆の根による撹乱もあり，土層断面では整地面と分層できなかった。しかし，他の整地面と比べ，堅く締まっていること，遺物出土状況の項で後述するように，この面から追葬時に片づけられたと想定される須恵器や鉄器が出土したことから，床面であると想定した。床面最高所は標高 131.55m である。床面は奥壁から約 1m は，ほぼ水平であるが，奥壁から約 1 ～ 5.5m の範囲は約 9°の傾斜で，そこから傾斜角を約 20°に変じて，入口に向かって下がっていく。本古墳は，傾斜面に築造されたために，掘り方の整地面でさえ，レベルの水平を取れずに傾斜しており，この面に構築される側壁基底石ラインの傾斜が生じ，これに対応して，床面の傾斜も生じたものと想定される。羨道床面からは 10 ～ 20cm 大の角礫を 4 つ検出した。追葬時に片づけられなかった閉塞石や落下した側壁の石材の可能性があるが，検出状況からは，その性格は明確にし得なかった。

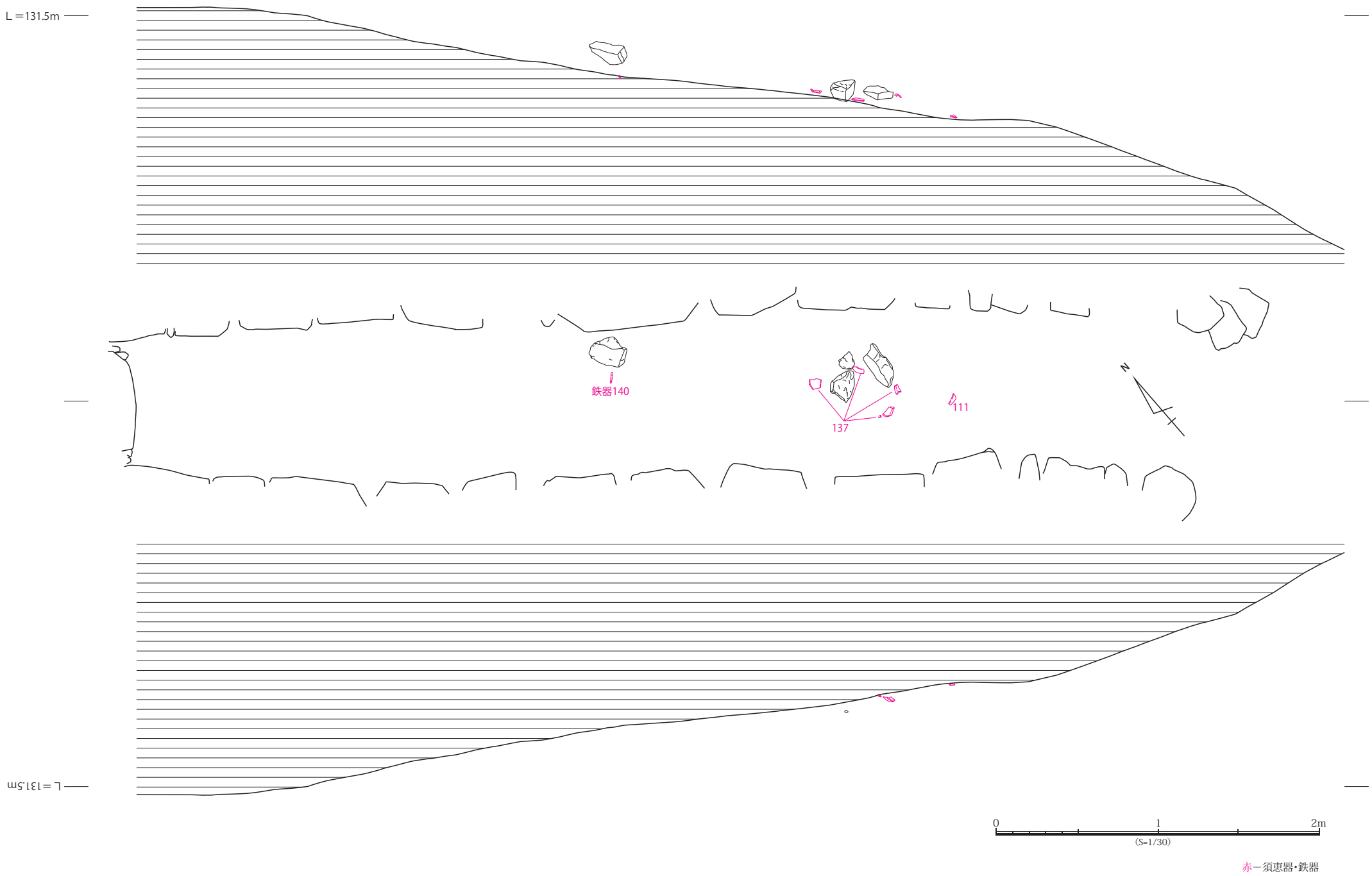
上面は，下面に奥壁側で約 7cm，最大箇所で約 30cm の盛土を施した面である。そのため石室の幅は奥壁で 0.76m，玄室最大箇所で 1m，玄室南東端付近で 0.87m，玄室と羨道の境の羨道側基底石間で 0.76m と下面よりも狭くなる。上面では，奥壁から約 0.1 ～ 1.3m の範囲で敷石を確認した。敷石の範囲は，石材間の間隔は空くものの，おおむね北側壁側で約 1.2m，南側壁側で約 0.75m，幅が 0.4 ～ 0.87m である。敷石は約 10 ～ 35cm 大の板石を使用し，平坦な面を上に向け，盛土に埋め込まれた形で検出した。奥壁側の南側壁に沿った約 30×40cm の範囲と奥壁から 1.3m の位置から入口側にかけては，敷石を確認できなかったが，抜き取られた痕跡は確認できなかった。また，敷石の約 20cm 南東から，盗掘時に割られて石室に落下した天井石と考えられる石材を検出したが，その石材の下には敷石と想定できる石材を確認できなかった。これらのことから，当初から，敷石は玄室のほぼ半分のみに敷いた状況だったと考えられる。また，北西端の敷石上には，約 17×15×10cm 大の直方体の石材が置かれていた。これは，その位置から，石枕か棺台石と考えられるが，棺台とするには，南側壁側に寄り過ぎており，この 1 石のみでは棺を置くことが困難と考えられるため，石枕としての役割が想定される。

上面では，その他に奥壁から約 2.4 ～ 3m の範囲に 30cm 大の角礫を 2 つ検出した。その位置から，閉塞石の可能性もあるが，盗掘時に廃棄されたとしても，残存する石材の数が少なすぎるため，考えにくい。むしろ，割られた天井石が，敷石との間に落下していたため，側壁の石材が落下した可能性が想定される。いずれにしても，検出状況からは，その性格を確定できなかった。

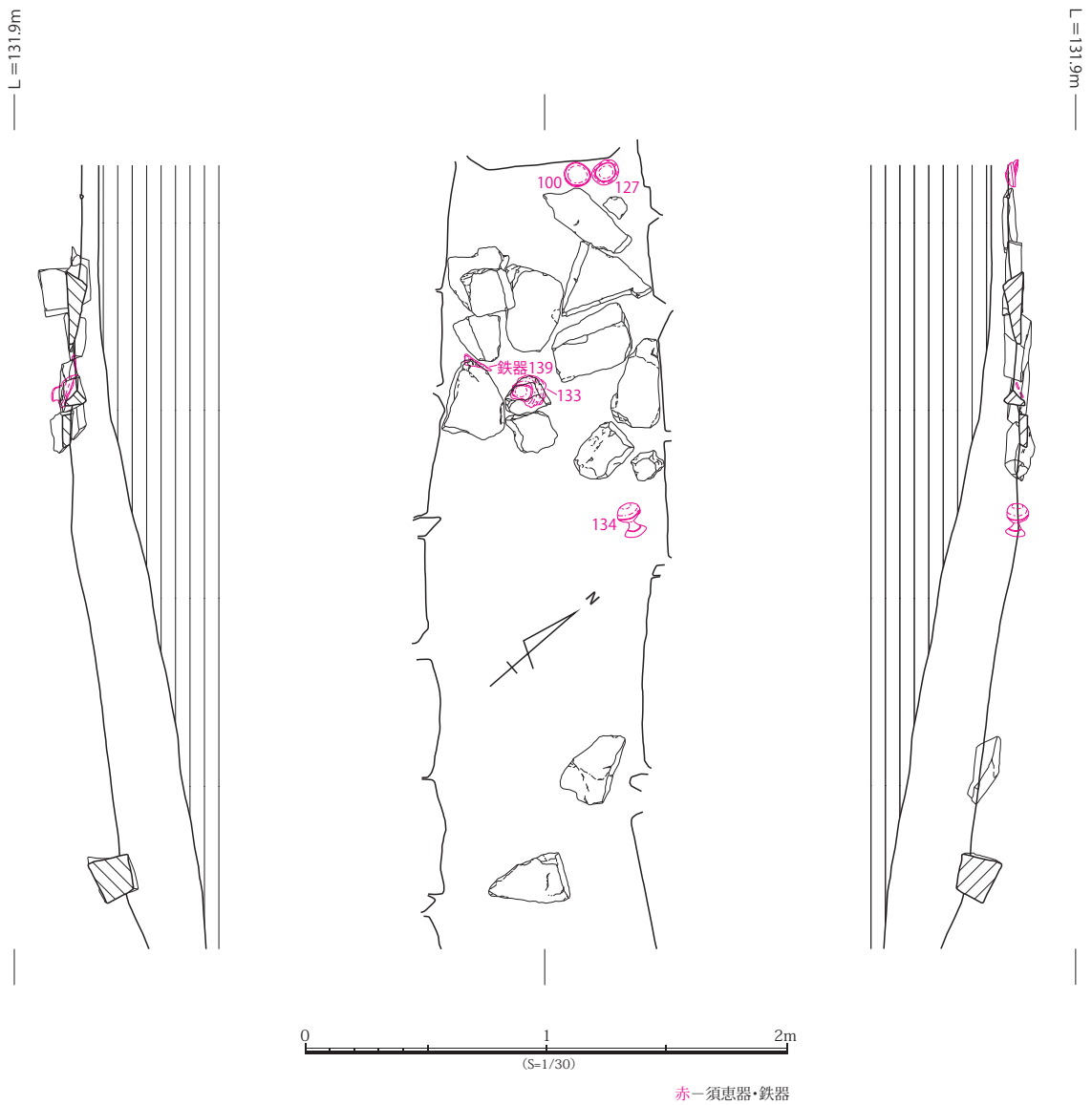
また，最終埋葬面と考えられる上面から閉塞石やその痕跡が確認されなかったため，少なくとも最終埋葬時には石材を使用した閉塞作業をしておらず，土砂やせいぜい小礫のみで閉塞を行ったものと考えられる。

(7)　遺物出土状況（第 33 ～ 35 図）

本古墳では，須恵器 (坏蓋・坏身・高坏・器種不明の蓋・台付長頸壺・はそう・提瓶・横瓶),



第 33 図　石室内遺物出土状況実測図（床面下面・S=1/30）

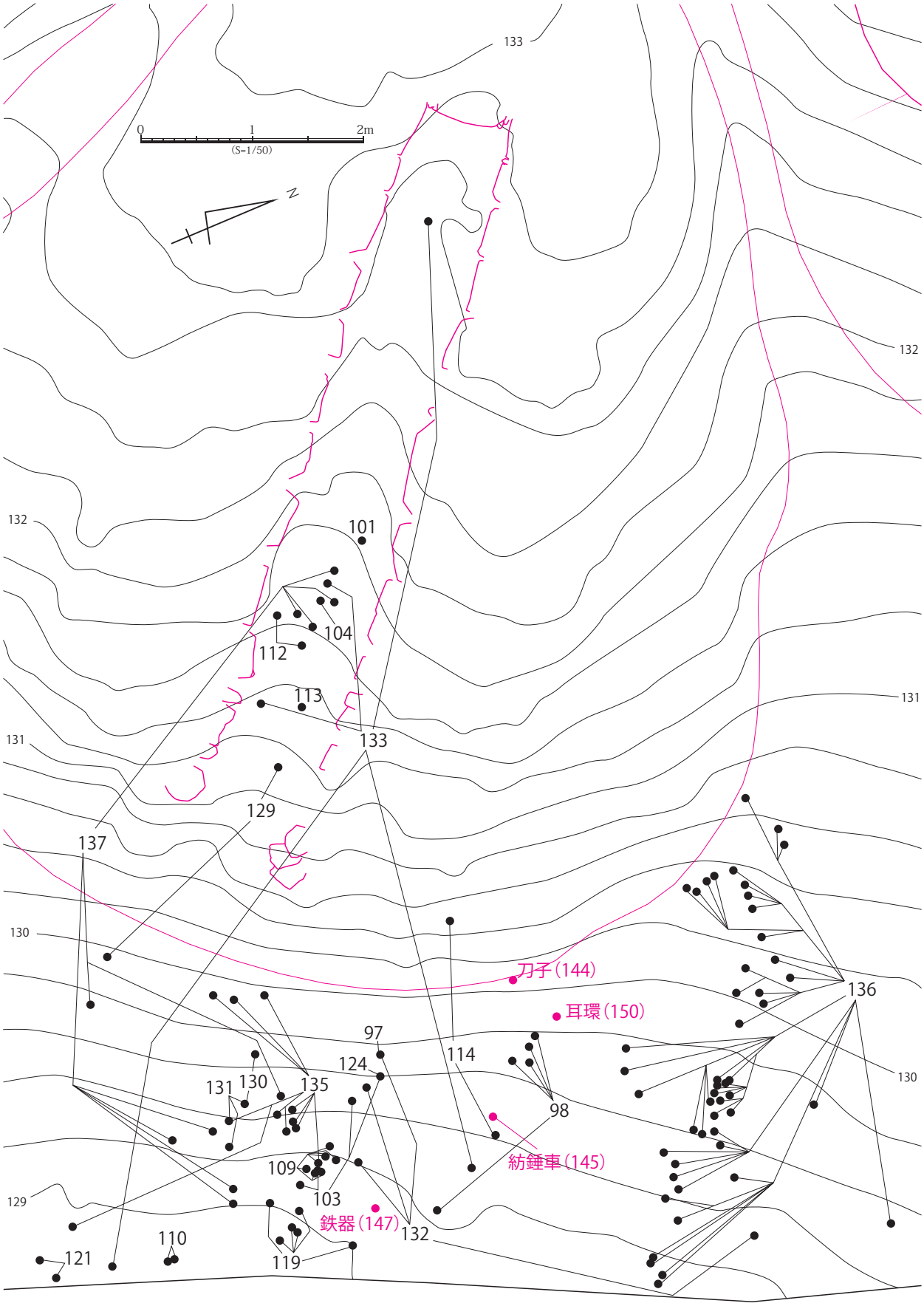


第 34 図　石室内敷石及び遺物出土状況実測図（床面上面・S=1/30）

土師器 (坏)，鉄器 (鏃・刀子・紡錘車・鍔・帯金具・用途不明品)，装飾品 (耳環) が出土している。それらの出土状況について，場所ごとに述べたい。

羨道の床面下面からは，須恵器 (坏蓋・横瓶)，鉄器 (用途不明品) が出土した。坏蓋 (111) は，奥壁から約 5.02m，南側壁から 0.38m の位置から，横瓶 (137) は，奥壁から約 4.2 ～ 4.7m，南側壁から 0.38 ～ 0.66m の範囲から出土したが，坏蓋 (111) は開口部前面埋土，横瓶 (137) は開口部前面からも破片が出土しており，追葬時に片づけられたものと考えられる。用途不明鉄製品 (140) は，奥壁から約 2.95m，北側壁から 0.29m の位置から出土したが欠損しているため，これも追葬時に片づけられたものと考えられる。

玄室内の床面上面からは，須恵器 (坏蓋・坏身・台付長頸壺・はそう)，鉄器 (鏃) が出土した。坏蓋 (100)・坏身 (127) は，北側壁寄りの奥壁際で並んで出土した。はそう (134) は奥壁から約 1.5m，



第 35 図　開口部前面遺物出土状況実測図（S=1/50）

北側壁から 0.15m の位置から，鉄鏃 (139) は奥壁から約 0.8m，南側壁から 0.14m の位置で敷石の隙間に入り込んだ状態で出土した。また，台付長頸壺 (133) は奥壁から約 0.92m，南側壁から 0.35m の位置で出土したが，羨道埋土中や開口部前面からも破片が出土しており，最終埋葬時には片づけられ，玄室内に破片が残存した可能性も考えられる。

羨道の床面下面と上面の間の埋土中からは，坏蓋 (101・104・112・113)，高坏 (129) が，上面の埋土中からは，坏蓋 (115) が出土した。また，石室内の埋土から，坏蓋 (108)，坏身 (126)，用途不明鉄器 (141 ～ 143) が出土した。いずれも破片であること，(126) は開口部前面埋土からも破片が出土していることから，追葬時に片づけられたものと考えられる。

開口部前面からは，先述の石室内と分散して出土したもの以外では，遺構面から，坏蓋 (97・98・103・109・110・114)，坏身 (119・121・124)，高坏 (130・131)，器種不明の蓋 (132)，提瓶 (135)，刀子 (144)，鉄製紡錘車 (145)，用途不明鉄製品 (147)，耳環 (150) が出土し，埋土中から，坏蓋 (99・102・105 ～ 107)，坏身 (116 ～ 118・120・122・123・125・128)，鍔 (146)，用途不明鉄製品 (148) が出土している。須恵器は破片の状態で，出土状況からも，追葬時にかき出されたものと考えられる。

北東側墳裾から東へ下る傾斜面に沿って，約 4m の範囲で，横瓶 (136) が出土した。(136) は，破片の状態で比較的集中して出土しており，出土位置から追葬時にかき出されたものとは考えにくい。破片や出土した状況から，何らかの祭祀に伴い，破砕されたものと考えられる。

墳丘盛土中からは，土師器の坏 (138) と鉄器の帯金具 (149) が出土した。坏 (138) は墳丘南西側の盛土表層付近と直近の周溝埋土中から破片が分かれて出土した。(138) は，その特徴から後述する古墳築造の時期よりは後の時期のものと考えられる。また，墳丘盛土でも表層から出土し，周溝埋土中からも出土したこと，破片を接合しても完形にならないことから，古墳築造時に盛土に紛れ込んだのではなく，墳丘上での何らかの祭祀に使用され，破砕されたものが，盛土中に紛れ込んだ可能性が考えられる。帯金具 (149) は，墳丘南側の盛土中から出土した。これについては，盛土でも中層から出土していることや，輪金の一角が折れ曲がっていることから，廃棄したものが，古墳築造時の盛土中に紛れ込んだ可能性や，出土位置から第 27 号古墳からかき出されたものが盛土中に紛れ込んだ可能性を想定したが，出土状況からは明確にし得なかった。

(8)　出土遺物

本古墳の出土遺物の中で特徴的な遺物について述べたい。個々の遺物の詳細については，後掲する観察表を参照されたい。

○須恵器（第 36 ～ 38 図）

・坏蓋 (97 ～ 115)

坏蓋は，成形技法・形態などの特徴から，以下の 7 種類に分類できる。

Ⅰ類 (97)

口径 12.6cm，器高 4.9cm と比較的大きなものである。天井部は平坦気味ではあるが丸みを持

ち，口縁部へ向け，緩やかなカーブを描く。口縁部は比較的長めで，わずかに屈曲させて外下方にのびる。口縁端部は尖り気味に収める。天井部はヘラ切り後，ナデを施している。これらの特徴を持つものは，田辺昭三氏による陶邑編年[21]のTK209型式，中村浩氏による陶邑編年[22]のⅡ型式5段階，向田裕始氏による芸備地方における須恵器編年[23]のⅡ型式2段階にあたるものと考えられる。

Ⅱ類 (98)

復元口径12.4cm，器高4.2cmと比較的大きなものである。天井部は平坦で，緩やかなカーブを描きつつ口縁部に至る。口縁部は比較的長めで，わずかに屈曲させて外下方にのび，端部に至る直前で外湾して外に開く。口縁端部は尖り気味に収める。天井部はヘラ切り後，ナデを施している。これらの特徴を持つものは，田辺編年のTK209型式，中村編年のⅡ型式5段階，向田編年のⅡ型式2段階にあたるものと考えられる。

Ⅲ類 (99 ～ 109)

口径10.0 ～ 11.1cm，器高3.6 ～ 4.2cmである。天井部は平坦気味ではあるが丸みを持ち，口縁部へ向け，緩やかなカーブを描く。口縁部は比較的短めなものが多く，わずかに屈曲させて外下方にのびるか垂下する。口縁端部は尖り気味に収めるものと丸く収めるものがある。天井部はヘラ切り後，若干ナデを施しているものと未調整ですませるものがある。これらの特徴を持つものは，田辺編年のTK217型式，中村編年のⅡ型式6段階，向田編年のⅡ型式3段階にあたるものと考えられる。

Ⅳ類 (110・111)

(110) は口径10.8cm，器高3.9cm，(111) は復元口径10.1cm，器高3.3cmである。天井部は平坦で，直線的に口縁部に至る。口縁部は比較的短めで，わずかに屈曲させて垂下する。口縁端部は尖り気味に収める。天井部はヘラ切り後，(110) は若干ナデを施し，(111) は未調整ですませる。これらの特徴を持つものは，田辺編年のTK217型式，中村編年のⅡ型式6段階，向田編年のⅡ型式3段階にあたるものと考えられる。

Ⅴ類 (112・113)

(112) は口径11.6cm，器高3.1cm，(113) は復元口径10.4cmで，比較的扁平な器形である。Ⅰ～Ⅳ類のものとの大きな相違としては，内面にかえりを持つことが挙げられる。天井部は平坦気味であるが丸みを帯び，体部は緩やかなカーブを描き，口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて，(112) は内湾しつつ，(113) は直線的に外下方へのびる。口縁端部は (112) は丸く，(113) は尖り気味に収める。かえりは短く内傾しており，端部は尖り気味に収め，口縁端部のラインよりも高い位置にある。天井部はヘラ切り後，未調整ですませる。これらの特徴を持つものは，田辺編年のTK217型式，中村編年のⅡ型式6段階，向田編年のⅡ型式3段階にあたるものと考えられる。

Ⅵ類 (114)

口径11.3cm，器高2.4cmで，比較的扁平な器形である。内面にかえりを持つ。天井部は平坦で，直線的に口縁部に至る。口縁部は短く，屈曲させて垂下し，端部は尖り気味に収める。か

えりは短く内傾した後，屈曲させて垂下し，端部は尖り気味に収め，口縁端部のラインよりもわずかに低い位置にある。天井部はヘラ切り後，若干のヨコナデを施している。これらの特徴を持つものは，田辺編年のTK217型式，中村編年のⅡ型式6段階，向田編年のⅡ型式3段階にあたるものと考えられる。

Ⅶ類 (115)

復元口径10.6cm，器高3.0cmで，比較的小型のものである。内面にかえりを持ち，天井部中央に断面方形のつまみがつく。天井部は平坦で，体部は直線的に口縁端部に至る。端部は丸く収める。かえりは内傾し，端部は尖り気味に収める。かえりは比較的長く，口縁端部のラインよりも低い位置にある。天井部はヘラ切り後，一部ヘラケズリを施している。これらの特徴を持つものは，田辺編年のTK217型式，中村編年のⅢ型式1段階，向田編年のⅢ型式1段階にあたるものと考えられる。

・坏身 (116 ～ 128)

坏身は，成形技法・形態などの特徴から，以下の4種類に分類できる。

Ⅰ類 (116 ～ 118)

口径9.3 ～ 10.3cm，受部径11.0 ～ 11.9cm，器高2.9 ～ 3.3cmである。立ち上がりは内傾した後，そのまま上方にのびるものと，屈曲して上方もしくは内上方にのびるものがある。立ち上がりは短く，端部は尖り気味に収めるものと丸く収めるものがある。受部は外反気味に外上方にのび，端部は尖り気味に収める。体部は内湾し，底部はわずかに平坦であるが，丸みを持つ。底部はヘラ切り後，(116・118) は若干ナデを施し，(117) は未調整ですませる。これらの特徴を持つものは，田辺編年のTK217型式，中村編年のⅡ型式6段階，向田編年のⅡ型式3段階にあたるものと考えられる。坏蓋のⅢ・Ⅳ類に対応すると想定される。

Ⅱ類 (119 ～ 122)

口径9.8cm，受部径11.4 ～ 11.8cm，器高2.9 ～ 3.5cmである。立ち上がりは，内傾した後，そのまま内上方へのびるものと，屈曲して上方もしくは内上方へのびるものがある。立ち上がりは短く，端部は尖り気味に収めるものと丸く収めるものがある。受部は，外上方へ直線的にのびるものと外反気味にのびるものがある。受部の端部は尖り気味に収めるものと丸く収めるものがある。体部はわずかに内湾するものと直線的にのびるものがあり，底部は平坦である。底部はヘラ切り後，(119・120) は若干ヨコナデを，(121) は一部にナデを施し，(122) は未調整ですませる。これらの特徴を持つものは，田辺編年のTK217型式，中村編年のⅡ型式6段階，向田編年のⅡ型式3段階にあたるものと考えられる。坏蓋のⅢ・Ⅳ類に対応すると想定される。

Ⅲ類 (123 ～ 126)

口径9.4 ～ 9.6cm，受部径11.1 ～ 11.2cm，器高2.5 ～ 3.0cmで，比較的扁平な器形である。立ち上がりは内傾した後，そのまま内上方へのびるものと，屈曲して上方もしくは内上方へのびるものがある。立ち上がりは短く，端部は尖り気味に収める。受部は，外上方へ直線的にのびるものと外反気味にのびるものがある。受部の端部は尖り気味に収めるものと丸く収めるものがある。体部はわずかに内湾するものと直線的にのびるものがあり，底部は平坦である。底

部はヘラ切り後，(123 ～ 125) はナデを施し，(126) は未調整ですませる。これらの特徴を持つものは，田辺編年の TK217 型式，中村編年のⅡ型式 6 段階，向田編年のⅡ型式 3 段階にあたるものと考えられる。坏蓋のⅢ・Ⅳ類に対応すると想定される。

Ⅳ類 (127・128)

口径 9.0cm，受部径 10.9cm，器高は (127) が 3.6cm，(128) が 2.9cm で，比較的小型のものである。立ち上がりは内傾した後，(127) は，そのまま内上方へのび，(128) は，わずかに屈曲して内上方へのびる。立ち上がりは短く，端部は尖り気味に収める。受部は，外上方へ外反気味にのび，端部は，(127) が尖り気味に，(128) が丸く収める。体部は直線的にのび，底部は平坦である。底部はヘラ切り後，(127) は一部にナデを施し，(128) は未調整ですませる。これらの特徴を持つものは，田辺編年の TK217 型式，中村編年のⅡ型式 6 段階，向田編年のⅡ型式 3 段階にあたるものと考えられる。坏蓋のⅢ類に対応すると想定される。

・高坏 (129 ～ 131)

いずれも無蓋高坏である。口径は (129) が 9.2cm，(130) が 11.9cm，(131) が 12.8cm，底径は (129) が 7.8cm，(130) が 9.0cm，(131) が 9.7cm で，(129) が比較的小型である。脚部は基部が太くラッパ状に外反し，端部を下方へ屈曲させ，段をなしている。これらの特徴から，(129) は田辺編年の TK217 型式，中村編年のⅢ型式 1 段階にあたり，(130・131) は田辺編年の TK217 型式，中村編年のⅡ型式 6 段階にあたるものと考えられる。

・蓋 (132)

本体の器種は不明であるが，蓋であると考えられる。天井部は平坦気味で，緩やかなカーブを描いて口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて外下方へのび，端部は尖り気味に収める。天井部はヘラ切りの後，一部にナデを施している。これらの特徴を持つものは，田辺編年の TK217 型式，中村編年のⅡ型式 6 段階にあたるものと考えられる。

・台付長頸壺 (133)

台部は，脚というよりは高台状であり，端部は強く内湾しており，内側の一端が接地している。体部の肩は張っており，2 条の凹線を施している。口頸部の基部の幅は狭く，外湾しつつ外上方へのびる。これらの特徴を持つものは，田辺編年の TK217 型式，中村編年のⅢ型式 1 段階にあたるものと考えられる。

・はそう (134)

口頸部は，細い基部から大きくラッパ状に開き，口径は基部径の 3 倍以上である。体部は扁平な球形を呈し，最大径は体部の高さの上側 1/3 の位置にある。最大径付近に 1 条の凹線をめぐらし，外面上方から内面下方に向けて 1 個の穿孔を施している。これらの特徴を持つものは，田辺編年の TK217 型式，中村編年のⅡ型式 6 段階にあたるものと考えられる。

・提瓶 (135)

体部の断面形は，正面からも側面からも円形を呈する。両肩にアーチ状の把手をつけるが，紐などを通すことは困難で形骸化している。ここで，アーチ状の把手を有するという形状だけで想定するなら，田辺編年の TK10 型式，中村編年のⅡ型式 3 段階，向田編年のⅡ型式 1 段階にあたるも

のと考えられるが，他の出土須恵器の年代と大きく時期差が生じる。そこで，把手が実用ではなく形骸化しているため，(135) 自体も実用品ではないという点で想定すると，田辺編年の TK209 型式，中村編年のⅡ型式 5 段階，向田編年のⅡ型式 2 段階にあたるものの可能性が考えられる。

・横瓶 (136・137)

(136) の口頸部は外反し，外上方へのび，端部は上方に肥厚し，平らに収める。(137) の口頸部は，(136) より短く，外反した後，外上方へのび，端部に至る直前で外側へ屈曲している。端部は丸く収める。これらの特徴だけでは時期を想定し得なかったが，出土状況から，他の須恵器の年代と大きな時期差はないものと考えられる。

以上のように須恵器の時期を見ると 6 世紀後葉から 7 世紀前半のものまでが，継続的に出土している。

○土師器（第 38 図）

・坏 (138)

底部から口縁部まで，緩やかにカーブを描いて外上方に立ち上がり，端部は尖り気味に収める。底部は平坦気味ではあるが，丸みを帯びている。また，内面に放射状暗文を一段施している。復元口径 10.5cm，器高 3.3cm であり，径高指数は 31 である。これらの特徴から，いわゆる「畿内産土師器」[24] であり，器種は坏 C Ⅲで，時期は飛鳥Ⅱ期 [25] にあたるものと考えられる。

○鉄器（第 38 図）

本遺跡からは，鉄器 (139 ～ 149) が出土している。このうち特徴的なものについて述べたい。

・鏃 (139)

明瞭な関を持つ方頭斧箭式鏃である。茎部の一部に木質が残存する。杉山秀宏氏による方頭鏃群 B －Ⅱ形式 [26] にあたる。

・刀子 (144)

刃側になで肩の関がつく刀子である。

・紡錘車 (145)

紡茎の一端及び紡輪の一角が欠損している。紡茎の断面形状は円形である。紡輪の断面形状はくさび形で，ほぼ偏平であり，東村純子氏による分類の A 類 [27] にあたる。

・鍔 (146)

倒卵形をした環状の鍔で，いわゆる喰出鍔である。

・用途不明品 (147・148)

(147) の横断面の形状は，先端付近まで長方形で，先端の縦断面の形状は，くさび形になっている。鑿としての用途が考えられる。

(148) は，湾曲する 2 枚の薄い鉄片が重なっており，欠損しているが本来は円形に近い筒状のものが 2 点重なったものと想定される。内面には木質が残存している。筒の復元内径が約 1.5cm の

円形であるため，刀装具とは考えにくく，刀子の鋲や責金具や何らかの棒状の道具の装具と想定される。

・帯金具 (149)

刺金の一端を長方形の輪金の短辺に巻きつけている。形状・大きさから馬具の鉸具と考えられる。

○装飾品（第 38 図）

・耳環 (150)

銅芯に金メッキを施している。外周側は劣化が激しく，青錆が顕著で欠損部が多い。内周側に金メッキが残存する。

注

1) 若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌Ⅰ』財団法人広島市文化財団　2002 年
以下，在地系土器編年は若島氏の編年による。
2) 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1991 年
3) 1に同じ。
4) 入倉徳裕「鍵尾式土器」『日本土器事典』雄山閣　1996 年
5) 高下洋一「大木権現山式土器」『日本土器事典』雄山閣　1996 年
6) 入倉徳裕「小谷式土器」『日本土器事典』雄山閣　1996 年
7) 高橋護「2 土師器の編年－ 3 中国・四国」『古墳時代の研究　6　土師器と須恵器』雄山閣　1991 年
以下，吉備系の土器編年は高橋氏の編年による。
8) 米田敏幸「2 土師器の編年－ 1 近畿」『古墳時代の研究　6　土師器と須恵器』雄山閣　1991 年
9) 8に同じ。
10) 8に同じ。以下，畿内系の土器編年は米田氏の編年による。
11) 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線 (石内バイパス) 道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988 年
財団法人広島市文化財団『成岡 A 地点遺跡』2001 年
12) 7に同じ。
13) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981 年
以下，田辺編年はこれによる。
14) 2に同じ。以下，中村編年はこれによる。
15) 向田裕始「広島県 (瀬戸内中部Ⅰ) の 7 世紀の土器・広島県 (瀬戸内中部Ⅰ) の 8 世紀の土器」『日本土器事典』雄山閣　1996 年
以下，向田編年はこれによる。
16) 野末浩之「特殊須恵器の器種と特徴」『古代の造形美　装飾須恵器展』愛知県陶磁資料館　1995 年
17) 柴垣勇夫「装飾須恵器の特徴とその分布」『古代の造形美　装飾須恵器展』愛知県陶磁資料館　1995 年
18) 山田邦和『須恵器生産の研究』学生社　1998 年
19) 川越哲志『弥生時代の鉄器文化』雄山閣　1993 年
以下，鉄器分類はこれによる。
20) 本古墳の石積遺構は，「列石」や「墳丘内石列」と呼称されてきたものであるが，塔の岡第 1 号古墳や第 6 号古墳で見られるものと同様，大きくは列をなしているものの，数段積み上げられていたり，不規則な箇所があるため，塔の岡例にならい，「石積遺構」を使用している。
財団法人広島市文化財団『塔の岡古墳群』1999 年
21) 13 に同じ。以下，田辺編年はこれによる。

22) 2に同じ。以下，中村編年はこれによる。
23) 向田裕始「芸備地方における須恵器生産 (1) －古墳時代を中心として－」『芸備古墳文化論考 (芸備第 15 集)』芸備友の会　1985 年
以下，向田編年はこれによる。
24) 暗文を施した土師器に代表されるような畿内産土師器について，安間拓巳氏は広島県内の出土例を検討され，地元で生産されたものもあると想定されている。本古墳出土のものも，畿内産であるという確証はないため，いわゆる「畿内産土師器」と表記している。
安間拓巳「広島県出土の暗文土師器」『芸備　第 30 集』芸備友の会　2002 年
25) 松村恵司「近畿地方の 7 世紀前半の土器」『日本土器事典』雄山閣　1996 年
26) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃」『考古資料大観 7　弥生・古墳時代　鉄・金銅製品』小学館　2003 年
27) 東村純子「律令国家形成期における鉄製紡錘車の導入と紡織体制」『洛北史学 第 7 号』洛北史学会　2005 年

第 5 表　上ヶ原第 34 号古墳出土須恵器・土師器観察表

（[　]：復元値）

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
97	坏蓋	開口部前面	口径　12.6 器高　4.9	天井部は平坦気味で，緩やかなカーブを描きながら口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて外下方にのびる。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後ナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ 内面天井部：ナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。
98	坏蓋	開口部前面	口径　[12.4] 器高　4.2	天井部は平坦で，緩やかなカーブを描きつつ口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて外下方にのび，端部に至る直前でわずかに外湾する。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後ナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ 内面天井部：ヨコナデ	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：やや軟調 色調：灰白色 ロクロ右回転。
99	坏蓋	開口部前面埋土	口径　11.1 器高　3.6	天井部は平坦気味で緩やかなカーブを描いて口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて垂下する。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後ナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ 内面天井部：ナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ左回転。
100	坏蓋	玄室床面上面	口径　11.1 器高　3.9	天井部は平坦気味で緩やかなカーブを描いて口縁部に至る。口縁部は若干屈曲させて外開き気味に垂下する。端部は丸く収める。	天井部：ヘラ切り未調整 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面 - 灰白色，一部灰オリーブ色 内面 - 灰白色 外面に自然釉かかる。ロクロ右回転。焼成時に大きく歪む。127 とセットと考えられる。
101	坏蓋	羨道床面下面埋土・開口部前面埋土	口径　[10.8] 器高　4.2	天井部は平坦気味で緩やかなカーブを描いて口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて垂下する。端部は丸く収める。	天井部：ヘラ切り未調整 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰色 ロクロ右回転。
102	坏蓋	開口部前面埋土	口径　[11.0] 器高　[3.6]	天井部は平坦気味で緩やかなカーブを描いて口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて垂下する。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後ヨコナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ	胎土：0.5 ～ 1mm 大の砂粒わずかに含む 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。
103	坏蓋	開口部前面	口径　[10.7] 器高　3.7	天井部は平坦気味でわずかに内湾しつつ口縁部に至る。口縁部は屈曲させて垂下する。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後ナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ	胎土：0.5mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：灰色 ロクロ右回転。
104	坏蓋	羨道床面下面埋土	口径　[10.6] 器高　3.6	天井部は平坦気味で，緩やかなカーブを描きつつ口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて外下方にのび，端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後ヨコナデ 口縁部・内面下位：ロクロ回転によるナデ 内面上位及び天井部：ロクロ回転によるナデの後ヨコナデ	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：軟調 色調：淡黄色 ロクロ右回転。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
105	坏蓋	開口部前面埋土	口径　10.4 器高　3.6	天井部は平坦気味で緩やかなカーブを描いて口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて垂下する。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後ナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。
106	坏蓋	開口部前面埋土	口径　10.2 器高　3.8	天井部は平坦気味で緩やかなカーブを描いて口縁部に至る。口縁部は若干屈曲させて外開き気味に垂下する。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後ナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。
107	坏蓋	開口部前面埋土	口径　10.3 器高　3.7	天井部は若干丸みを持ち，緩やかなカーブを描きつつ口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて外下方にのびる。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後一部ナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ 内面天井部：ヨコナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調:灰白色，一部灰オリーブ色 ロクロ右回転。外面口縁部と内面底部の一部に自然釉かかる。
108	坏蓋	石室埋土	口径　[10.0] 器高　3.6	天井部は平坦気味で緩やかなカーブを描きつつ口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて外下方にのびる。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後ナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。
109	坏蓋	開口部前面	口径　[10.0] 器高　3.7	天井部は平坦気味で，緩やかなカーブを描きつつ口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて外下方にのびる。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後一部ナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ 内面天井部：ヨコナデ	胎土：1mm 大の砂粒わずかに含む 焼成：やや軟調 色調：灰白色 ロクロ右回転。
110	坏蓋	開口部前面	口径　10.8 器高　3.9	天井部は平坦で直線的に口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて垂下する。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後ナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。
111	坏蓋	羨道床面下面・開口部前面埋土	口径　[10.1] 器高　3.3	天井部は平坦で直線的に口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて垂下する。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り未調整 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ 内面天井部：ロクロ回転によるナデ後一部ヨコナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰色 ロクロ右回転。
112	坏蓋	羨道床面下面埋土	口径　11.6 かえり径　9.6 器高　3.1	天井部は平坦気味で，体部は緩やかなカーブを描き，口縁部はわずかに屈曲させ，端部に至る直前で内湾しつつ外下方へのびる。端部は丸く収める。かえりは短く内傾して立ち上がり，口縁端部より高い位置にのびる。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り未調整 体部上半：ロクロ回転によるナデ後一部カキ目 体部下半から内面：ロクロ回転によるナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰色 ロクロ右回転。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
113	坏蓋	羨道床面下面埋土・開口部前面埋土	口径　[10.4] かえり径　[8.7]	口縁部はわずかに屈曲させて外下方へのびる。端部は尖り気味に収める。かえりは短く内傾した直後に屈曲して垂下し，口縁端部より高い位置にのびる。端部は尖り気味に収める。	体部から内面：ロクロ回転によるナデ	胎土：1mm 大の砂粒わずかに含む 焼成：良好 色調:外面 - 灰色，灰オリーブ色 内面 - 灰白色 ロクロ右回転。外面に自然釉かかる。
114	坏蓋	開口部前面	口径　11.3 かえり径　10.0 器高　2.4	天井部は平坦で，体部は直線的に外下方へのび，屈曲させて垂下する。端部は尖り気味に収める。かえりは短く内傾した直後に屈曲して垂下し，口縁端部よりわずかに下方にのびる。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後ヨコナデ 口縁部から内面体部：ロクロ回転によるナデ 内面天井部中心：ヨコナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。
115	坏蓋	羨道埋土	口径　[10.6] かえり径　[8.6] 器高　3.0 つまみ高　0.7	天井部中央に断面方形のつまみがつく。天井部は平坦で，体部は内湾気味に口縁端部に至る。端部は丸く収める。かえりは内傾しつつ，口縁端部より下方にのびる。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後一部ロクロ回転によるヘラケズリ，つまみナデ，つまみ接合時ナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ 天井部につまみ接合痕残る。	胎土：0.5mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。
116	坏身	開口部前面埋土	口径　10.3 受部径　11.9 器高　2.9	立ち上がりは短く内傾し，上方へのびる。端部は尖り気味に収める。受部は僅かに外反気味に外上方にのび，端部は尖り気味に収める。体部は内湾し，底部は平坦気味である。	内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面 - 灰色 内面 - 灰黄色 ロクロ右回転。
117	坏身	開口部前面埋土	口径　9.5 受部径　11.2 器高　3.3	立ち上がりは短く内傾した後，屈曲し，内上方にのびる。端部は尖り気味に収める。受部は外反気味に外上方にのび，端部は尖り気味に収める。体部は内湾し，底部は平坦気味である。	内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り未調整	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。
118	坏身	開口部前面埋土	口径　[9.3] 受部径　[11.0] 器高　3.1	立ち上がりは短く内傾した後，屈曲し，上方にのびる。端部は丸く収める。受部は外反気味に外上方にのび，端部は尖り気味に収める。体部は緩やかに内湾し，底部はわずかに平坦である。	内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。
119	坏身	開口部前面	口径　9.8 受部径　11.8 器高　3.5	立ち上がりは短く内傾した後，屈曲し，内上方にのびる。端部は尖り気味に収める。受部は直線的に外上方にのび，端部は丸く収める。体部は直線的で，底部は平坦である。	内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り後ヨコナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰色 ロクロ右回転。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
120	坏身	開口部前面埋土	口径　9.8 受部径　11.6 器高　2.9	立ち上がりは短く内傾した後，屈曲し，上方へのびる。端部は丸く収める。受部は外反気味に外上方にのび，端部は丸く収める。体部は若干内湾し，底部は平坦である。	内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り後ヨコナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。
121	坏身	開口部前面	口径　[9.8] 受部径　[11.8] 器高　3.2	立ち上がりは短く内傾し，内上方へのびる。端部は尖り気味に収める。受部は外反しつつ外上方にのび，端部は尖り気味に収める。体部は若干内湾し，底部は平坦である。	内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り後一部ナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面 - 灰白色，暗オリーブ色，緑色 内面 - 灰白色 ロクロ右回転。外面の一部に自然釉かかる。
122	坏身	開口部前面埋土	口径　[9.8] 受部径　[11.4] 器高　3.3	立ち上がりは短く内傾した後，屈曲し，上方へのびる。端部は尖り気味に収める。受部は直線的に外上方にのび，端部は尖り気味に収める。体部は若干内湾し，底部は平坦である。	内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り未調整	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面 - 灰白色，一部オリーブ灰色 内面 - 灰白色 ロクロ右回転。外面体部の一部に自然釉かかる。
123	坏身	開口部前面埋土	口径　9.6 受部径　11.2 器高　2.8	立ち上がりは短く内傾し，内上方へのびる。端部は尖り気味に収める。受部は直線的に外上方にのび，端部は尖り気味に収める。体部は直線的で，底部は平坦である。	内面底部：ロクロ回転によるナデの後ナデ 内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り後ナデ，一部ヘラによるナデ	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：外面 - 暗青灰色，青灰色 内面 - 青灰色 ロクロ右回転。外面体部の一部に黒斑残る。
124	坏身	開口部前面	口径　9.5 受部径　11.1 器高　3.0	立ち上がりは短く内傾した後，屈曲し，上方にのびる。端部は丸く収める。受部は外反気味に外上方にのび，端部は尖り気味に収める。体部は若干内湾し，底部は平坦である。	内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り後一部ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：灰黄色 ロクロ右回転。焼成時に大きく歪む。
125	坏身	開口部前面埋土	口径　9.4 受部径　11.2 器高　2.5	立ち上がりは短く内傾した後，屈曲し，上方にのびる。端部は尖り気味に収める。受部は外反気味に外上方にのび，端部は丸く収める。体部は若干内湾し，底部は平坦である。	内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。
126	坏身	石室埋土・開口部前面埋土	口径　9.4 受部径　11.2 器高　2.7	立ち上がりは短く内傾した後，屈曲し，内上方にのびる。端部は尖り気味に収める。受部は直線的に外上方にのび，端部は丸く収める。体部は直線的で，底部は平坦である。	内面底部：ナデ 内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り未調整	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。外面一部に自然釉かかる。受部の一部に焼成時に重なった器の剥離片が残る。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
127	坏身	玄室床面上面	口径　9.0 受部径　10.9 器高　3.6	立ち上がりは短く内傾し，内上方へのびる。端部は尖り気味に収める。受部は外反気味に外上方にのび，端部は尖り気味に収める。体部は直線的で，底部は平坦である。	内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り後一部ナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面 - 灰白色，一部灰オリーブ色 内面 - 灰白色 外面一部に自然釉かかる。ロクロ右回転。焼成時に大きく歪む。100 とセットと考えられる。
128	坏身	開口部前面埋土	口径　9.0 受部径　10.9 器高　2.9	立ち上がりは短く内傾した後，わずかに屈曲し，内上方へのびる。端部は尖り気味に収める。受部は外反気味に外上方にのび，端部は丸く収める。体部は直線的で，底部は平坦である。	内面から体部：ロクロ回転によるナデ 底部：ヘラ切り未調整	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。
129	高坏	羨道床面下面埋土・開口部前面	口径　9.2 底径　7.8 器高　8.2	口縁部は屈曲させて直線的に外上方にのび，端部は尖り気味に収める。体部は内湾しつつ，脚部に至る。脚部は断面「ハ」の字状を呈し，端部に至る直前で強く外湾しつつ横方向へのび，さらに下方に屈曲させて外湾しつつ垂下する。端部は尖り気味に収める。	坏部内面：底部ナデ，体部以上ロクロ回転によるナデ 坏部外面：ロクロ回転によるナデ，脚部接合後ロクロ回転によるナデ，外面屈曲点直上に 1 条の凹線をめぐらす 脚部外面・内面下半：ロクロ回転によるナデ 脚部内面上半：ナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰色 外面脚部の一部にわずかに自然釉かかる。
130	高坏	開口部前面	口径　11.9 底径　9.0 器高　8.5	口縁部はわずかに屈曲させて直線的に外上方にのび，端部は尖り気味に収める。体部は緩やかなカーブを描いて，脚部に至る。脚部は断面「ハ」の字状を呈し，端部に至る直前で強く外湾しつつ横方向へのび，さらに外下方に屈曲させて外湾しつつのびる。端部は尖り気味に収める。	坏部：ロクロ回転によるナデ，脚部接合後ロクロ回転によるナデ 脚部：ロクロ回転によるナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：灰黄色 全体に磨耗が著しい。
131	高坏	開口部前面	口径　12.8 底径　9.7 器高　9.7	体部から口縁部へかけて緩やかにカーブを描きながら外上方にのび，端部は丸く収める。坏部の底部は平坦気味で，直線的に脚部に至る。脚部は断面「ハ」の字状を呈し，端部に至る直前で強く外湾しつつ横方向へのび，さらに外下方に屈曲させて外湾しつつのびる。端部は尖り気味に収める。	坏部内面：ロクロ回転によるナデ 坏部外面：口縁部から体部ロクロ回転によるナデ，底部，脚部接合後ロクロ回転によるナデ，外面坏部中位に 1 条の凹線をめぐらす 脚部内外面：ロクロ回転によるナデ	胎土：精緻 焼成：軟調 色調：灰黄色，灰白色 全体に磨耗が著しい。

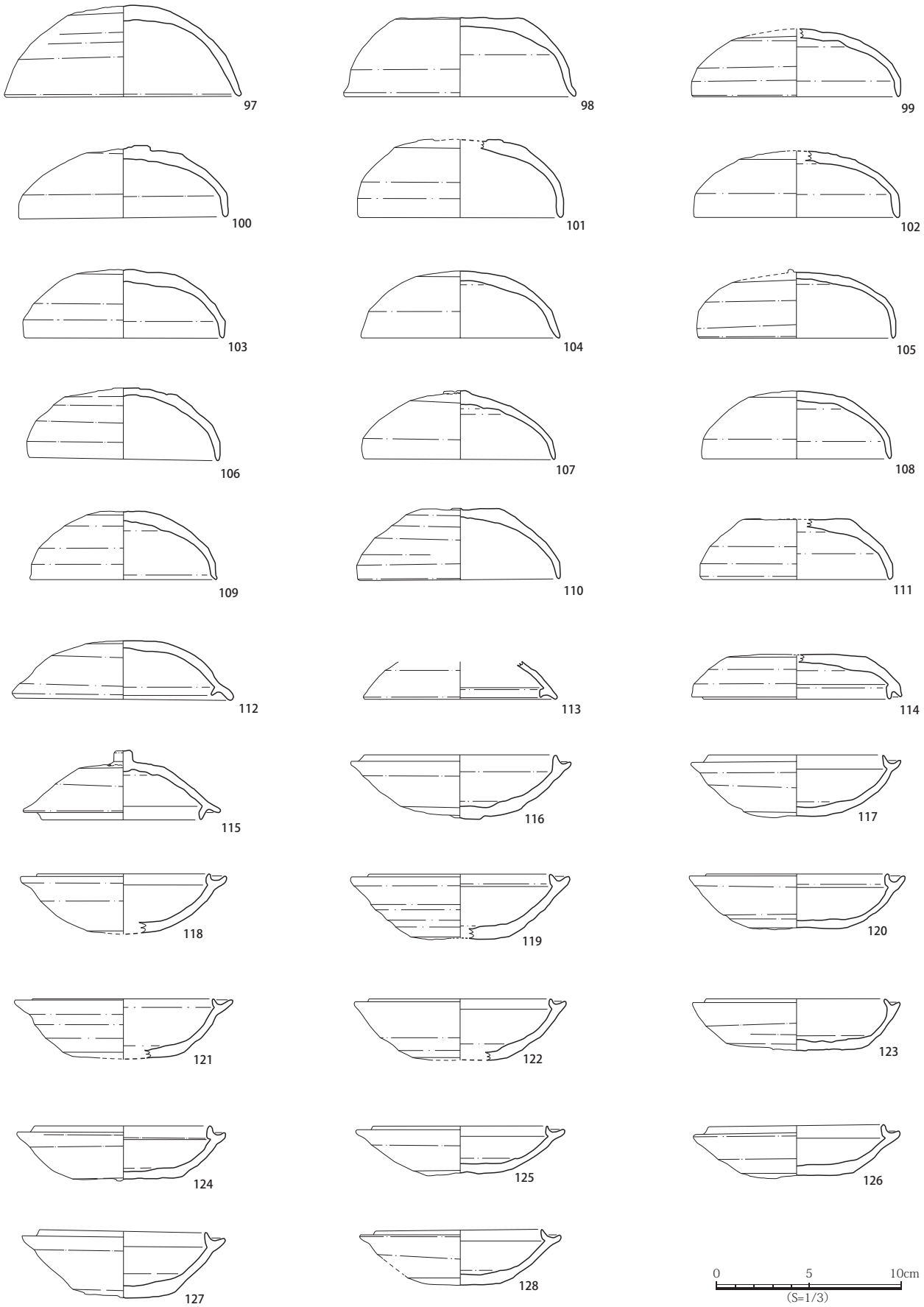
番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
132	蓋（器種不明）	開口部前面	口径　9.6 器高　2.7	天井部は平坦気味で緩やかなカーブを描いて口縁部に至る。口縁部はわずかに屈曲させて外下方にのびる。端部は尖り気味に収める。	天井部：ヘラ切り後一部ナデ 口縁部・内面：ロクロ回転によるナデ 内面天井部：ロクロ回転によるナデの後一部ナデ	胎土：0.5 ～ 1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：灰色 ロクロ右回転。
133	台付長頸壺	玄室床面上面・羨道埋土・開口部前面	胴部最大径　[16.4] 底径　9.7	口頸部は外湾して外上方にのびる。頸部から肩部までは緩やかに下り，体部は扁平な算盤球形を呈する。台部は断面「ハ」の字状を呈し，端部は強く内湾する。	口頸部：ロクロ回転によるナデ，口頸部接合後ナデ，外面中位に２条の凹線をめぐらす 体部外面：肩部付近までロクロ回転によるナデ，下部はロクロ回転によるカキ目，肩部には２条の凹線をめぐらす，底部は台貼付後ロクロ回転によるナデ 体部内面：ロクロ回転によるナデ，底部はナデ	胎土：2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 灰色，青灰色，一部オリーブ黒 内面 - 灰色，青灰色
134	はそう	玄室床面上面	口径　9.6 胴部最大径　9.5 器高　11.4	口頸部は細い基部からゆるやかに外湾気味に外上方にのび，上半部で大きくラッパ状に開く。端部は尖り気味に収める。頸部から肩部までは緩やかに下り，体部は扁平な球形を呈する。体部の最大径を測る箇所に外面上方から内面下方に向けて１箇所穿孔を施す。	口頸部：ロクロ回転によるナデ，口頸部接合後ナデ，外面中位に１条の凹線をめぐらす 体部外面：肩部付近までロクロ回転によるナデ，下部から底部はロクロ回転によるヘラケズリ後ナデ，肩部には１条の凹線をめぐらす 体部内面：ほぼ完形のため観察不能	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：灰白色 ロクロ右回転。
135	提瓶	開口部前面	胴部最大径　[17.0]	体部は扁平な球形を呈する。両肩にアーチ状の把手がつく。	体部外面：ロクロ回転によるナデの後，前面粘土円板貼付後ナデ，その後，前面，後面ともカキ目を施す 体部内面：後面ナデ，前面粘土円板指ナデ，その他はロクロ回転によるナデ，粘土帯積み上げ時のナデによる指頭圧痕と接合痕が残る	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 灰白色 内面 - 灰色
136	横瓶	調査区北東側傾斜面	口径　[10.3] 胴部最大径　[34.6] 器高　[24.6]	口頸部は外反し，外上方へのびる。端部は上方に肥厚し，平らに収める。体部は俵形を呈する。	口頸部：ロクロ回転によるナデ，口頸部接合後ナデ 体部外面：叩き成形の後，粘土円板貼付後ナデ，その後全面にカキ目を施す 体部内面：叩き成形による青海波文と同心円文残る，粘土円板部指ナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	調整・成形	備考
137	横瓶	羨道床面下面・開口部前面	口径　9.2 器高　20.5	口頸部は外反し，外上方へのびる。端部に至る直前で屈曲し，さらに外上方へのびる。端部は丸く収める。体部は俵形を呈する。	口頸部：ロクロ回転によるナデ，口頸部接合後ナデ 体部外面：叩き成形の後全面にカキ目を施す 体部内面：叩き成形による青海波文と同心円文残る	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰色
138	坏（土師器）	墳丘盛土・周溝埋土	口径　[10.5] 器高　3.3	底部から口縁部まで緩やかにカーブを描いて外上方に立ち上がる。端部は尖り気味に収める。底部は丸みを帯びるが平坦である。	内面：ナデ 口縁部：横方向のナデ 体部外面から底部：ナデ 内面体部から底部にかけて放射状暗文を一段施す	胎土：精緻 焼成：良好 色調：橙色

第６表　上ヶ原第 34 号古墳出土金属器観察表

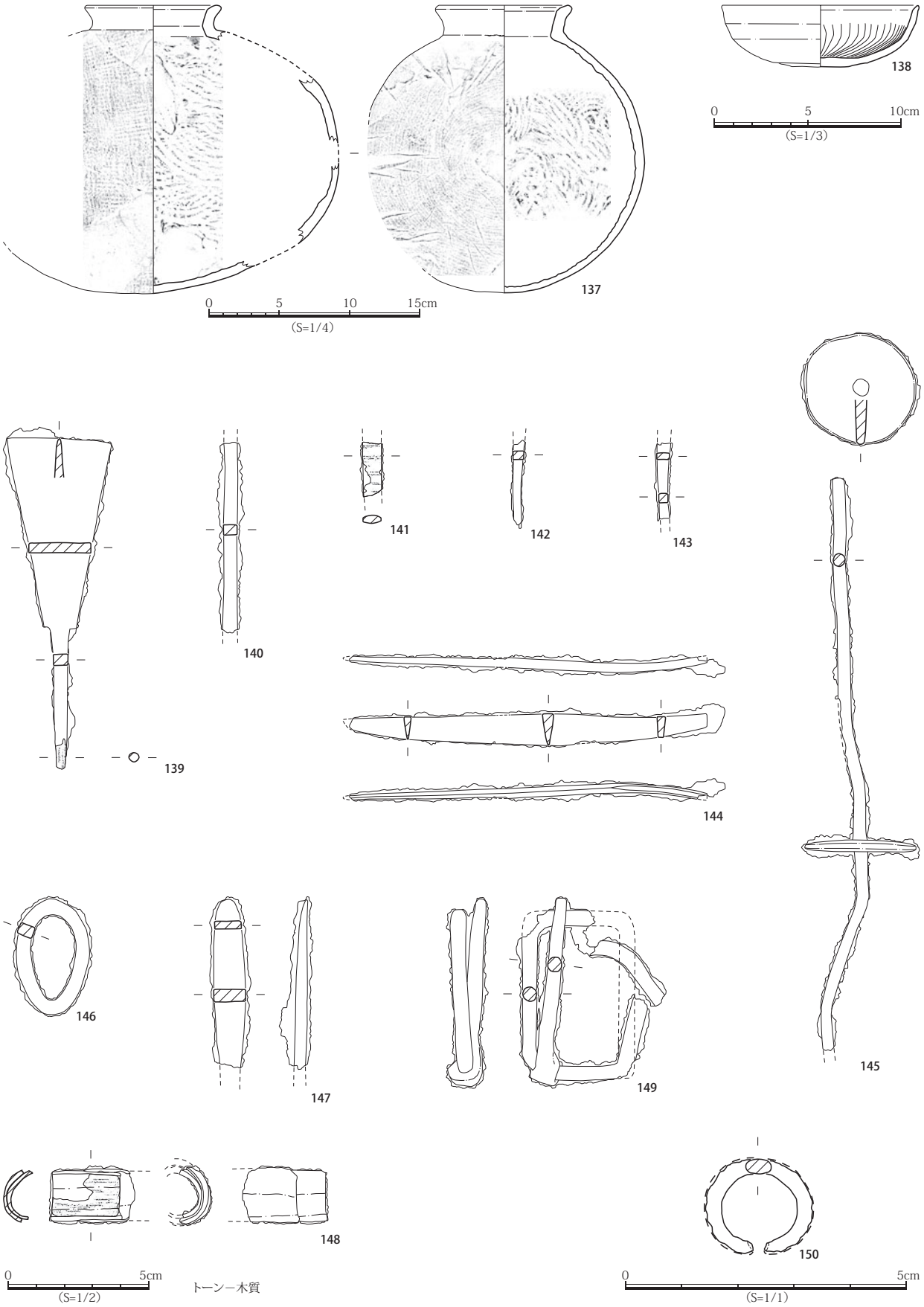
（[　]：残存値）

番号	種別	出土位置	計測数値（cm，g）				備考
			長さ	最大幅	断面厚	重量	
139	鉄鏃	玄室床面上面	鏃身部　6.8 茎部　4.0	鏃身部　3.6 茎部　0.7	鏃身部　0.4 茎部　0.4	34.9	方頭斧箭式鏃 鏃身部断面形状－長方形　茎部断面形状－方形 茎部先端断面形状－円形 茎部先端部に木質がわずかに残る。
140	用途不明鉄製品	羨道床面下面	[6.8]	0.5	0.35	6.8	断面形状－長方形 両端が欠損している。
141	用途不明鉄製品	石室埋土	[1.9]	0.6	0.3	0.8	断面形状－わずかにレンズ状になる長方形 両端が欠損している。全面に木質残存。
142	用途不明鉄製品	石室埋土	[3.0]	0.4	0.3	1.1	鏃の茎部？ 断面形状－方形 一端が欠損している。
143	用途不明鉄製品	石室埋土	[2.7]	0.5	0.35	1.4	断面形状－方形 両端が欠損している。
144	刀子	開口部前面	刃部　[9.3] 茎部　3.4	刃部　1.1 茎部　0.9	刃部　0.4 茎部　0.3	9.7	なで肩関を持つ。刃の先端部が欠損している。
145	鉄製紡錘車	開口部前面	[20.3]	紡輪　4.0	紡茎　0.4 紡輪　0.4	35.0	紡茎断面形状－円形　紡輪断面形状－くさび形 紡茎，紡輪ともに一部欠損している。
146	鍔	開口部前面埋土	4.1	0.55 全体　2.6	0.4	11.0	喰出鍔 断面形状－長方形　全体形状－倒卵形
147	用途不明鉄製品	開口部前面	[6.0]	1.1	0.45	14.7	鑿？ 断面形状－長方形　先端部－くさび形 身部が欠損している。
148	用途不明鉄製品	開口部前面埋土	[2.0]	[3.0]	0.2	5.2	湾曲する２枚の薄い鉄片が重なっている。欠損しているが本来は筒状と想定される。内面に木質残存。
149	帯金具	墳丘盛土	刺金　6.6 輪金　6.1	刺金　0.9 輪金　4.0	0.5	31.2	鉸具？ 断面形状－円形 一部折れ曲がる。刺金は短辺に巻かれる。
150	耳環	開口部前面	1.6	1.8	0.5	3.9	断面形状－長円形 銅芯の外側は劣化が激しい。内側に金メッキ残存。



第 36 図　出土遺物実測図 (10)（S=1/3）

第 37 図　出土遺物実測図 (11)（S=1/3，136 のみ S=1/4）



第 38 図　出土遺物実測図 (12)（S=1/2，137 - S=1/4，138 - S=1/3，150 - S=1/1）

Ⅳ　まとめ

1　上ヶ原遺跡

集落の変遷及び構成について

上ヶ原遺跡では，集落の遺構として，竪穴住居跡６軒，テラス状遺構５か所，土坑３基などを確認した。これらの遺構は，出土遺物の特徴から弥生時代終末から古墳時代前期にわたり営まれていると想定された。ここで，それぞれの遺構の出土遺物の特徴によって遺構を時期別に提示してみたい。また，竪穴住居跡の規模についても，一辺が 3m 前後の比較的小型のものと 5m 前後の比較的大型のものとに大別できるため，あわせて提示する。

・弥生時代後期末葉 (Ⅱ－３期[1]) － 大型住居 SH3
　　その他の遺構 SX1
・古墳時代初頭 (Ⅲ－１期) － 大型住居 SH1・SH5
　　小型住居 SH2
　　その他の遺構 SX2・3・4・5・東側平坦面・SK1・2・3
・古墳時代前期 (Ⅲ－２期) － 小型住居 SH6

SH4 については，時期・規模ともに明確にできなかったが，わずかに出土した土器片からⅡ－３期以降の時期が想定できるため，上記の時期の範囲内に収まるものと想定できる。また，SK2 からはⅡ－３期の土器が出土していること，SK3 は SH1 に先行することから，これらの土坑はⅡ－３期で主に使用されていた可能性がある。

また，集落に関わる遺物は，埋土中も含めて，Ⅱ－３期からⅢ－２期までの時期のものが出土していることから，集落の継続時期は，弥生時代終末から古墳時代前期であると想定される。

各時期の住居軒数はⅢ－１期が３軒と最大で，その前後の時期がそれぞれ１軒ずつと数が少ないため，Ⅲ－１期を中心に営まれた集落であると想定される。

ここで遺跡周辺の地形を見ると，遺跡のある尾根は，調査範囲の南側にも緩やかな傾斜で続いている。この尾根には，本遺跡の中央平坦面が継続して続くものと考えられる。尾根は，遺跡から約 30m 南側で団地によって切られているが，本来，さらに続いていたことは，昭和 10 年発行の地形図 (第２図) から読み取れる。また，SH3・4，尾根中腹の SX5 については，調査範囲外へ継続している。これらのことから，集落がさらに南側へ続いていたことが想定できる。なお，東側平坦面の北側も調査範囲外へ続くが，現存する地形では遺跡北側は急傾斜面となるため，集落は調査範囲がほぼ北限であり，平坦面の北側は集落外に通じる通路であったと想定される。現存地形では，今回の調査範囲の少なくとも倍以上の面積で南側に緩やかな傾斜面が続いており，各時期の住居軒数も倍程度，最大時期で４・５軒程度を想定したい。なお，集落のある尾根から西側に約 100m 離れた地点には帆待川が流れており，そこから下流に沿って扇状地が形成され，また東側に約 30 m 離れた地点は，現在，水は流れていないが谷筋になっており，側溝を経て帆待川へと合流している。

集落では，これらの谷筋沿いに谷水田を形成して生活基盤としたものと想定される。

また，遺跡の南側も含めて沖積平野までの傾斜面の大半は，現在，団地となっている。この団地が造成される際に，広島県立可部高等学校史学研究部によって，弥生土器・石鏃・石斧などが採集されている[2)]。口縁部や底部のみで，時期を特定しにくいが，少なくともⅠ期からⅢ－１期までのものと考えられる土器が継続的に見られる。また山陰系の大木権現山式土器[3)]と並行する時期のものと考えられる土器も見られる。これらの土器は，出土位置から第２図における本遺跡周辺の帆待川東岸の３つの尾根のうち，中央の最も幅が広い尾根筋周辺で出土したものと想定され，この尾根筋を中心に，弥生時代後期から古墳時代初頭までの時期に集落が存在していた可能性が考えられる。その場合，本遺跡の集落は，そこから派生・分村したものである可能性もあろう。

ここで，本遺跡の集落を広島湾岸の調査事例に照らして考察してみたい。本遺跡の集落は，想定される集落の継続部分を含めて，同時期に最大４・５軒程度の住居で構成され，それなりの規模ではあるが，弥生時代終末から古墳時代前期までの比較的短期間に営まれたものである。また，集落は丘陵上に立地し，帆待川などが形成する小扇状地や谷間の狭い平地を農業用地としたことが想定されることや，集落の継続時期が古墳時代前期で終息することなど，広島湾岸の弥生時代後期の集落の様相と同様の傾向を示していることが明らかになった。とはいえ，可部地区周辺では調査事例が少なく，弥生時代後期を通じて存続する拠点集落の確認も含め，今後の調査成果を期待したい。

2　上ヶ原第 34 号古墳

(1)　古墳の立地と位置付け

上ヶ原第 34 号古墳は，上ヶ原古墳群のうち，D 支群と呼ばれる支群に含まれている。D 支群は，帆待川東岸の３つの尾根のうち，最も西側の尾根筋に沿って，最南の第 20 号古墳から第 34 号古墳までおおむね南北に９基並んでいる。現存するのは当古墳の外，第 26・27 号古墳のみで，第 27 号古墳は第 34 号古墳の南西側に隣接する。第 26・27 号古墳は尾根頂部から緩やかに下る緩斜面上に位置するが，本古墳は，第 27 号古墳の北西側の緩やかな緩斜面ではなく，比較的急斜面の北東側にわざわざ築造されている。また，本古墳は石室の軸を等高線に直交させているが，平行に近づければ，石室床面の水平が確保しやすく，傾斜を避けられたはずであるが，そうしていない。これらのことと，現状地形の観察から第 26・27 号古墳の開口方向も本古墳とほぼ同方向と想定されることから，幹道もしくは枝道ともいうべき墓道[4)]がそれぞれの古墳の開口部からの延長線上，すなわち D 支群のある尾根筋の東側の谷筋に沿って形成されていたと考えられる。つまり，第 34 号古墳の選地にあたっては，D 支群の同一集団 (家族) 内での墓域や墓道の設定があり，その規制が働いたものと想定される。

上ヶ原古墳群では，現在，古墳の大半が消滅し，正確な位置・周辺地形が不明であるため，墓道の想定が困難である。ただ A ～ C 支群は，帆待川東岸の３つの尾根のうち中央の最も幅広の尾根やその延長上に広がる扇状地を中心に分布しており，最も西の尾根筋に沿って分布する D 支群と距離的にも景観的にも若干の隔たりがある。根道・幹道がどこを通るにせよ，D 支群に至る道は，

集落から最奥に位置することになろう。A～C支群とD支群については，同一家族内での優勢な戸主家族と劣勢な家族という関係や同一集落内での別家族といった関係の可能性も考えられるのではないだろうか。

D支群も含め上ヶ原古墳群は，記録された時点で既に墳丘・石室の残存状況が悪く，古墳や石室の規模，副葬品の質・量を単純には比較できない。墳丘・石室の破壊や副葬品の盗掘等を考慮に入れれば，現在，記録に残る数値で同条件の比較が可能と考えられるのが石室の幅である。これを比較すると上ヶ原第20号古墳は1.4m，第21号古墳は1.1m，第22号古墳は1.6mであり，本古墳は玄室の最大箇所で1.05mである。D支群の残存データが少ないため，可部古墳群全体で見ると，石室の長さ7m以上，奥壁もしくは中央部の幅1.5m以上のものは，上ヶ原第2・7号古墳，原迫第1号古墳，給人原第1･2号古墳と数えるほどしかない。全般に，幅1m前後のものが多く見られ，本古墳は小規模ではあるが，可部古墳群では，むしろ平均的な規模と言ってもよい。また，本古墳の副葬品は，本古墳が全面発掘であることをふまえると単純比較はできないが，石室規模の大きなものと比較しても遜色はない。これらをふまえると，先述したような同一家族内での優勢な戸主家族と劣勢な家族もしくは同一集落内での別家族といった関係があったとしても，大きな階層差ではなく，緩やかなものであったと考えられる。

(2)　古墳の時期と追葬回数の推定

本古墳の時期，追葬回数を検討してみたい。

Ⅲ章２－(8)で述べたように，本古墳から出土した須恵器の特徴を見ると，6世紀後葉から7世紀前半のものまでが，継続的に出土している。ただ，出土須恵器中，最古のものにあたる田辺昭三氏による陶邑編年[5]のTK209型式，中村浩氏による陶邑編年[6]のⅡ型式5段階，向田裕始氏による芸備地方における須恵器編年[7]のⅡ型式2段階にあたるものは，坏蓋では2点しかなく，大半は田辺編年のTK217型式，中村編年のⅡ型式6段階，向田編年のⅡ型式3段階にあたるものである。最新のものは，田辺編年のTK217型式，中村編年のⅢ型式1段階，向田編年のⅢ型式1段階にあたるが，坏蓋(115)が床面上面の羨道埋土から，高坏(129)と台付長頸壺(133)が破片の状態で開口部前面と石室内から分かれて出土しており，追葬時に片づけられた可能性も考えられる。また，最終追葬面と考えられる敷石面で原位置を保っており最終追葬時のものと考えられる坏蓋(100)・坏身(127)は田辺編年のTK217型式，中村編年のⅡ型式6段階，向田編年のⅡ型式3段階にあたるものと想定され，型式だけで見れば最新のものではない。安間拓巳氏は7世紀を中心とする広島県の土器の年代観を検証され，坏蓋(115)のようにつまみの付く坏G類[8]だけが使用される時期は無く，坏蓋(100)・坏身(127)のような坏H類と併存し，坏H類は7世紀第Ⅲ四半期後半～第Ⅳ四半期まで存在したと想定されている[9]。また，本古墳の墳丘上や周溝埋土からは，いわゆる「畿内産土師器」の坏(138)が出土しており，その特徴から飛鳥Ⅱ期[10]のものと想定される。

これらのことから，本古墳の埋葬期間は6世紀第4四半期でも末葉頃から7世紀第2四半期頃までを中心とすると想定される。

また，可部古墳群では，特に給人原古墳群の調査が広島県立可部高等学校史学研究部によってな

され，Ⅱ章でも述べたように石室の特徴や出土遺物によって時期編年が考えられている[11]。それに従えば，本古墳は，石室の幅は狭いものの，玄室と羨道でそれほど変わらず，傾斜面に沿った方向で石室を構築しているものの，傾斜の低い方の北側壁側に幅広に，傾斜の高い方の南側壁側に幅狭に角礫の石積がなされており，給人原古墳群B支群の特徴を持つ古墳といえる。B支群は6世紀末～7世紀の築造と想定されており，先述の6世紀第4四半期末葉頃という埋葬期間の開始時期と矛盾しない。

ここで，床面と出土遺物から追葬回数を推定してみたい。まず床面を見ると，上下2面が確認されており，少なくとも1回の追葬が想定される。床面下面出土の坏蓋(111)の特徴は，田辺編年のTK217型式，中村編年のⅡ型式6段階，向田編年のⅡ型式3段階にあたり，出土須恵器中最古の田辺編年のTK209型式，中村編年のⅡ型式5段階，向田編年のⅡ型式2段階にあたるものを最初の埋葬時のものとするなら，この下面の段階で1回の追葬が想定される。また床面上面を見ると，台付長頸壺(133)が玄室内床面と開口部前面とに分かれて出土しており，盗掘時の攪乱の可能性も否定できないものの，追葬時に片づけられたとも考えられる。その場合，上面で1回の追葬が考えられる。これらのことから少なくとも2回以上，上面段階での追葬があったとするなら3回以上の追葬が行われたと想定される。

(3)　鉄製紡錘車について

本古墳の開口部前面からは鉄製紡錘車が出土した。出土状況から本古墳の副葬品として収められていたものが追葬時にかき出されたものと考えられる。鉄製紡錘車については，東村純子氏による考察[12]がある。それによれば，6世紀後半に出現した鉄製紡錘車は，7世紀前半に近畿・山陽・山陰・九州北部地方で流通し始め，この7世紀前半のものは一定の規格をもつとされ，出土する場所としてはミヤケに関わる遺跡，貢納を前提とした瓦や須恵器，鉄器の生産に関わる遺跡を挙げられている。また，7世紀中頃には，現物貨幣としての価値をもつ常布の原形となる布が存在していたこともふまえ，ミヤケを拠点とした麻糸・布生産によって，後の調庸制に対応する紡織体制の端緒が開かれたと想定されている。さらに，東村氏は7世紀前半のミヤケを拠点とする布生産においては，製糸から製織までの紡織工程を一連に担ったと想定されている。

このことに照らして，本古墳出土の鉄製紡錘車を見ると，紡輪の直径は4㎝，厚さ0.4㎝であり，東村氏が法量の画一化として指摘する径4～5㎝，厚さ0.3～0.5㎝の範囲内に収まり，一定の規格をもつ鉄製紡錘車の一つと考えられる。

ここで広島県内の古代の鉄製紡錘車の出土例を見ると，三次市三良坂町灰塚の道ヶ曽根遺跡[13]において，7世紀後半の時期が想定されている竪穴住居跡SB96で出土している。これについても，紡輪の直径は4.4㎝，厚さ0.4㎝であり，一定の規格をもつ鉄製紡錘車と考えられる。道ヶ曽根遺跡は，6世紀末から8世紀前葉にかけての集落遺跡であり，鍛冶炉が確認され，鉄製品や鉄滓が出土している。また，円面硯7点が出土したことなどもふまえ，律令体制下に組み込まれた鉄生産に携わる拠点的集落と想定されている。他には，同じく三良坂町灰塚の杉谷B地点遺跡[14]の調査区内からも出土している。杉谷B地点遺跡は，弥生時代中期の集落跡と古墳時代後期から古代に

かけての集落跡が確認された遺跡で，後期の集落跡については，鉄滓が多く出土しており，鉄生産との関わりが想定されている。杉谷B地点遺跡出土の紡錘車は，紡輪の直径が5㎝，厚さ0.2㎝であり，先述の規格と比較すると厚さが薄い。東村氏によれば，紡輪は8世紀代から厚みを減じ，9世紀代には0.2～0.3㎝前後のものが大半を占めるとのことで，杉谷B地点遺跡出土のものについても，そういったものかもしれない。いずれにしても，二遺跡とも鉄生産と関わりを持つ集落跡で，また相互に関係しあっていたと考えられており，鉄生産を通しての畿内政権との強いつながりを感じさせる。

では，本古墳のある可部地区はといえば，現在のところ，須恵器や鉄器などの生産を想起させるような遺跡は確認されていない。もちろん，後代にも見られるように山陰や安芸内陸部の産物を集荷し貢納するという形で，「生産」に関わった可能性も考えられるが，東村氏のいうように規格品の鉄製紡錘車に紡織体制の端緒を想定するならば，本古墳を含めたこの地域が，畿内政権と直接につながり，麻糸・布生産を行い，紡織体制に組み込まれていた可能性も考えられる。

(4)　可部古墳群成立の背景について

可部古墳群の成立の背景として，可部地区の沖積平野の開発を想定する説[15]もあるが，古墳群を築いた集団がどの程度，沖積平野を開発し，人口がどれくらいだったのかを物語る資料が無いため，このことについては断定できない。ただ，広島湾岸では，古墳時代初頭に，沖積平野やその縁辺の開発が進行したと考えられているが，沖積平野の面積では可部よりも広い太田川下流域に群集墳が成立しなかったことから，単純に沖積平野の開発による農業生産力のみが可部古墳群築造の主要因となったとは言い難い。

では，可部古墳群成立の主要因として何が挙げられるかといえば，政治的な要因，すなわち畿内政権との関係が注目されている。福谷昭二氏は，屯倉の成立をその契機とし，日本書紀に記された「過戸廬城部屯倉」[16]の比定地について，可部も候補地に想定できるとされている[17]。「過戸廬城部屯倉」は安芸の国域で文献に現れる唯一の屯倉であり，比定地は，可部以外にも広島市安佐南区祇園(旧祇園町字帆立)[18]，同佐伯区三宅，安芸郡府中町[19]などの諸説がある。祇園には石帯が出土した権地古墓[20]が，三宅には官衙跡とされる中垣内遺跡[21]が，府中町は国府の比定地と考えられており，駅家跡とされる下岡田遺跡[22]が存在する。その他にも，安佐北区白木町三田の地名が御田から，三田郷内の村名の小宮家が屯倉から転じたという説[23]もある。6世紀の社会背景もふまえると，安芸の屯倉は文献に残る「過戸廬城部屯倉」のみではなく，複数，設置されていった可能性も考えられよう。安間拓巳氏は，可部古墳群の6世紀後半～末段階の古墳の副葬品に鉄刀や馬具などがあることをふまえ，地方支配体制下の兵制に関連した軍事勢力として畿内勢力と関わりをもったと想定されている。また，給人原第8・9号古墳からの暗文土師器の出土については，そのような畿内との関わりの中で新しい秩序や文化を象徴する暗文土師器を所有するようになったためと想定されている[24]。

これらの考え方をふまえて，今回の調査を見ると，本古墳からは，先述のようにミヤケとの関わりが考えられている鉄製紡錘車が出土し，暗文土師器も出土している。また，暗文土師器について

は，可部高等学校の所蔵品を実見する機会を得，報告書で暗文土師器として報告されている給人原第 8･9 号古墳の 2 点の外，上ヶ原第 1 号古墳出土の 1 点[25]，出土古墳が不明の 1 点[26]を確認した。これらの事実は，暗文土師器が地元産のものであったとしても，畿内文化と深く関係した遺物であり，その受容が可部古墳群の被葬者間により広く浸透していたことの証左となろう。

以上のことだけでは，広島市域においても，この可部地区に比較的規模の大きな群集墳が形成されるに至った契機がどのようなものであったかは明言し難いが，畿内政権と関係の深い人々によって造営されており，その「関係」とは，鉄製紡錘車の出土から見れば屯倉の設置との関連も考え得ることを考察してきた。いずれにせよ，今回の調査は，従来から言われてきた畿内政権との関係を可部古墳群成立の要因とする考え方を追認する結果となったといえよう。

注

1）若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌Ⅰ』財団法人広島市文化財団　2002 年
以下，後期土器編年は若島氏の編年による。
2）広島県立可部高等学校『はにわ　第 14 号』1975 年
3）高下洋一「大木権現山式土器」『日本土器事典』雄山閣　1996 年
4）水野正好「群集墳の構造と性格」『古代史発掘 6 古墳と国家の成立ち』講談社　1975 年
水野氏は，墓道の種類として，「根道」(集落から古墳群にたどりつく道)・「幹道」(根道からわかれ，古墳群の中を貫く道)・「枝道」(幹道からわかれ，いくつかの古墳を連繋する道)・「茎道」(枝道からわかれ，横穴式石室墳にいたる道) の 4 種類を想定されている。上ヶ原古墳群 D 支群の場合，現状では，幹道・枝道の確認が困難なため，併記している。
5）田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981 年
以下，田辺編年はこれによる。
6）中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1991 年
以下，中村編年はこれによる。
7）向田裕始「芸備地方における須恵器生産 (1) －古墳時代を中心として－」『芸備古墳文化論考 (芸備第 15 集)』芸備友の会　1985 年
以下，向田編年はこれによる。
8）松村恵司「近畿地方の 7 世紀前半の土器」『日本土器事典』雄山閣　1996 年
以下，土器の器種名はこれによる。
9）安間拓巳「広島県における古代の土器の様相－ 7 世紀を中心として－」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会　2002 年
10) 8 に同じ。
11) 広島県立可部高等学校『はにわ　第 13 号』1974 年
12) 東村純子「律令国家形成期における鉄製紡錘車の導入と紡織体制」『洛北史学 第 7 号』洛北史学会　2005 年
13) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (Ⅱ)』1998 年
14) 三良坂町教育委員会『杉谷遺跡群』2003 年
15) 福谷昭二「歴史のあけぼの」『可部町史』広島市役所　1976 年
16)「安閑天皇元年閏十二月条」『日本書紀』720 年
17) 15 に同じ。
18) 福尾猛市郎「古代国家の成立」『広島県史　原始 古代　通史Ⅰ』広島県　1980 年
19) 15 に同じ。
20) 広島市教育委員会『九郎杖遺跡 権地遺跡発掘調査報告』1984 年

21) 広島市教育委員会『中垣内遺跡第 2 次発掘調査概要』1987 年
22) 府中町『安芸府中町史』1979 年
23) 永井彌六「三田郷」『白木町史』広島市役所　1980 年
24) 安間拓巳「暗文土師器出土遺跡の研究－安芸・備後地方を中心として－」『内海文化研究紀要　第 30 号』広島大学大学院文学研究科内海文化研究施設　2002 年
25) 放射状暗文を模したヘラ描きを施したもので，器種は坏ＣⅢ，時期は飛鳥Ⅱ期のものと想定される。なお，実見はできなかったが，『はにわ 第 9 号』の記述から，上ヶ原第 2 号古墳からも，放射状暗文を施した土師器 (器種は坏ＣⅢ，時期は飛鳥Ⅱ期のものと想定される) が出土していると考えられる。
広島県立可部高等学校『はにわ　第 9 号』1970 年
26) 内面に二段の放射状暗文を施している。完形ではない。

≪附編≫

上ヶ原遺跡出土土器および上ヶ原第 34 号古墳出土須恵器の胎土材料

藤根 久・米田恭子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の特徴から、これら砂粒物の由来する地域がいずこであるかを推定することは容易でない。

土器胎土は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質な粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村，2001）。

一方、混和材としての砂粒は、これら粘土採取の際に粘土層の上下層に分布する砂層などを採取したことが想定される。東海地域では、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られており、これら 3 分の 1 程度の土器では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれるが（藤根，1996；車崎ほか，1996）、これらの火山ガラスは、粘土採取の際に上下層に分布したと思われるテフラ層由来と考えられる。このように、胎土中の混和材は、粘土採取地層中の砂の特徴である可能性が高く、現河川砂とは大きく異なることから、現在の河川砂との比較では問題が大きい。こうしたことから、段丘堆積物の砂層などとの比較検討が必要と思われる。土器胎土については、第一に土器に使用した粘土や混和材がどのような特徴を持つかを十分理解することが重要であり、こうした特徴を持つと思われる粘土層や砂層などと比較検討すべきと考える。

上ヶ原遺跡は、広島市安佐北区可部町大字中野地内に所在する弥生時代後期～古墳時代前期にかけての集落跡である。また、上ヶ原第 34 号古墳は、同地内に所在する古墳時代後期の横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。

ここでは、上ヶ原遺跡の弥生時代終末の土器および古墳時代初頭の土師器、上ヶ原第 34 号古墳の古墳時代後期の須恵器について、土器の胎土材料の粘土および砂粒の特徴について調べた。

2. 試料と方法

試料は、上ヶ原遺跡の弥生時代終末の土器 1 点、古墳時代初頭の土師器 3 点、上ヶ原第 34 号古墳の古墳時代後期の須恵器 3 点の合計 7 点である（表 1）。

表 1　材料を検討した土器とその詳細

試料№	遺跡	器種	時期	器形	肉眼観察による砂粒組成	胎土の色調
1	上ヶ原遺跡	弥生土器，器種不明	弥生時代終末	在地系	平均 0.5 ～ 2.0mm, 最大 6.0mm	にぶい橙色 (5YR 6/4) ～浅黄色 (2.5Y 7/4)
2		土師器，甕形土器	古墳時代初頭	山陰系	平均 0.5 ～ 1.5mm, 最大 2.0mm	浅黄色 (2.5Y 8/4)
3		土師器，甕形土器	古墳時代初頭	山陰系	平均 1.0 ～ 1.5mm, 最大 4.0mm	橙色 (7.5YR 7/6)
4		土師器，甕形土器	古墳時代初頭	畿内系	平均 0.5 ～ 1.0mm, 最大 2.0mm	にぶい黄橙色 (10YR 6/4)
5	上ヶ原第 34 号古墳	須恵器 , 器種不明	古墳時代後期	-	平均 1.0mm 以下、最大 2.0mm	灰オリーブ色 (7.5Y 5/2)
6		須恵器 , 器種不明		-	砂粒少ない , 最大 0.5mm	灰黄色 (2.5Y 6/2)
7		須恵器 , 器種不明		-	1.0mm 前後 , 最大 1.5mm	灰白色 (5Y 8/1)

これらの土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作成した。

(1) 試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。
(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。
(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ 0.02mm 前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各試料は、偏光顕微鏡を用いて、薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴について観察・記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

［珪藻化石］

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは 10 ～数百 μm 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され､具体的な堆積環境の復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（不明種）とした。なお、各胎土中の珪藻化石は、その詳細を記載した。

［植物珪酸体化石］

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約 10 ～ 50 μm 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状のものなどがあるが、ここでは大型のファン型と棒状のものを対象とした。

［胞子化石］

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径 10 ～ 30 μm 程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積物中で見られるが、土壌中に多く含まれる。

［石英・長石類］

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。

［長石類］

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また､ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などの SiO_2 % の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

［雲母類］

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などの SiO_2 % の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。

［輝石類］

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的に淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO_2 % が少ない深成岩、SiO_2 % が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石 (主に普通輝石) は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主として SiO_2 % が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO_2 % の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

［角閃石類］

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような SiO_2 % が中間的な深成岩や斑れい岩などに産する。

［ガラス質］

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴出物と考えられる。

［複合石英類］

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質 (マトリックス) の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約 0.01mm 未満のものを微細、0.01 ～ 0.05mm のものを小型、0.05 ～ 0.1mm のものを中型、0.1mm 以上のものを大型と分類した。なお、角閃石類などの有色鉱物から構成される粒子は、複合鉱物類（角閃石類など）とした。

［砂岩質・泥岩質］

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約 0.06mm 以上のものを砂岩質とし、約 0.06mm 未満のものを泥岩質とする。

［凝灰岩質］

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山砕屑物などから構成され、非晶質でモザイックな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。

［斑晶質・完晶質］

斑晶質は斑晶 (鉱物の結晶) 状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。

［片岩類］

複合石英類は石英の集合している粒子で、これら粒子が片理状組織を示す場合は片岩類とした。

［不透明・不明］

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

3. 結果

土器胎土中の微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や 0.1mm 前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。なお、表２の微化石類および砂粒の出現頻度は、◎が特に多い、○が多い、△が少ない、空欄は検出されないことを示す。

試料 1：平均粒径 0.25mm ～ 0.6mm（最大粒径 4.5mm）。石英・長石類〉複合石英類（大型）》火山ガラス（バブル型）〉斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、角閃石類、雲母類、斜方輝石、単斜輝石、ジルコン、珪藻化石（陸域指標種群 Hantzschia amphioxys）、植物珪酸体化石（ヨシ属、ネザサ節型、ウシクサ族、不明）。

試料 2：平均粒径 0.15mm ～ 0.5mm（最大粒径 1.6mm）。石英・長石類、火山ガラス（バブル型）〉複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、複合石英類（大型）、ジルコン、単斜輝石、角閃石類、珪藻化石（淡水種 Eunotia biareofera 多い、Eunotia monodon、Eunotia 属多い、Cymbella 属、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石多い（ヨシ属、クマザサ属型、キビ族、不明）。

試料 3：平均粒径 0.2mm ～ 0.5mm（最大粒径 3.6mm）。石英・長石類》火山ガラス（バブル型）、複合石英類（大型）〉カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）、雲母類、角閃石類、単斜輝石、斜長石（双晶）、斜方輝石、胞子化石、骨針化石、植物珪酸体化石多い（ネザサ節、ウシクサ族、ヨシ属、不明）。

試料 4：平均粒径 0.15mm ～ 0.5mm（最大粒径 2.1mm）。雲母類》石英・長石類、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（大型）、火山ガラス（バブル型）、斜長石（双晶）、複合石英類（微細）、斜方輝石、角閃石類、単斜輝石、ジルコン、珪藻化石（淡水種 Diploneis ovalis）骨針化石、植物珪酸体化石（不明）。

試料 5：平均粒径 0.05mm ～ 0.1mm（最大粒径 1.4mm）。石英・長石類》複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、火山ガラス（バブル型）、斜方輝石、ジルコン、雲母類、単斜輝石、骨針化石、植物珪酸体化石多い（不明）、焼成温度がやや高い。

試料 6：平均粒径 0.12mm ～ 0.3mm（最大粒径 0.75mm）。石英・長石類〉火山ガラス（バブル型）、斜長石 (双晶・累帯)、複合石英類（微細）、ジルコン、珪藻化石（淡水種 Eunotia biareofera）、植物珪酸体化石多い（ウシクサ族、不明）。

試料 7：平均粒径 0.15mm ～ 0.4mm（最大粒径 3.5mm）。石英・長石類〉複合石英類（大型）〉複合石英類（微細）、斜長石 (双晶)、火山ガラス（バブル型）、カリ長石（パーサイト）、砂岩質、単

斜輝石、角閃石類、雲母類、ジルコン、骨針化石、植物珪酸体化石多い（ヨシ属、キビ族、不明）。

表２　粘土および砂粒組成の特徴

試料No.	器種	粘土の特徴							砂粒の特徴								鉱物の特徴				植物珪酸体化石	備考
		種類	放散虫化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	ジルコン	角閃石類	輝石類	雲母類		
1	弥生土器，器種不明	その他			△				B		◎					△	△	△	○	○	○	
2	土師器，甕形土器	淡水成			◎	○	△		Bc		○	△				△	△	△	△	△	△	
3	土師器，甕形土器	水　成					△	△	Bc		○	△				△		○	△	△	○	
4	土師器，甕形土器	淡水成			△		△		Bc		○	△				△	○	△	○	◎	△	
5	須恵器，器種不明	水　成					△		(Bc)		△	△				△	△		△	△	○	焼成温度高い
6	須恵器，器種不明	淡水成			△				Cb		△	○				△	○		△		○	焼成温度やや高い
7	須恵器，器種不明	水　成					△		Bc		○	○				△	△	△	△	△	△	

4. 考察

i）微化石類による材料粘土の分類

表３　岩石片の起源と組み合わせ

			第１出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第２出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Ef	Fg	

検討した土器胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が 10 ～数 100μm（実際観察される珪藻化石は大きいもので 150μm 程度）、骨針化石が 10 ～ 100μm 前後である（植物珪酸体化石が 10 ～ 50μm 前後）。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約 3.9μ m 以下、シルトが約 3.9 ～ 62.5μm、砂が 62.5μm ～ 2mm である（地学団体研究会・地学事典編集委員会編，1981）。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれているものの、土器の製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した胎土は、粘土部分に含まれる微化石類の出現により、a) 淡水成粘土を用いた胎土、b) 水成粘土を用いた胎土、c) その他粘土を用いた胎土、に分類された。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。

a) 淡水成粘土を用いた胎土（3 胎土）

これらの土器胎土中には、淡水種珪藻化石が特徴的に含まれていた。特に、試料 No.2 の土師器胎土中には、淡水種 Eunotia biareofera や Eunotia 属が特徴的に多く含まれていた。なお、試料 No.6 の胎土中にも同様の珪藻化石が含まれていた。

b) 水成粘土を用いた胎土（3 胎土）

これらの土器胎土中には、骨針化石が含まれていた。骨針は、海綿動物の骨格の一部であることから、水成環境を指標すると考えられる。

c) その他粘土を用いた胎土（1 胎土）

この試料 No.1 の土器胎土中には、珪藻化石や骨針化石などの微化石類は含まれていなかった。なお、陸域指標種群の Hantzschia amphioxys が検出されているが、土器作りに際して混入した珪藻化石と考えられる。

遺跡周辺は、広島花こう岩類や阿武層群や高田流紋岩類、あるいは中・古生層の玖珂層群（チャートや砂岩など固結した地層）が分布する地域であり（図 1 および図 2）、在地土器の粘土材料としては段丘堆積物中の粘土層など比較的新しい地層粘土が候補になると考えられる。なお、段丘堆積物中の粘土層中には珪藻化石が含まれない場合が多い。

ii）胎土中の砂粒組成による分類

ここで用いた岩石分類群は、構成する鉱物種や岩石片の構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、粘土塊や土器胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（表 2）。岩石の推定は、複合石英類が深成岩類、砂岩質あるいは複合石英類（微細）が堆積岩類、ガラス質がテフラ（火山噴出物）である。さらに、推定した起源岩石は、表 3 の組み合わせに従って分類した。

検討した土器胎土中の岩石組成は、深成岩類を主としたＢ群（1 胎土）、深成岩類を主として堆積岩類を伴うＢｃ群（5 胎土）、堆積岩類を主として深成岩類を伴うＣｂ群（1 胎土）に分類された（表 2）。

iii）胎土材料の特徴

上ヶ原遺跡の弥生時代終末の土器と古墳時代初頭の土師器は、粘土は淡水成粘土、水成粘土、その他粘土に分類され、砂粒組成は、深成岩類を主としたＢ群、深成岩類を主として堆積岩類を伴うＢｃ群に分類された。

一方、上ヶ原第 34 号古墳の古墳時代後期の須恵器は、粘土は淡水成粘土、水成粘土に分類され、砂粒組成は、堆積岩類を主として深成岩類を伴うＣｂ群、深成岩類を主として堆積岩類を伴うＢｃ群に分類された。なお、試料 No.5 および No.6 の須恵器は、高い温度で焼成されたことから、長石類などの鉱物や微化石類が溶融していた。

弥生時代終末の土器胎土は、水成粘土以外の粘土を用いて、深成岩類を主とした砂粒組成を示す。地質図を見ると（図 1）、遺跡周辺は白亜紀～古第三紀の深成岩類が広く分布する地域であることから、この弥生時代終末の土器の材料は、在地材料の可能性が高いと考えられる。

その他の土師器や一部の須恵器では、材料粘土に違いが見られるものの砂粒組成においては深成岩類と堆積岩類あるいはテフラを含む組成であった。

平成 19 年度に広島市安佐北区上町屋地内の山裾に所在するトンガ坊城遺跡から出土した弥生時代の甕の胎土材料と比較した場合、今回の上ヶ原遺跡と同様に、淡水種珪藻化石の Eunotia biareofera

やEunotia属などを特徴的に多く含み、深成岩類を主として堆積岩類を伴うＢｃ群からなる山陰系とされる甕が見られた（藤根ほか，2007）。

上ヶ原遺跡から出土した山陰系の土師器No.2においても同様の特徴が見られ、共通点があることを示す。

5. おわりに

上ヶ原遺跡の弥生時代終末の土器と古墳時代初頭の土師器は、粘土は淡水成粘土、水成粘土、その他粘土に分類され、砂粒組成は、深成岩類を主としたＢ群、深成岩類を主として堆積岩類を伴うＢｃ群に分類された。このうち、弥生時代終末の土器胎土は、砂粒組成において在地的材料の可能性が高いことが指摘された。

また、考古学的に山陰系とされる土器は、隣接するトンガ坊城跡から出土した山陰系とされる土器胎土と共通した特徴を示していることが理解された。

土器胎土の粘土および砂粒物などの材料は、今後該当地域の段丘堆積物などの精査を行うことにより、土器材料に関する実態が明らかになるものと考えている。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42, 2, 73-88.

地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）増補改訂 地学事典，平凡社，1612p.

藤根 久（1998）東海地域（伊勢－三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料．東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会編「第６回東海考古学フォーラム岐阜大会　土器・墓が語る」：108-117.

藤根　久・今村美智子（2001）第３節　土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「波志江中宿遺跡」：262-277，日本道路公団・伊勢崎市・(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 .

藤根 久・米田恭子・中村賢太郎（2007）トンガ坊城跡から出土した弥生土器の胎土材料.「トンガ坊城遺跡・坊主山遺跡・柳遺跡・琴平遺跡 ――般国道 54 号（可部バイパス）建設工事に伴う発掘調査－」（2011）：附編，(財) 広島市未来都市創造財団.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27, 1-20.

車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子（1996）(39) 土器胎土の材料－粘土の起源を中心に－．日本考古学協会第 62 回大会研究発表要旨，153-156.

日本の地質『中国地方』編集委員会編（1991）日本の地質７　中国地方 . 共立出版，290p.

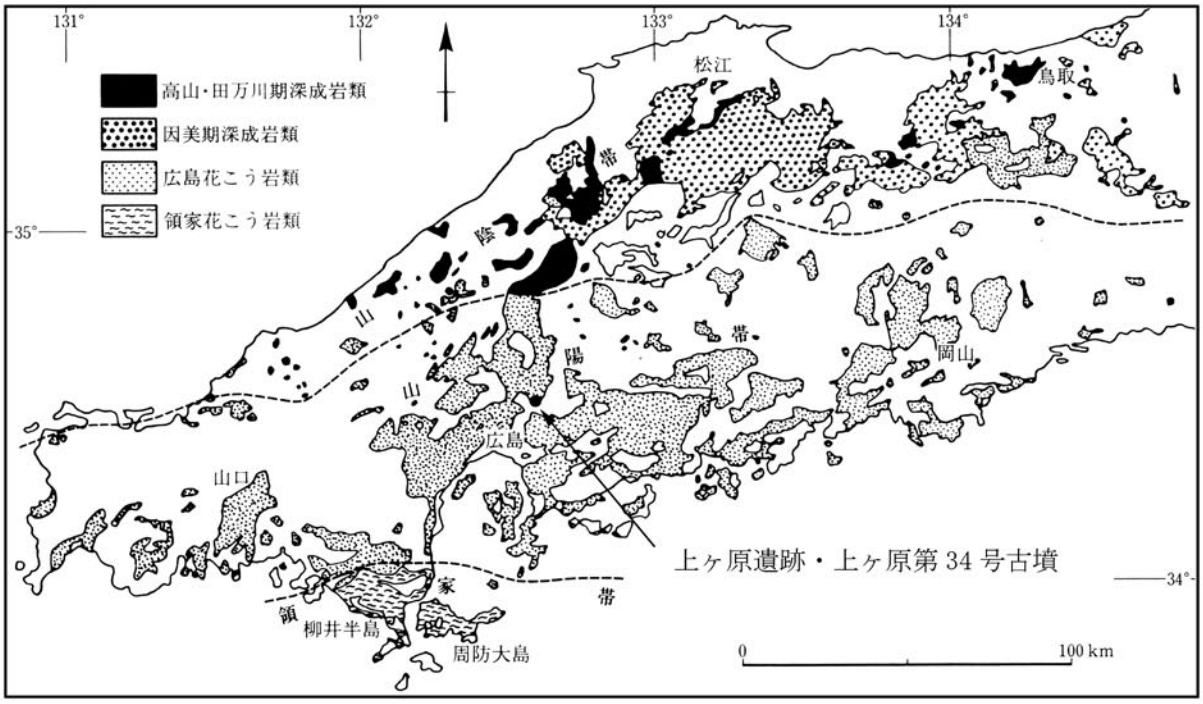


図１　中国地方における白亜紀～古第三紀の深成岩類の分布（日本の地質『中国地方』編集委員会編 ,1991 より引用）

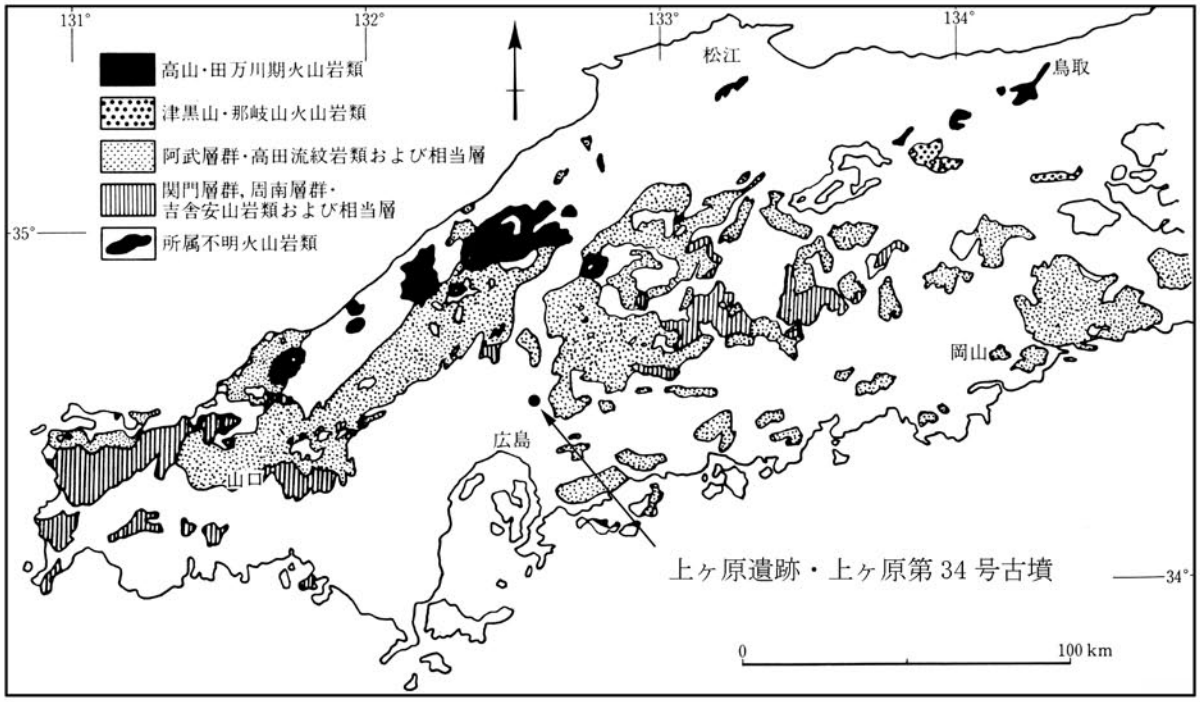
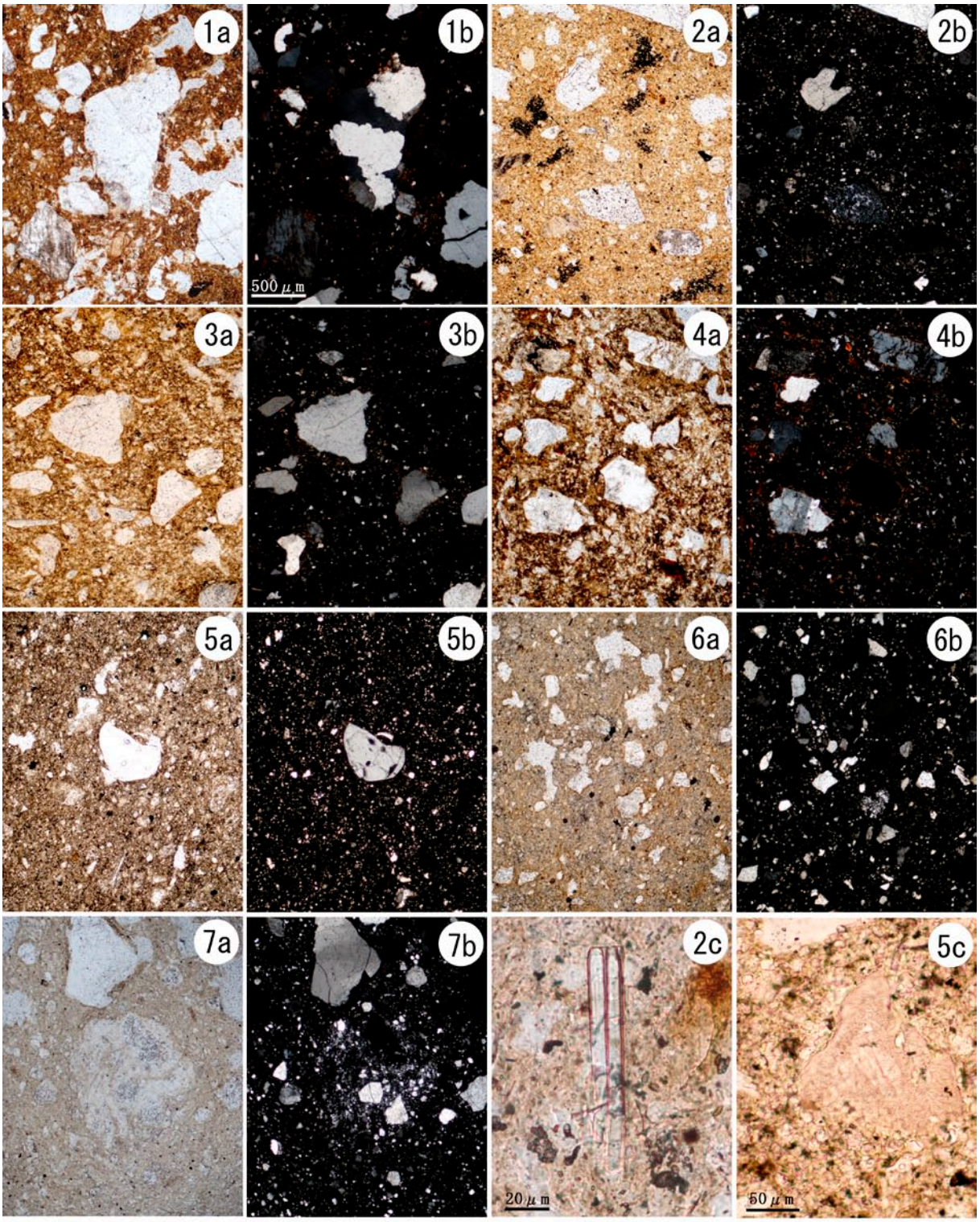


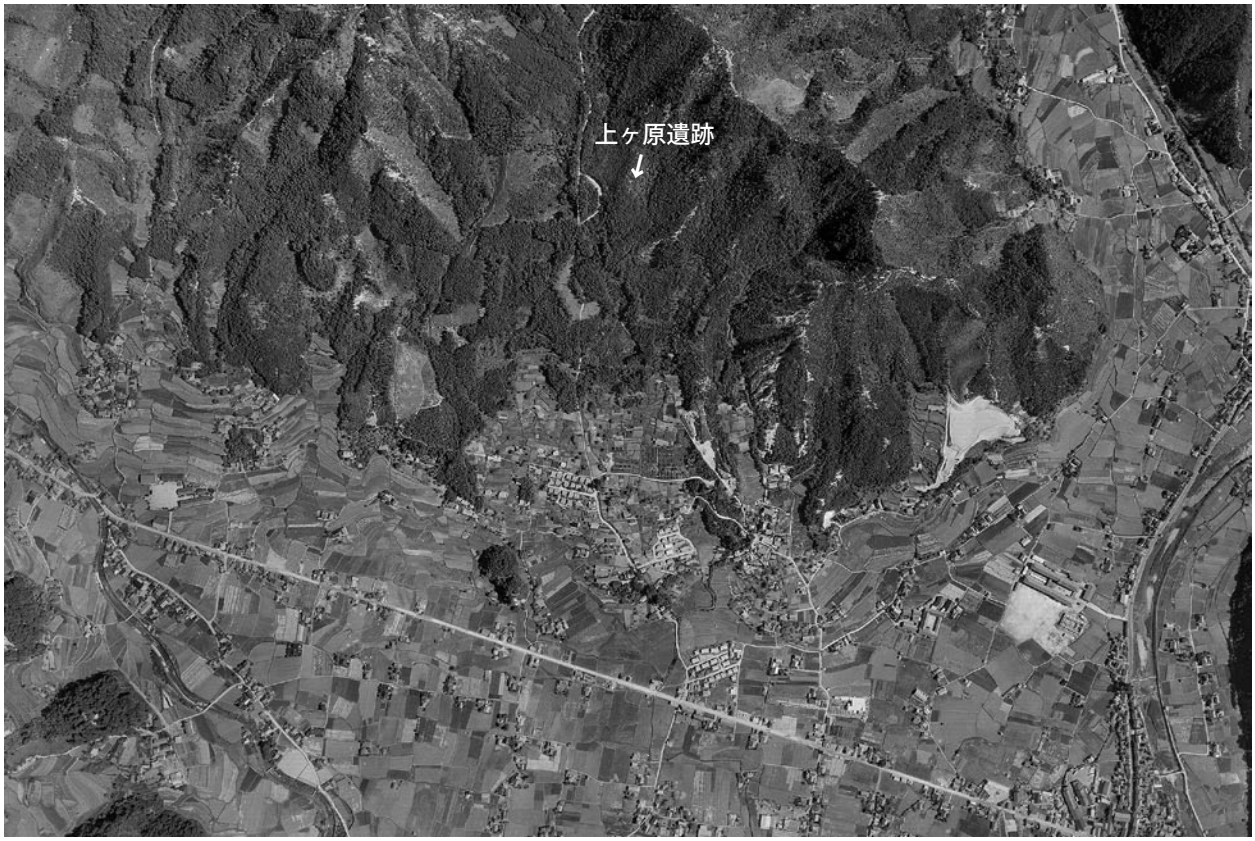
図２　中国地方における白亜紀～古第三紀の火山岩類の分布（日本の地質『中国地方』編集委員会編 ,1991 より引用）



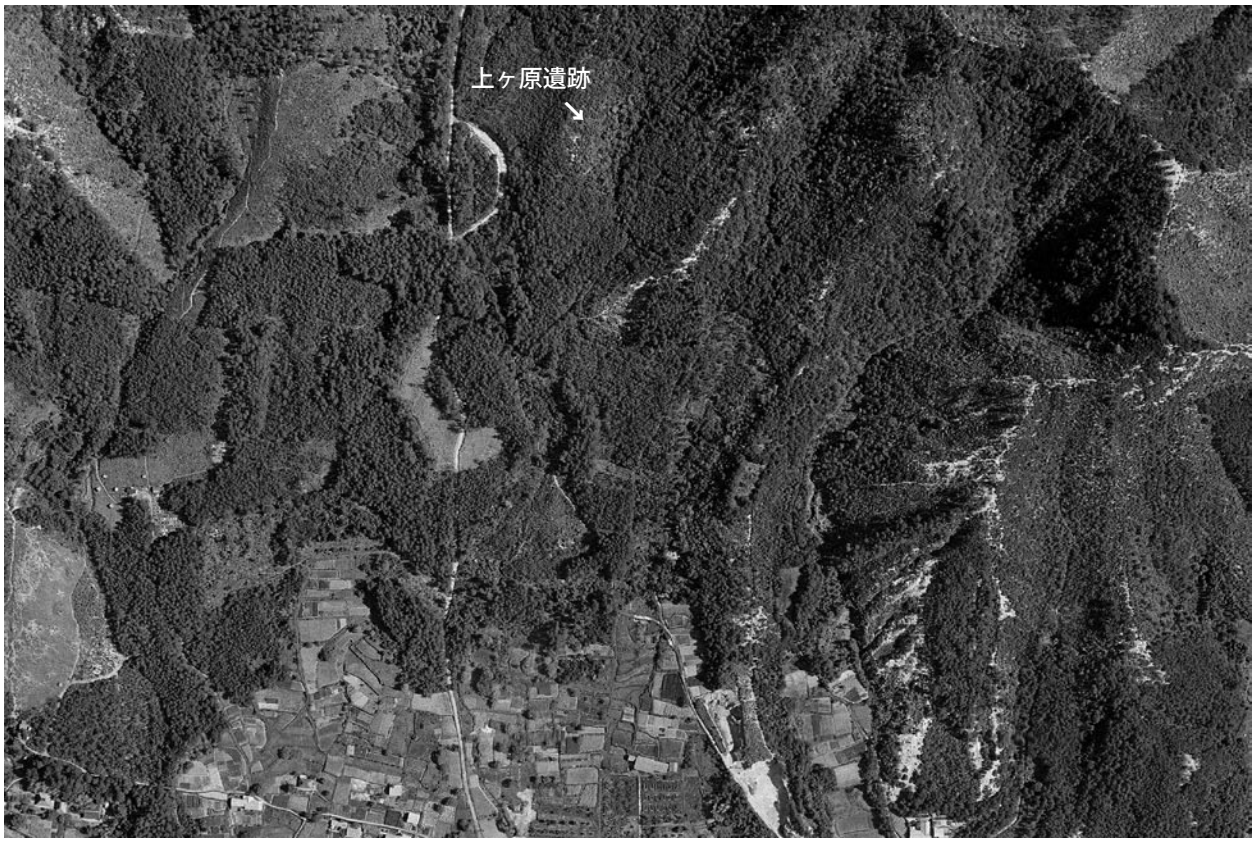
図版　土器胎土の顕微鏡写真（スケール :1a-7b 共通、a: 開放ニコル、b: 直交ニコル）
1a・1b. 試料 No.1　2a・2b. 試料 No.2　3a・3b. 試料 No.3　4a・4b. 試料 No.4
5a・5b. 試料 No.5　6a・6b. 試料 No.6　7a・7b. 試料 No.7
2c. 淡水種珪藻化石 (Eunotia biareofera, 試料 No.2)
5c. リング状にガラス化した長石 (試料 No.5)

図　版

上ヶ原遺跡遠景（航空写真・調査前・南から）



a　昭和 37 年 (1962) 撮影　上ヶ原遺跡周辺空中写真



b　昭和 37 年 (1962）撮影　上ヶ原遺跡周辺空中写真

図版 2

a　上ヶ原遺跡遠景（航空写真・調査前・西から）

b　上ヶ原遺跡（航空写真・調査前・西から）

a　上ヶ原遺跡（航空写真・19 年度調査後・西から）

b　上ヶ原遺跡（航空写真・20 年度調査後・東から）

図版 4

a　SH1（19 年度・北から）

b　SH1（20 年度・西から）

a　SH1 遺物出土状況（19 年度・北から）

b　SH1 遺物出土状況（20 年度・西から）

図版 6

a　SH2（南東から）

b　SH2 遺物出土状況（南東から）

a　SH3（北東から）

b　SH3 遺物出土状況（南東から）

図版 8

a　SH4（東から）

b　SH5（北東から）

a　SH6（南東から）

b　SX1・2・3（南から）

図版 10

a　SX1（西から）

b　SX1 遺物出土状況（北から）

a　SX2（西から）

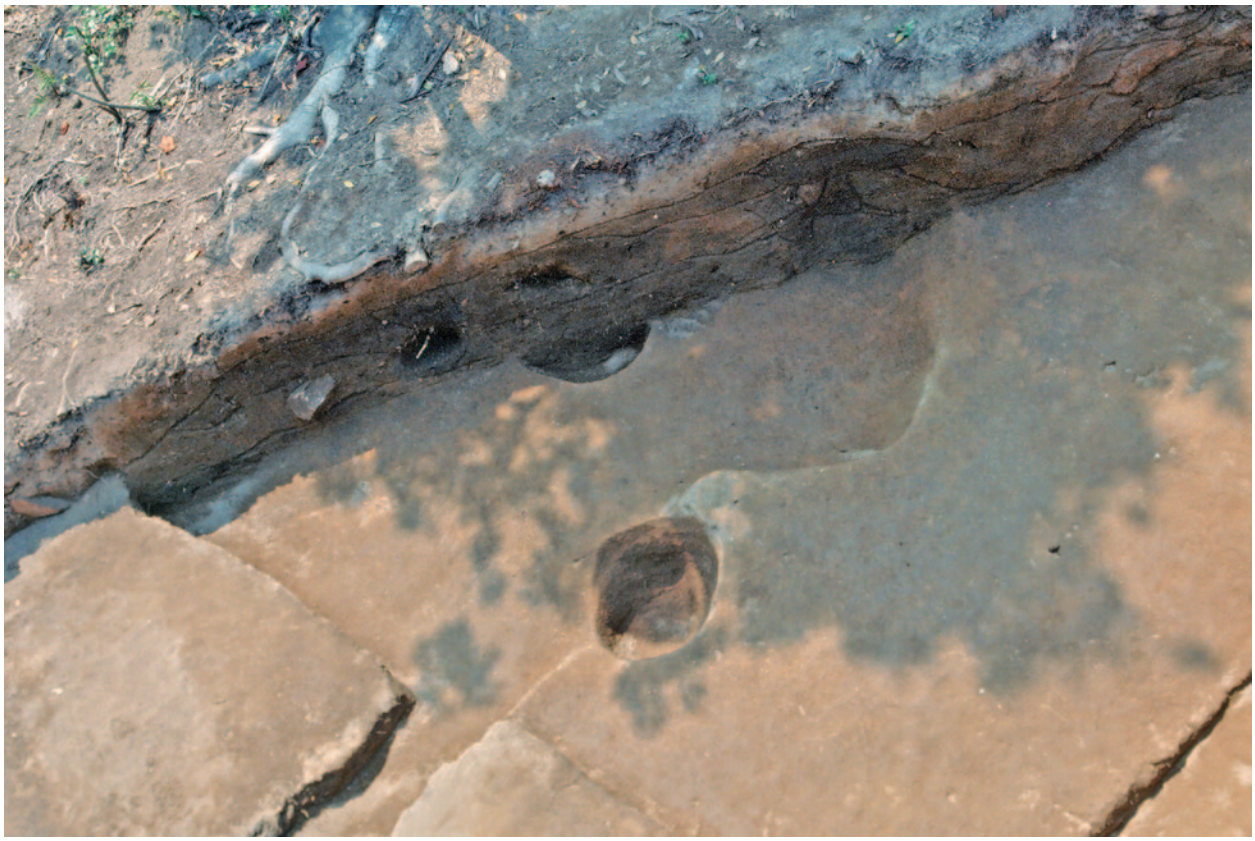
b　SX2 遺物出土状況（南西から）

図版 12

a　SX3（西から）

b　SX4（南から）

a　SX4 遺物出土状況（北東から）



b　SX5（北東から）

図版 14

a　SX5 遺物出土状況（南から）

b　中央・東側平坦面（南西から）

a　中央平坦面下段遺物出土状況（南西から）

b　東側平坦面（南西から）

図版 16

a　東側平坦面遺物出土状況（北東から）

b　SK1（東から）

a　SK1 遺物出土状況（南東から）

b　SK2（南東から）

図版 18

a　SK2 遺物出土状況（南東から）

b　SK3（北から）

a　配石遺構（西から）

b　配石遺構（北西から）

図版 20

出土遺物（1）

出土遺物（2）

図版 22

8

9

10

11

12

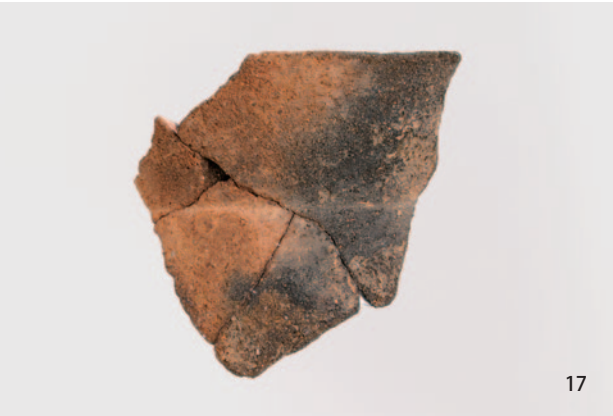
13

14

15

出土遺物（3）

16


17

18

19

20

21

22

23

出土遺物（4）

図版 24

24

25

26

27

28

29

30

31

出土遺物（5）

32

33

34

35

36

37

38

出土遺物（6）

図版 26

39

40

41

42

43

44

45

47

出土遺物（7）

46

48

49

50

51

52

出土遺物（8）

図版 28

53

54

55

56

57

59

58

出土遺物（9）

60

61

62

63

64

65

66

67

出土遺物（10）

図版 30

68

69

70

71

72

73

74

75

出土遺物（11）

76

77

78

79

80

81

82

出土遺物（12）

図版 32

83

84

85 86 87

88

89

89

90

91

出土遺物（13）

92

93
94

95

96

96

出土遺物（14）

図版 34

a　上ヶ原第 34 号古墳 (航空写真・調査前・北から)

b　上ヶ原第 34 号古墳 (航空写真・墳丘及び石室検出時・北東から)

a　上ヶ原第 34 号古墳 (航空写真・墳丘及び石室検出時・北東から)

b　墳丘調査前（南東から）

図版 36

a　墳丘検出状況（南東から）

b　墳丘南東面検出状況（南東から）

a　墳丘北東面検出状況（北東から）

b　墳丘北面検出状況（北から）

図版 38

a　墳丘及び周溝北西側土層（南から）

b　墳丘南東側及び開口部前面土層（南西から）

a　墳丘及び周溝南西側土層（東から）

b　墳丘南西側土層（南から）

図版 40

a　墳丘北東側土層（東から）

b　周溝南西側（南東から）

a　周溝北側（北東から）

b　石室検出状況（南東から）

図版 42

a　石室検出状況（南東から）

b　石積遺構上層検出状況（南東から）

a　石積遺構上層南東面検出状況（南東から）

b　石積遺構上層東面検出状況（東から）

図版 44

a　石積遺構上層北東面検出状況（北東から）

b　石積遺構東側土層（南東から）

a　石積遺構下層検出状況（南東から）

b　石積遺構下層南東面検出状況（南東から）

図版 46

a　石室奥壁（南東から）

b　玄室より開口部をのぞむ（北西から）

a　石室南側壁（東から）

b　石室南側壁玄室側（北東から）

図版 48

a　石室南側壁羨道側（北東から）

b　石室北側壁（南東から）

a　石室北側壁玄室側（南西から）

b　石室北側壁羨道側（南西から）

図版 50

a　石室床面上面敷石・遺物出土状況（北西から）

b　石室床面上面敷石・遺物出土状況（南東から）

a　石室床面上面敷石（北西から）

b　石室床面上面及び下面半面検出状況（南東から）

図版 52

a　石室床面下面及び遺物出土状況（南東から）

b　石室基底石（南東から）

a　開口部前面北東側遺物出土状況（東から）

b　墳丘基準面及び石室掘り方検出状況（南東から）

図版 54

a　墳丘基準面及び石室掘り方検出状況（南東から）

b　上ヶ原第 27 号古墳墳裾確認状況（東から）

97

98

99

100

101

102

103

104

出土遺物（15）

図版 56

105

106

107

108

109

110

111

112

出土遺物（16）

113

114

115

116

117

118

119

120

出土遺物（17）

図版 58

121

122

123

124

125

126

127

128

出土遺物（18）

129

130

131

132

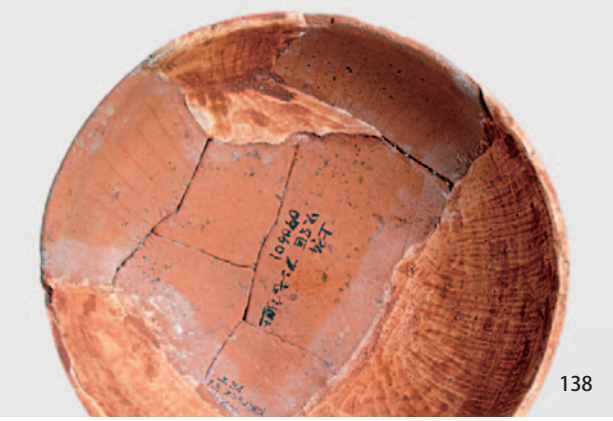
133

134

135

出土遺物（19）

図版 60



出土遺物（20）

145

145

146

147

149

148

148

150

出土遺物（21）

報　告　書　抄　録

ふりがな	うえがはらいせき・うえがはらだい34ごうこふん　－ひろしましあさきたくかべちょうおおあざなかのしょざい－
書　　名	上ヶ原遺跡・上ヶ原第34号古墳　－広島市安佐北区可部町大字中野所在－
副書名	
シリーズ名	財団法人広島市未来都市創造財団発掘調査報告書
シリーズ番号	第２集
編著者名	田村規充
編集機関	財団法人広島市未来都市創造財団　文化科学部　文化財課
所在地	〒732-0052　広島県広島市東区光町二丁目15番36号
発行年月日	西暦2011年6月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
上ヶ原遺跡（うえがはらいせき）	広島県広島市安佐北区可部町大字中野（ひろしまけんひろしまし あさきたくかべちょうおおあざなかの）	34101	―	34° 31′ 53″	132° 30′ 15″	20070723～20071005 20090209～20090306 20090420～20090820	650㎡	広島西部山系中野地区砂防事業に伴う埋蔵文化財現地発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上ヶ原遺跡	集落跡	弥生時代終末～古墳時代前期	住居跡６軒 テラス状遺構５か所 土坑３基 配石遺構１か所	弥生土器 土師器 須恵器 鉄器 石器	

要約

可耕地より高位の丘陵上に立地し，弥生時代終末期から古墳時代前期に営まれた集落である。広島湾岸の集落としては，比較的，出土土器中の山陰系土器の割合が高い。また，線刻の施された甑形土器が出土した。古墳時代後期の遺構も確認し，調査区からは同時期の遺物として環状瓶や装飾付須恵器などが出土した。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
上ヶ原第34号古墳（うえがはらだい34ごうこふん）	広島県広島市安佐北区可部町大字中野（ひろしまけんひろしまし あさきたくかべちょうおおあざなかの）	34101	―	34° 31′ 52″	132° 30′ 16″	20090420～20090820	100㎡	広島西部山系中野地区砂防工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上ヶ原第34号古墳	古墳	古墳時代後期	横穴式石室を埋葬施設とする古墳	須恵器 土師器 鉄器 金環	

要約

６世紀末～７世紀前半頃に営まれたと想定される横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。墳丘内には石積遺構ともいうべき石列を持つ。須恵器をはじめ，暗文土師器や鉄製紡錘車などが出土した。

（財）広島市未来都市創造財団発掘調査報告書　第２集

上ヶ原遺跡・上ヶ原第 34 号古墳

－広島市安佐北区可部町大字中野所在－

２０１１年６月

編集発行　財団法人広島市未来都市創造財団 文化科学部 文化財課
〒 732-0052　広島市東区光町二丁目 15 番 36 号
TEL　082-568-6511